岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 40

南　方　遺　跡

― 国立岡山病院地方循環器病センター建設に伴う発掘調査 ―

1981. 3

岡 山 県 教 育 委 員 会

文　化　課

序

このたび，中四国地方で中核的機能を有する国立岡山病院に地方循環器病センターの建設が計画されました。

国立岡山病院の立地する岡山市南方一帯は，旭川流域に形成された微高地上にあり，近隣の津島遺跡，百間川遺跡群などとならぶ，弥生時代を中心とする著名な遺跡であります。

岡山県教育委員会では遺跡の保護・保存の観点から，計画変更を含む設計変更を病院側に申し入れて協議を重ねてまいりましたが，当センターの設置目的，性格などからして変更は無理だと判断し，発掘調査を実施した次第であります。

調査の結果，弥生時代から古墳時代にかけての住居址や土壙が検出され，また弥生人骨が土壙からほぼ完全な姿で見つかるなど，人類学的にも考古学的にも貴重な資料を得ることができ，ここに本報告書刊行のはこびとなりました。

最後になりましたが，発掘調査並びに報告書作成につきましては国立岡山病院のご理解とご協力をいただき，また京都大学理学部，岡山理科大学理学部，岡山県文化財保護審議会委員，岡山市教育委員会の各位から多くの支援と助言を賜りました。厚くお礼申し上げます。

昭和56年3月

岡山県教育委員会

教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1. これは，国立岡山病院地方循環器病センターの建設に伴い，岡山県教育委員会が，国立岡山病院から委託を受けて実施した，岡山市南方（みなみがた）遺跡についての発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査期間は1979年12月１日～1980年２月29日で，1980年度に報告書作成作業を実施した。
3. この報告書の作成は岡山県教育委員会が実施し，文化課職員柳瀬昭彦・岡本寛久が担当した。
4. 遺構・遺物の実測・浄写は主に柳瀬・岡本が行い，山本悦世・宇垣匡雅の助力を得た。遺物の整理では文化課分室職員の援助があった。遺物の写真撮影は文化課職員井上弘が担当した。執筆・編集には柳瀬・岡本の両名があたった。執筆分担は文末に記すが，第３章第１節の土壙については，遺構を岡本が，遺物を柳瀬が担当した。
5. 出土人骨の鑑定については京都大学理学部自然人類学研究室池田次郎教授に依頼し，玉稿をいただいた。
6. この報告書の高度値は海抜高であり，方位は第１・２図以外はすべて磁北である。第１・２図は真北である。
7. 図版写真のうち遺物については，石器は約½，土器は約¼に統一している。
8. この報告書に掲載した第１図　調査地位置図は，建設省国土地理院発行の25000分の１地形図「岡山南部」「岡山北部」の一部を複製したものである。
9. この報告書に掲載した遺構実測図の基準は，岡山市教育委員会が同年度に実施した同病院看護婦宿舎増築に伴う発掘調査にあたって設定した原点・基準線を使用しており，この報告書のＮ０・Ｗ０は市教育委員会設定のＮ０・Ｅ０と一致する。
10. この報告書の挿図・図版では住居址⟶Ｈ・土壙⟶Ｐの略号を使用している。
11. 発掘調査で出土した遺物ならびに実測図・写真類はすべて岡山県教育委員会文化課分室に保管している。

目　　次

序
例　言
目　次
第１章　地理・歴史的環境 …… 1
第２章　調査の経過 …… 4
　第１節　調査に至る経過 …… 4
　第２節　調査の組織 …… 7
　第３節　調査経過の概略 …… 8
第３章　調査結果の概略 …… 12
　第１節　弥生時代の遺構と遺物 …… 12
　第２節　古墳時代の遺構と遺物 …… 51
第４章　ま　と　め …… 69
　第１節　住居址について …… 69
　第２節　土壙について …… 70
　第３節　遺物について …… 76
　第４節　本発掘調査の意義 …… 80
付　岡山市南方遺跡出土の弥生時代人骨について …… 82

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図（S＝1/25000） …… 1
第２図　南方遺跡周辺遺跡分布図（S＝1/75000） …… 2
第３図　発掘調査区域（斜線部分）位置図（S＝1/1500） …… 8
第４図　調査区域内遺構全図（S＝1/200） …… 9
第５図　遺構全図 (1)（S＝1/100） …… 10
第６図　遺構全図 (2)（S＝1/100） …… 11
第７図　弥生時代前期・中期前葉遺構分布図（S＝1/160） …… 13
第８図　弥生時代中期中葉・後葉遺構分布図（S＝1/160） …… 14
第９図　住居址７　遺構図（S＝1/60） …… 15
第10図　住居址７　出土土器（S＝1/4） …… 16
第11図　土壙24　遺構図（S＝1/30） …… 17
第12図　土壙24　出土土器（S＝1/4） …… 18

第13図　土壙116　遺構図（S＝1/30）…… 19
第14図　土壙116　出土遺物（S＝1/4，1/2）…… 20
第15図　土壙128　遺構図（S＝1/30）…… 21
第16図　土壙128　出土遺物（S＝1/4，1/2）…… 22
第17図　土壙 48　遺構図（S＝1/30），出土土器（S＝1/4）…… 23
第18図　土壙 1　遺構図（S＝1/30），出土土器（S＝1/4）…… 24
第19図　土壙 42　遺構図（S＝1/30）…… 25
第20図　土壙 42　出土遺物（S＝1/4）…… 26
第21図　土壙126　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）…… 28
第22図　土壙 3　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4，1/2）…… 29
第23図　土壙105　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4，1/2）…… 30
第24図　土壙 26　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4，1/2）…… 32
第25図　土壙 92　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）…… 33
第26図　土壙 27　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）…… 34
第27図　土壙 73・74　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）…… 36
第28図　土壙 25A・B　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）…… 38
第29図　土壙 61　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）…… 39
第30図　土壙 54　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）…… 39
第31図　土壙 55　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）…… 40
第32図　土壙 23・10・5　遺構図（S＝1/30）…… 41
第33図　土壙165　人骨実測図（S＝1/12），出土遺物（S＝1/4，1/1）　42
第34図　土壙166　人骨実測図（S＝1/12）…… 43
第35図　各種土壙，包含層出土土器（S＝1/4）…… 45
第36図　土壙，包含層出土石器Ⅰ（S＝1/1）…… 46
第37図　土壙，包含層出土石器Ⅱ（S＝1/2）…… 47
第38図　土壙，包含層出土石器Ⅲ（S＝1/2，1/4）…… 48
第39図　土壙，包含層出土石器Ⅳ（S＝1/2）…… 49
第40図　包含層出土鉄器，紡錘車（S＝1/2）…… 50
第41図　古墳時代前期遺構分布図（S＝1/160）…… 51
第42図　住居址1　遺構図（S＝1/60）…… 52
第43図　住居址1　出土土器（S＝1/4）…… 53
第44図　住居址2　遺構図（S＝1/60）…… 54
第45図　住居址2　出土土器（S＝1/4）…… 55
第46図　住居址3　遺構図（S＝1/60）…… 57
第47図　住居址3　出土土器（S＝1/4）…… 58

第48図　住居址３　出土石器（Ｓ＝１／２）…… 59
第49図　住居址３　埋土出土土器（Ｓ＝１／４）…… 60
第50図　住居址４　遺構図（Ｓ＝１/60）…… 61
第51図　住居址４　床面出土土器（Ｓ＝１／４）…… 62
第52図　住居址４　埋土出土土器（Ｓ＝１／４）…… 63
第53図　住居址５　遺構図（Ｓ＝１/60）…… 64
第54図　住居址５　出土土器（Ｓ＝１／４）…… 65
第55図　住居址６　遺構図（Ｓ＝１/60）…… 66
第56図　住居址６　出土土器（Ｓ＝１／４）…… 67
第57図　土壙　90　遺構図（Ｓ＝１/30）…… 68
第58図　土壙 103　遺構図（Ｓ＝１/30）…… 68
第59図　出土土器編年図 …… 78

表　目　次

第１表　土 壙 一 覧 表 (1) …… 71
第２表　土 壙 一 覧 表 (2) …… 72
第３表　土 壙 一 覧 表 (3) …… 73

図 版 目 次

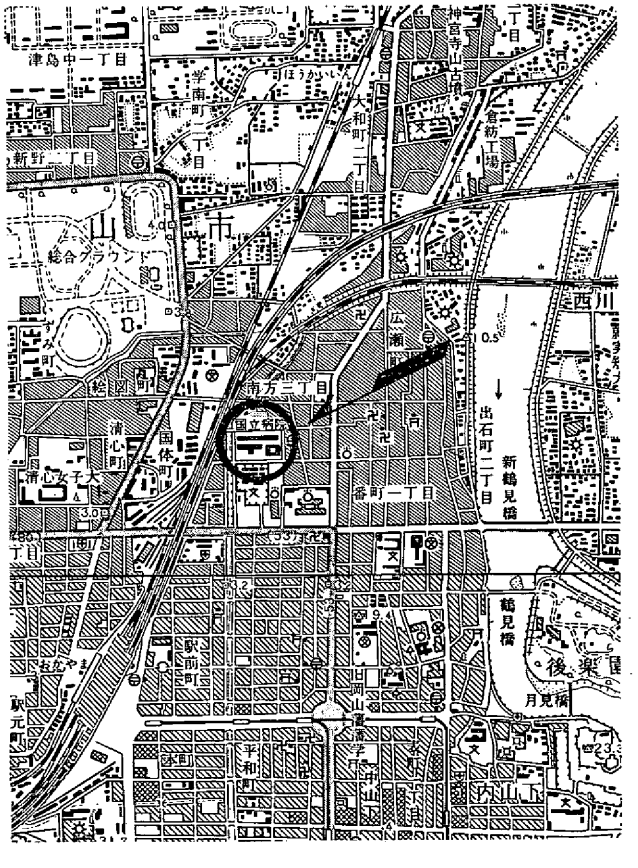
図版１　調査地区全景（東から）
図版２　1.　住居址１検出状況（北西から）
　　2.　住居址２検出状況（北から）
図版３　1.　住居址２検出状況（東から）
　　2.　住居址３全景（東から）
図版４　1.　住居址３南壁方形土壙全景（北から）
　　2.　住居址３土層断面
図版５　1.　住居址４検出状況（東から）
　　2.　住居址４床面遺物出土状況（北西から）
図版６　左）住居址５検出状況（南から）
　　右）住居址６検出状況（南東から）及び土層断面（北西から）
図版７　上）住居址７検出状況（南から）
　　中）・下）住居址７土層断面（北から）

図版８　1.　土壙 27 土器棺検出状況（東から）
　　2.　土壙 25Ａ 土器棺検出状況（西から）
図版９　1.　土壙 74 遺物出土状況（南から）
　　2.　土壙 31 遺物出土状況（東から）
図版10　1.　土壙 73・74 土器出土状態（西から）
　　2.　土壙 1 土層断面（東から）
図版11　1.　土壙 24 全景（北から）
　　2.　土壙128 土層断面（南から）
図版12　1.　土壙 42 土層断面
　　2.　土壙 61 土層断面
図版13　1.　土壙 40 全景（東から）
　　2.　土壙 48 半掘状態全景（北から）
図版14　　土壙165 人骨検出状況
図版15　　土壙 24・128　出土土器
図版16　　各土壙・包含層出土土器
図版17　　土壙 73・74・92 出土土器
図版18　　各土壙出土土器
図版19　　土壙 126・27Ａ　出土土器
図版20　　住居址３出土土器
図版21　　住居址 2・3・4 出土土器
図版22　　住居址・土壙・包含層出土石器
図版23　　土壙・包含層出土石庖丁
図版24　　各土壙・包含層出土遺物
図版25　　南方弥生人骨：頭蓋骨
図版26　　南方弥生人骨：下顎骨・四肢骨

第1章　地理・歴史的環境

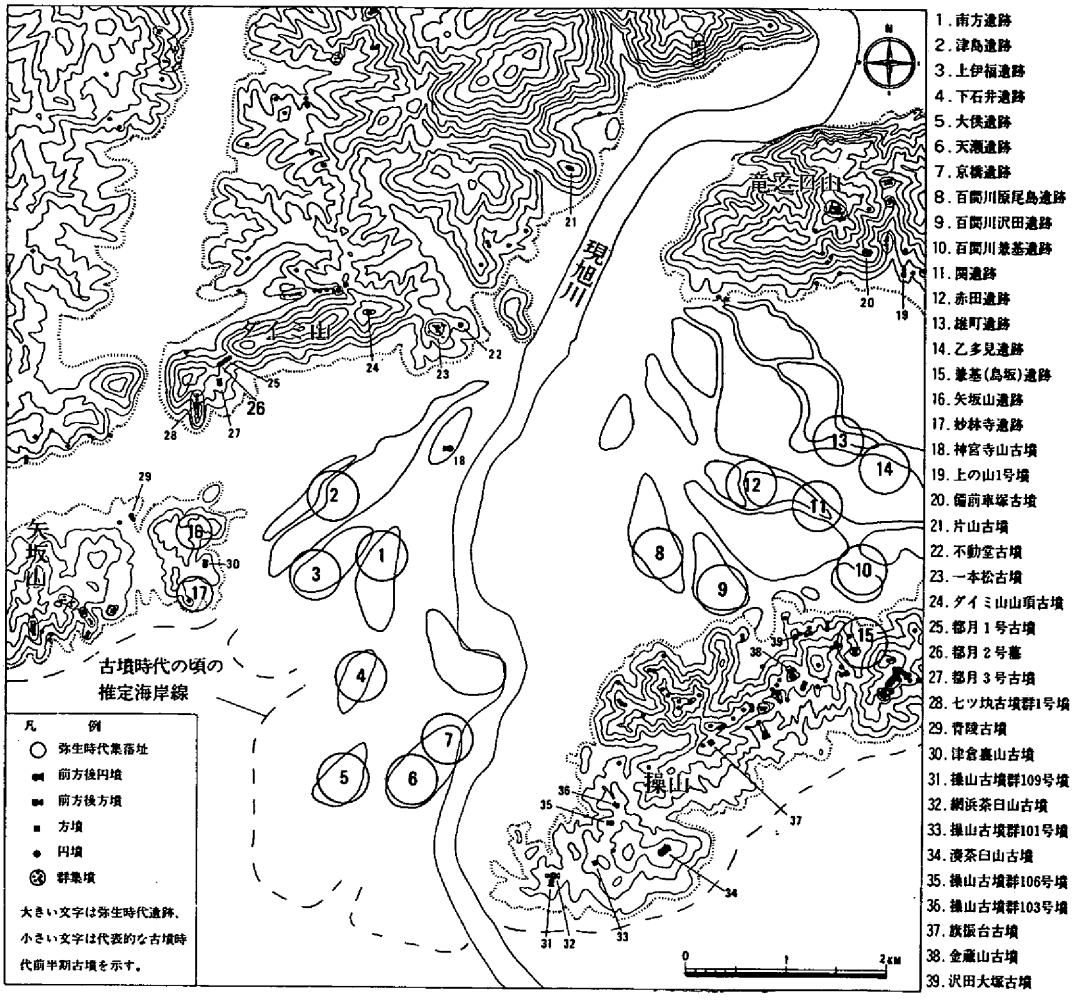
岡山市南方遺跡は，国鉄岡山駅の北北東一帯にあたる小字名蓮田・宝崎・関場・番町などを含み，弥生時代中期前葉を中心とした大集落遺跡として知られている。

真庭郡川上村にその源を発し，県のほぼ中央部を約150㎞にわたり南下して児島湾にそそいでいる旭川は，中国山地からの連なりの切れるダイミ山と竜之口山を結ぶ線から南側に土砂をはき出すように沖積平野を形成した。旧河道によって形成された自然堤防のつらなりが，遺跡立地の大きな指標になるとともに，各時代ごとの占地そのものが歴史を物語ることは言うまでもない。しかし，現在は岡山駅を中心として放射状に市街地が広がりつつあり，旧地形の復原をより困難にしている。第2図は狭義の岡山平野付近について丘陵部分を25mの等高線で示し，沖積平野部分を旧河道を追いつつ三角州を大きく捉えて復原したものである（註1）。旧河道は時代により少なからず流れを変えていたと思われるが，旭川東岸平野については祇園用水及び操山山塊の東端に向って蛇行して残るクリーク状の支用水のつらなりが，ほぼ旧河道を示しているとみて大過ない。つまり，東岸平野では操山山塊と竜之口山塊とに挟まれて，比較的大きくゆるやかに南東に蛇行して三角州が形成され，そのために竜之口山の南側から南東にかけての部分に後背湿地をつくる。また，西岸平野については，現在の三野水源地あたりから伊福町あたりまで，あるいは十日市のあたりまで流下する座主川や西川用水系の主支流が，旧河道をある程度示し，ダイミ山塊の南～西側に後背湿地を形成している。また，現旭川と祇園用水との間の，中島，東川原，西川原，浜にかけての中原付近から操山西端に向けて直線的な位置を占める部分は，地形的に大洪水をまともに受ける率が高かったと思われる。



第1図　調査地位置図　（S＝1/25000）

狭義の岡山平野が，旭川の土砂運搬作用によって南へ南へと縄文時代末期から急速に陸地化し，平安時代初期には，操山の南端の線よりまだ南の地点にまで達したことは，遺跡の分布が示すとおりで



第2図　南方遺跡周辺遺跡分布図　（S＝1/75,000）

あり，また，平安時代初期の鹿田荘などの開設で明らかである。現在，平野部で周知されている遺跡は，大きく捉えれば14～15カ所を数える。しかし，その中でも範囲・規模などがある程度でもわかっているものは少なく，想定される旧河道に沿った縁辺部の全部の自然堤防上に遺跡が立地していたとするならばその数は数倍にもなると想像できる。

縄文時代晩期にはすでに平野部に人間が足をふみ入れたことが，津島遺跡，雄町遺跡，百間川原尾島遺跡，同沢田遺跡などからの土器の出土でわかっている（註２）。これらの遺跡は，ほとんどそれ以降歴史時代に至るまで継続して，あるいは断続的に微高地上を占地して大規模な集落を形成している。

それ以前ではおもに丘陵部に生活のエリアがあったと思われるが，旧石器時代では操山山塊からのナイフ形石器の出土が１～２知られ，縄文時代では後期に津島の朝寝鼻貝塚などが知られるにとどまる（註３）。弥生時代前期になると，現在のところ津島遺跡で検出された乾田とそれに伴う杭

列や矢板列また住居址や高床式倉庫の在り方が，この地における水田経営の開始を証明する。そして，雄町遺跡で明らかにされた中期の用水路の存在（註４）や1976年から旭川放水路（百間川）改修工事に伴って現在も調査されている百間川河床の遺跡（８，９）での中期及び後期の水田址などの発見によって，稲作を基盤にした生活の営みがこの平野部のあちこちで展開されていく様子が判明しつつある。上記の三遺跡は，前述のように縄文時代晩期～平安ぐらいまでの複合遺跡であり，かなり大規模であると想定されるが，海に近いところに形成された大供（４），天瀬（５）などの遺跡はおもに弥生時代後期以降の集落址であり，陸地化の多少の遅れを物語っている。

一方，丘陵部の弥生時代の遺跡は，兼基（鳥坂）（15）の山の中腹発見の銅鐸（註５）や都月坂の鞍部の都月２号墓（註６）などの祭祀や墓にかかるものをのぞいては，ほとんど明確にはされていない。

古墳時代になると，旭川両岸平野を取り囲む丘陵上に，定型化された古墳では吉備地方最古である前方後方墳の備前車塚古墳（20）をはじめとし，後期群集墳まで入れると200基を越える古墳がつくられる。しかしながら，備前車塚古墳に続く古墳は同じ竜之口山系ではみあたらず，旭川西岸側のダイミ山山系の都月１号墳（25）あるいは七ツ坦１号墳（28）などの４世紀では古い時期の比較的小型の古墳，あるいは操山山系の操山109号墳（32），網浜茶臼山古墳（31）などの中型古墳などが続く。４世紀後半になると旭川東岸平野をのぞみ，湊茶臼山古墳（34），金蔵山古墳（38）などの160mを越す大型前方後円墳が築かれ，また５世紀前半には旭川の自然堤防に150mの神宮寺山古墳（18）が出現する。４世紀から５世紀前半における以上のような古墳の分布は，ある意味では旭川両岸平野に生活の基盤をもちながらも，地域の発展に不均衡があったことを窺わせる。

一方，平野部の古墳時代の遺構は，雄町遺跡や百間川遺跡群，天瀬遺跡（註７），今回調査にかかる南方遺跡（１）などで確認されているが，いずれもほとんどが古墳時代の初め頃のものであり，古墳時代の集落そのものの立地に不明な点が多い。　（柳瀬昭彦）

註１　旧河道及び三角州の復原については，正岡睦夫ほか「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会・1972の第１図雄町周辺の古地形及び出宮徳尚『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会・1975の第２図上東平野旧河道図を参考にし，現旭川西岸平野については高橋護氏の教示を得て作成したものであり，あくまで想定である。

註２　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う昭和53年度の発掘調査では沢田遺跡から縄文時代中期及び同後期の土器片が数片出土している（江見正己ほか「百間川原尾島遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会・1980，11）が，遺構の存在は晩期からを考えたい。

註３　鎌木義昌「原始時代」『岡山市史・古代編』岡山市役所　1962

註４　葛原克人「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972の126～127ページ

註５　註３に同じ

註６　近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第３号　1967

註７　1977年岡山市民病院増築に伴う岡山市教育委員会の発掘調査による。

第2章　調査の経過

第1節　調査に至る経過

岡山市南方2丁目の国立岡山病院敷地内においては，1959年（昭和34）の本館建設時に多量の弥生時代中期の土器片などが出土したことで広く周知されるようになった。その後，南方の地域においては1969年（昭和44）12月から翌年4月まで山陽新幹線の市道付け替えに伴う発掘調査を岡山市教育委員会が実施し，弥生時代前期～中期中葉に至る時期の土壙墓群などが明らかにされている（註1）。

国立岡山病院では敷地内に看護婦宿舎の新設を計画し，1978年（昭和53）6月に岡山市教育委員会との間で埋蔵文化財の取り扱いに関し，最初の協議をもった。岡山市教育委員会ではこの問題について，以下の行政対応を行っている。

1978年（昭和53）6月12日――第一回目の協議。看護婦宿舎新設の位置（本館の東側，現宿舎の南側）を遺跡の範囲外と思われる北西部へ変更の要望。

同年8月5日――第二回目の協議，国立岡山病院側からの建設予定位置での確認調査依頼。

同年8月7日付けで，「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について（依頼）」の公文書。国立岡山病院長――→岡山市教育委員会教育長。

同年8月19日付けで，「埋蔵文化財等の存在状況確認調査について」の公文書で確認調査の実施に関する回答。岡山市教育委員会教育長――→国立岡山病院長。同年8月30日建設予定地の2ケ所を岡山市教育委員会が試掘調査。現地表下約2ｍに遺物包含層を確認。

同年9月9日付けで，「埋蔵文化財確認の結果について」の公文書，岡山市教育委員会教育長――→国立岡山病院長。その中において，調査結果をふまえて文化財行政機関との協議を要請。

以上の経過をたどり，岡山市教育委員会と国立岡山病院との二者に県教育委員会が加わり，三者による協議に持ち越されることとなった。1978年（昭和53）12月5日，県・市両文化課の連絡協議会を持ち，看護婦宿舎建設に伴う発掘調査は県教育委員会と市教育委員会の両者で対応することで合意した。

しかしながら，1979年（昭和54）6月になって国立岡山病院から，看護婦宿舎のほかに昭和54年度事業で厚生省において予算措置が講じられ，地方循環器病センター建設の計画が急きょ提示された。このため岡山県・市両教育委員会としては，7月3日と8月1日の二度にわたり三者協議をもち，計画変更を含む設計変更を病院側に申し入れた。しかし，この地方循環器病センターは，中四国地方の核である岡山病院に全国でも早期に設置されるよう配慮されたものであり，当センターの性格，規模，位置などからして変更は無理との結論を得ることとなった。

そこで，発掘調査を実施するにあたり，看護婦宿舎と地方循環器病センター両方の調査を一括し

て岡山県で受託し，看護婦宿舎については岡山市遺跡調査団（団長水内昌康）に再委託することで三者の合意に達したものである。

資料1

国岡病発第729号
昭和54年9月1日

文化庁長官　あて

住　所　　岡山市南方2丁目13番1号
氏　名　　国立岡山病院長　奥田観士

埋蔵文化財発掘届の提出について

文化財保護法第57条の3の規定により下記のとおりお届けします。

記

1　発掘しようとする土地の所在地及び地番
　岡山市南方2丁目13番1号
2　発掘しようとする土地の面積
　地方循環器病センター用地　　400㎡
　看護婦宿舎用地　　225.6㎡
3　発掘しようとする土地の所有者及び氏名又は名称並びに現状
　所有者　厚生省　　名　称　国立岡山病院　　現　状　造成地
4　発掘しようとする土地に係る遺跡の種類・員数及び名称並びに現状
　種　類　弥生時代の包含層　　員　数　2ケ所（400㎡　225.6㎡）
　名　称　南方遺跡
5　当該土木工事等の目的及び内容
　地方循環器病センター（鉄筋コンクリート4階建）
　　当地方の循環器疾患を総合的に取扱うために，予防からリハビリテーションに至るまでの過程を一貫して行う新しいシステムを作り，地域医療レベルを高めることを目的とする。
　看護婦宿舎（鉄筋コンクリート5階建）
　　看護婦現員195人に対し，現在の宿舎42戸しかないため，今回60戸分を増築し，安定した看護婦確保を図ることを目的とする。
6　発掘の計画及び概要
　地方循環器病センター
　　当院本館に連携できるよう建築　建面積 400㎡　延面積 1600㎡
　看護婦宿舎
　　既設宿舎に並列して建築　建面積 225.6㎡　延面積 1128㎡

7　当該土木工事等の主体となる者

岡山市南方２丁目13番１号　　国立岡山病院長　奥田観士

8　当該土木工事等の施行担当責任者の氏名及び住所

未　定

9　発掘着手の時期

昭和54年10月１日

10　発掘終了の予定時期

昭和55年３月31日

11　その他参考となるべき事項

(1)　発掘調査により記録保存の措置後建築予定

(2)　昭和53年８月看護婦宿舎建築予定地について，岡山県教育委員会及び岡山市教育委員会立会のうえ試験発掘実施し，埋蔵文化財包蔵が確認されており，今回の発掘調査は当該教育委員会の指導により行うものである。

(3)　担当部課　国立岡山病院事務部会計課

課長　竹内　朕　　班長　藤井賢一　　係長　山根哲男

別添　(1)　岡山市街図　　(2)　国立岡山病院配置図

資料２

教文財二第3239号

昭和54年９月20日

文化庁長官　犬　丸　　直　殿

岡山県教育委員会教育長　佐　藤　章　一

埋蔵文化財に関する協議について

昭和57年９月１日付け，国岡病発第729号において，国立岡山病院長奥田観士より提出のありました標記のことにつき，下記のとおり協議が整いましたので，文化財保護法第57条の３の規定に基づき進達しますので，よろしくお取り計らいください。

記

1　建設予定地は，協議に先だち昭和53年８月確認調査を実施し，埋蔵文化財包蔵地と確認されている。

2　事前の発掘調査を実施し，記録措置を行う。

∘地方循環器病センター予定地（400㎡）―岡山県教育委員会が発掘調査を行う。

∘看護婦宿舎予定地（225.6㎡）―岡山市遺跡調査団が発掘調査を行う。

（柳瀬）

註１　出宮徳尚ほか『南方遺跡発掘調査概報』　岡山市教育委員会　1971

第2節　調査の組織

岡山県教育委員会は，上記の経過から地方循環器病センター予定地について昭和54年度事業として発掘調査を実施し，昭和55年度事業として整理・報告書作成を実施したものである。

調査の構成は以下に示す。

岡山県教育委員会

教育長	佐藤章一
教育次長	宮地暢夫
文化課長	近藤信司
課長補佐	吉光一修
主幹	西田聰一
文化財主幹	光吉勝彦（昭和54年度）
文化財二係長	河本清
主任	林正人（昭和54年度）
主任	田中健二
文化財保護主事	柳瀬昭彦
文化財保護主事	岡本寛久

調査協力者

内田竹三・内田　慧・坪井安雄・難波善吉・難波親治・犬飼虎雄・熊代政一・難波程治・森安毘雄・吉田磨佐夫・桐井キヨコ・栗坂満寿子

上記の方々には，12月～2月の厳寒期に現場の調査作業員としてご支援を受けた。また岡山大学学生宇垣匡雅君には特に遺構の実測に調査援助をいただいた。

整理・報告書作成協力者

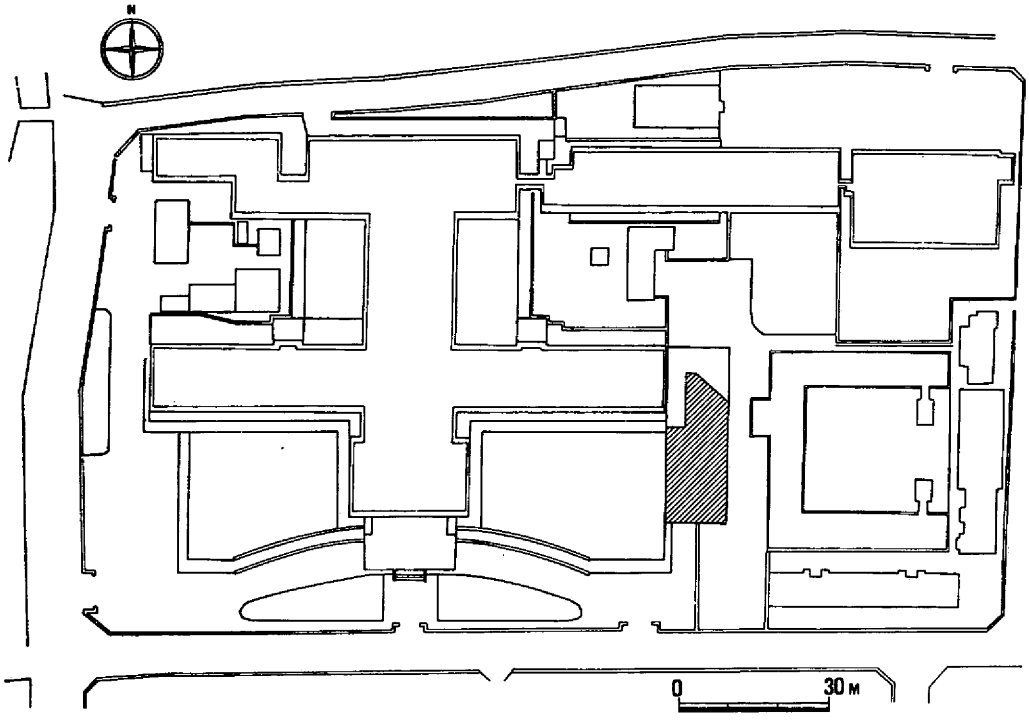
近藤友子・坪井和江・森本耶須子・綱沢靖枝・北村智子・禰木早苗・山本悦世

上記の方々には，遺物整理，実測，拓影，浄写の各作業に援助を受けました。

関係各協力者の方々に謝意を表しますとともに，最後になりましたが，来跡下さり出土人骨についてご指導・ご助言をいただいた京都大学理学部人類学教室の池田次郎先生，岡山理科大学の川中健二先生，また調査現場で遺跡全般にわたりご指導・ご助言をいただきました岡山県文化財保護審議会委員の鎌木義昌・近藤義郎・水内昌康の各先生方に厚くお礼申し上げます。　（柳瀬）

第3節　調査経過の概略

循環器病センター建設用地は既存の本館と看護婦宿舎に挟まれた空閑地で，建設予定面積は 400㎡である。用地の北端部分は本館ならびに看護婦宿舎への地下道の建設によってすでに掘削されて遺跡は破壊されているため，実質の調査面積は 245㎡であった。



第3図　発掘調査区域（斜線部分）位置図　（S＝1/1500）

病院敷地はかつての水田に盛土して造成されたものであり，その厚さは1.5mに及ぶ。このため，発掘作業の開始にあたって重機による造成土と水田層の除去作業を行い，12月10日より作業員を動員して本格的な調査を開始した。水田層を除去すると全面にわたって暗灰茶褐色土が現れた。ただ住居址2の部分では近時の採土によるかとみられる撹乱壙があり，小破壊をうけていた。この土層には大量の遺物が包含されていて，検出作業の結果，この土層上面がすでに遺構面であると考えられた。しかしこの上面には水田の影響で多量のマンガンの沈着がみられ，遺構検出は困難であった。このため，全面にわたって数cmの深さで削平し，その段階で再度遺構検出作業を実施した。この再度の検出作業で古墳時代の住居址といくつかの土壙が検出された。遺構にはおおむね暗灰褐色ないしは灰黒褐色の土が包含されていて，その存在は確認されたが，周辺の包含層との識別は難解だった。

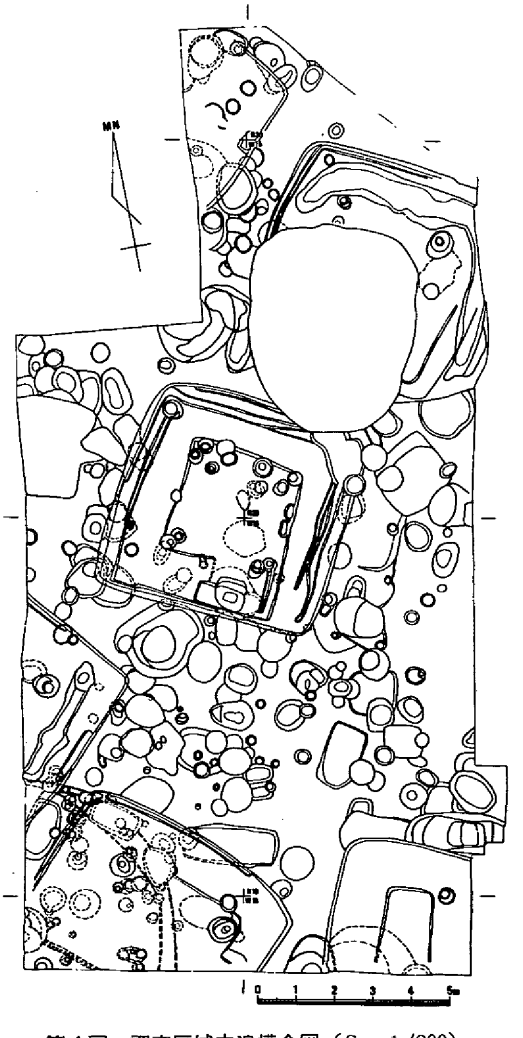
調査区は看護婦宿舎のある東側がもっとも標高が高く地山面で海抜2.45m前後を測り，西へ向かって緩やかに降っていく微高地をなす。南西隅の地山面での標高は 2.1m程度である。微高地の上面には東に薄く，西に厚い弥生時代包含層が形成されていた。住居址等の遺構を検出した後，包含層の掘り下げに入り，調査区東辺で微高地基盤層の黄褐色粘土ないしは粘性砂質土を検出した。調査はこの面を西へ追っていくこととした。遺構検出作業の中で，包含層中から検出される遺構もあって，包含層を切り込むものがかなりあると考えられたが，なにぶんにも多数の土壙が複雑に切り合い，それらの埋土がいずれも類似したものであることから，包含層の掘り下げ中途での遺構検出

は難しく，とくに住居址３の南から調査区南西隅にかけては複雑で，厚さ20㎝程度の包含層を完全に除去して地山の黄褐色粘土層上面で最終的に確認した遺構がほとんどであった。このように包含層を何層かに細分することは不可能で，多くの遺構を地山面で検出したことから，包含層出土として取り上げた土器は多量にのぼり，その時期幅も広い。そのぶんだけ遺構に伴う遺物が減少したことは否めない。住居址７については調査終了予定日間近で検出したため短時日で発掘し，住居址に伴う柱穴とそうでない柱穴との識別は明瞭になしえていない。

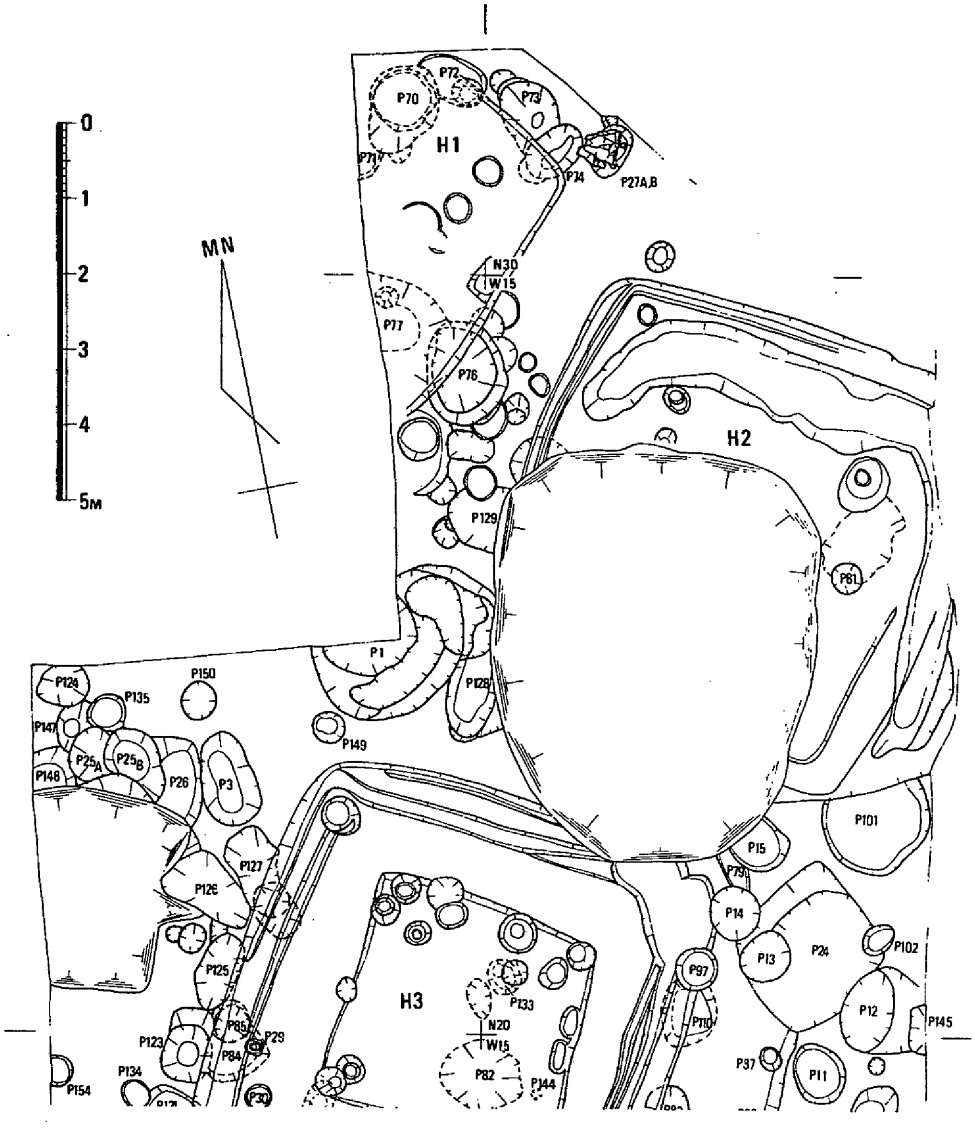
今回の調査では埋葬人骨が２体検出された。１体は完存の状況であったが，もう１体はわずかな痕跡をとどめるにすぎなかった。前者は調査開始当初の排水用側溝の掘削によって下肢の上端を破壊して確認された。南方遺跡における埋葬人骨の発見は，過去の新幹線建設に伴う発掘調査での出土例に続いて４例目であり，類例の乏しい資料として貴重なもので注目された。全身の検出が終了した段階で京都大学理学部池田次郎教授に現地で詳細な観察をお願いし，その後パラフィンによって骨を取り上げ，鑑定を依頼した。もう１体の人骨については上肢骨と肋骨の一部らしいほぼ骨粉状となったものを検出したが，取り上げは不可能だった。

実測の基点ＮＯ・ＷＯはほぼ同時に岡山市遺跡調査団によって実施された看護婦宿舎増築工事に伴う発掘調査に際して設置された基点ＮＯ・ＥＯであり，基準線はその点を通って既存宿舎と平行するように遺跡調査団が設定したものを使用している。その南北軸は磁北方向より東偏11° 18′である。したがって市教育委員会によって公表される遺構実測図と本報告書の同実測図は同一方眼の中に並置することが可能である。

調査経過の概要は以上のようであるが，最後に調査の結果について，全体的な概括を述べておく。調査地は東から西へ緩かに傾斜した微高地上にあり，地山面の標高は2.1ｍ～2.45ｍを測る。検出された遺構は弥生時代と古墳時代に限られ，土壙200基程度と弥生時代住居址１基，古墳時代住居址６基である。土壙には柱穴，土壙墓，土器棺墓，井戸等の機能を有するとみられるものがあり，弥生時代は居住区・墓域，古墳時代も居住区として利用されたことを示している。埋葬人骨が



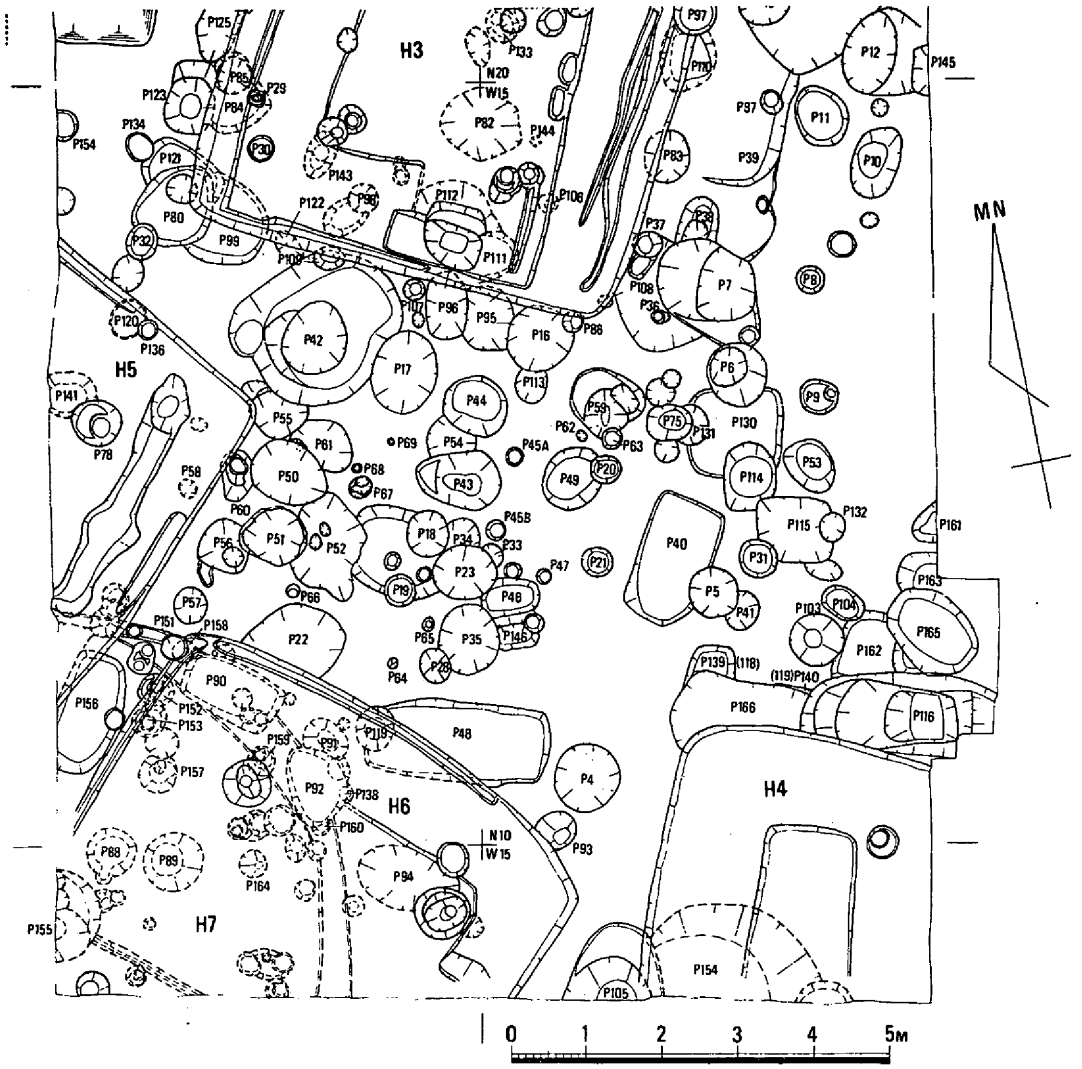
第４図　調査区域内遺構全図（Ｓ＝１/200）



第5図　遺構全図 (1)　(S＝1/100)

完全な姿で1体出土した。調査地での基本土層は次のようである。まず表土・造成土があり，その下に水田層が位置する。床土の黄色粘土層下底面は標高2,45mである。水田層下は厚さ2・3cm～35cmの包含層となり，この層の上面で古墳時代の遺構が検出される。弥生時代の遺構面は包含層の中に何層か存在する可能性があるが，識別はできず，包含層は一層として取り扱った。微高地基盤層は標高1.75mまで黄褐色粘土層，その下は1.45mまで茶褐色粘土層，その下には固くしまった黄茶褐色粘土層が標高1.3mまであり，その下は軟かい黄色粘土層となっている。基盤層確認の坪掘りは標高1mまでで止めている。

＜調査日誌抄＞



第6図　遺構全図 (2)　(S＝1/100)

昭和54年12月10日～15日	発掘調査開始。側溝掘削。水田層除去作業。包含層掘り下げ。人骨遺存確認。
12月17日～21日	包含層掘り下げ。遺構検出作業。H１・２検出・発掘開始。調査区東半中央部遺構精査・発掘・実測。
12月24日～27日	調査区東半中央部精査・発掘・実測。H３・４・５検出。H３・４発掘開始。
昭和55年１月７日～11日	調査区中央部精査・発掘・実測。H６検出。H５発掘開始。H３掘り下げ。
１月14日～18日	調査区中央部発掘・実測。H６発掘開始。人骨埋葬土壙検出作業。

1月21日～25日　調査区西半中央部精査・発掘・実測。人骨清掃・実測。

1月28日～2月1日　調査区西半中央部発掘・実測。H3実測。

2月4日～8日　調査区西半中央部発掘・実測。調査区北端部精査。H5実測。

2月12日～15日　調査区北端部精査・発掘・実測。調査区南西端精査・発掘・実測。H4実測。

2月18日～22日　調査区南西端部発掘・実測。H3・4実測。H3下精査・発掘・実測。

2月25日～29日　調査区南東端部精査・発掘・実測。調査区北西端部精査・発掘・実測。H1・2実測。H7検出。

3月1日～5日　H7発掘・実測。人骨取上げ。全域実測補足。調査終了。

（岡本寛久）

第3章　調査結果の概略

第1節　弥生時代の遺構と遺物

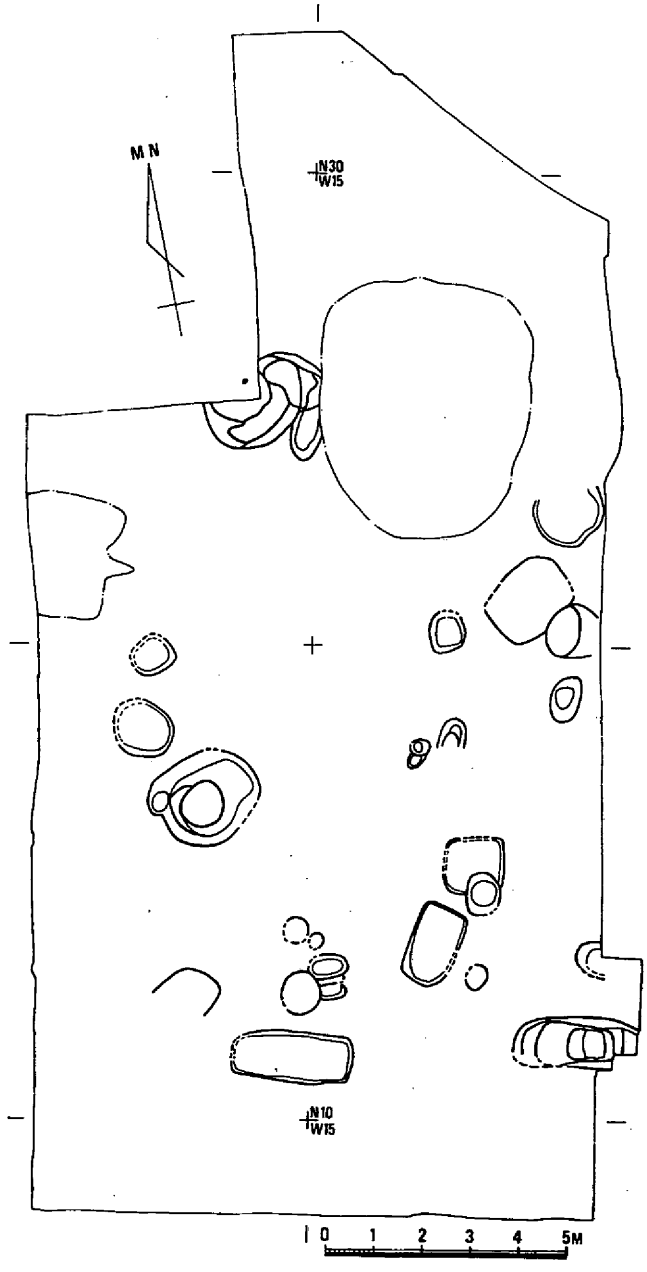
今回の発掘調査で検出された遺構はすべて弥生時代と古墳時代のものである。この節では弥生時代の遺構・遺物を取りあげ，その概略を報告する。

弥生時代の遺構は，種類からいえば，住居址と各種の土壙からなる。土壙についてはその形状・壙内堆積土ならびに出土遺物から種々の機能を想定することができ，その機能にしたがって土壙墓・柱穴等と称すべきであろう。しかし，本調査では，そのような機能を明確に限定できるものが僅少であったことから，人為的と考えられる掘り込みすべてを土壙と呼び，調査の必要上から任意に番号を付けて遺構名としている。したがって，単に土壙といってもその内容は千差万別である。なお，この土壙については第4章で若干の整理を行っている。遺構の年代幅は出土遺物の編年観からみて，前期末（註1）から中期後葉（註2）までの長期に及ぶ。しかし，これらの遺構の上面の包含層は発掘段階では細分することが困難であり，前述の時期幅の遺物を包含する一層としてしか捉えられなかった。したがって，各遺構の検出面は同一であり，さらに土壙出土の遺物の点数が少ない場合が多く，その中でも編年上の指標となる特徴を有するものはさらに限られるため，土壙の年代比定は困難とならざるをえなかった。このことから，土壙の年代比定は最終的には出土遺物の年代観に従ったが，まず，出土遺物から年代を確実に押さえられるものを摘出し，次にこれと切合い関係にあるものを遺物を参照しつつ年代比定した。さらには，年代比定した土壙との諸特徴の類似と遺物とから判断することとした。以上のように，土壙の年代比定については確実なものもあるが，多くのものについてはかなり曖昧さを残していることを考慮されたい。

次に各遺構の概略説明に入る前に，当調査区内での遺構のあり様が時代の推移とともにどのように変化していったかを概観しておきたい。弥生時代前期末から中期後葉までの時期を二分し，それぞれの時期の遺構分布図を第7図・第8図に図示している。

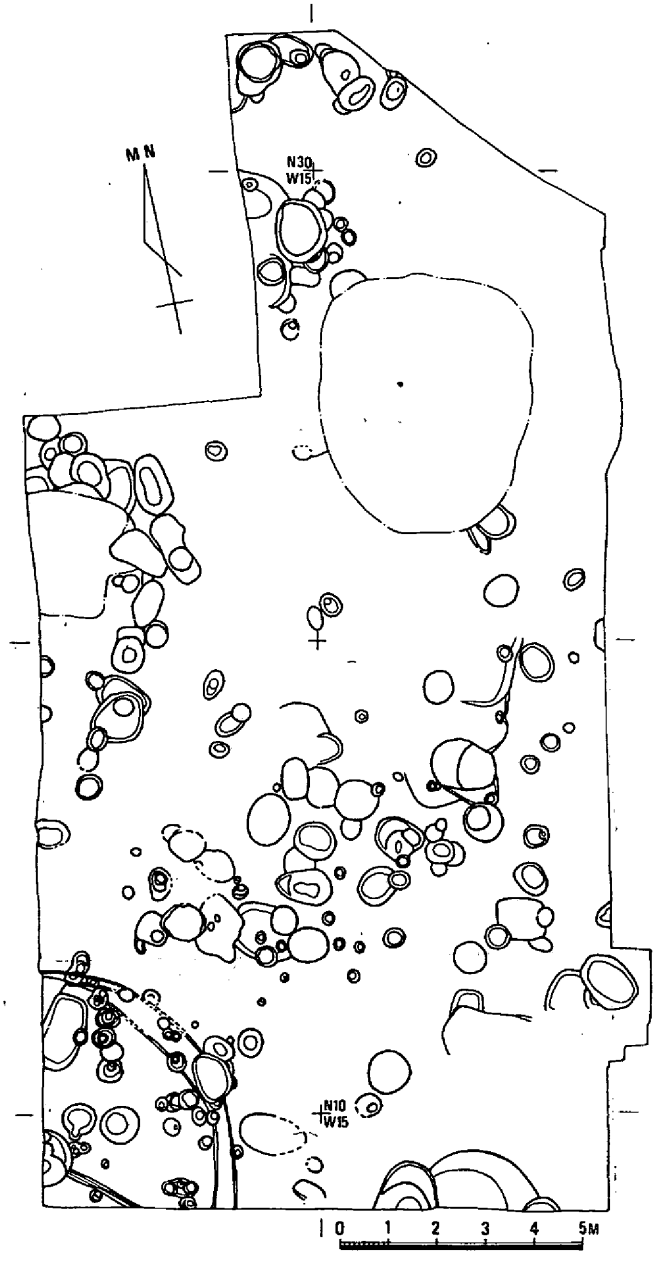
第７図は前期から中期前葉（註３）にかけての遺構の分布を示している。遺構はほぼ全域に分布しているが，南東部にやや集中するようである。とくに，長方形の土壙がいくつかみられるが，これらは第４章で述べるが，土壙墓の可能性が強く，このことから，この南東部分があるいは墓域として意識されていたのではないかと推察させる。この長方形土壙の他にも概して大型の土壙の多いのがこの時期の特徴のようであり，とくに，後述するが，炭を多量に含んだ層が互層になって壙内に堆積している大型土壙の散在することが注意される。

第８図は中期中葉（註４）から中期後葉にかけての遺構の分布図である。第７図と比較して一見して判ることは遺構数の爆発的な増加である。とくに中期中葉の遺構は多数を占める。この時期には南西隅に住居址も出現する。第７図の土壙と比べると，長径0.5～1ｍ前後の円形ないしは楕円形の土壙が大部分を占め，かなり様相を異にしていることがわかる。この時期に至っても南東部分には長方形の土壙がみられ，人骨が残存していたものすら検出され，依然墓域として機能していたことが窺われる。これに近接して住居址が営まれていることは，この時代の土地利用のあり方を考える上で考慮すべき事象であると考える。この土壙墓と住居址を除いた他の遺構はだいたい３ケ所に集中すると見ることができる。住居址２・３による削平消失の可能性もないではないが，検出土壙の深さから判断して，おそらく当時の状況をかなり保っているものと考えたい。３ケ所とは中央部南寄り，北端，北西端である。前者では柱穴と考えられる土壙が数基あり，この部分に住居址ないしは建物



第７図　弥生時代前期・中期前葉遺構分布図（S＝1/160）

址のあったことが想定される。まとめることはできなかったが，1棟さらには建替えも含め，数棟の建物があったであろう。後の2ケ所では北端部で2基，北西端で1基の土器棺が検出されているが，先の土壙墓群とはやや距離を持っていることが注意される。土器棺周辺の土壙は不整形なものがかなりあり，明確に柱穴と考えられるものはなかった。しかし，完形の土器はもちろんのこと，多量の土器片を含む土壙も限られているため，この2ケ所での遺構の集中については判然としない。北端部における2基の土器棺墓の存在はあるいはこの部分も墓域，それも特別のそれであるかとも考えさせ，土壙墓群との関連で興味がもたれる。



第8図　弥生時代中期中葉・後葉遺構分布図（S＝1/160）

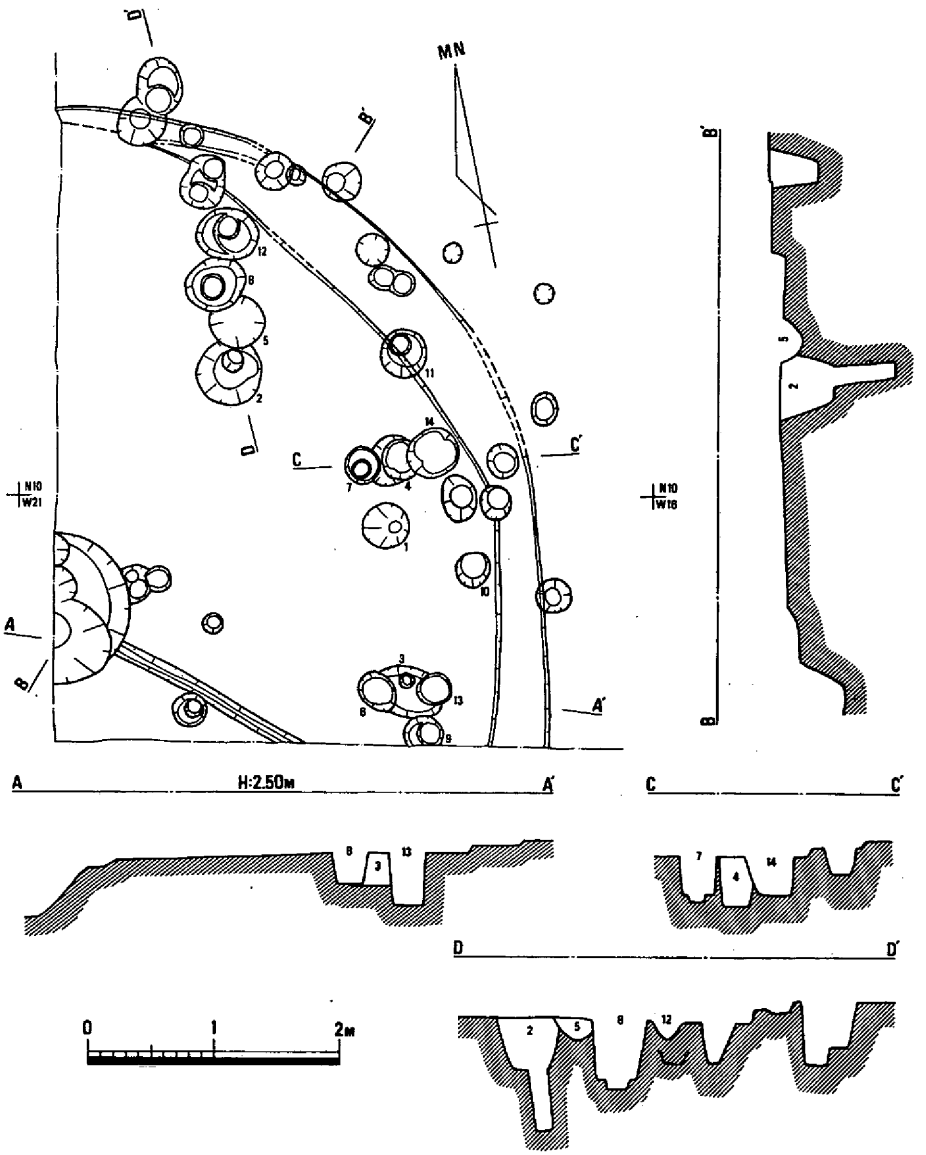
当調査区における弥生時代の遺構は中期後葉をもってほぼ消滅し，明確に後期と判定されるものは認められない。ただ，出土した土器のなかには後期前葉の形態を示すものがごくわずか存在する。以下，主要な遺構についてその概略を記す。

住居址7（第9・10図・図版7）

調査区の南西隅で検出された円形の竪穴住居址である。全形の$\frac{1}{4}$が調査区内に位置していた。二重の壁体が確認され，内側の壁体に囲まれた部分の地山面はその外側より6㎝程度落ち込んで低くなっていた。この地山面は住居址の掘り方底面にあたり，調査区南西隅付近の壁面土層観察から住居址7には重なり合った2枚の貼床層が確認されてその境界面の高度が外側の壁体内の地山面と一致することから，この住居址は拡張されたものと判断される。第9図は掘り方の実測図である。貼床の厚さは下層が6㎝，上層が8㎝程度を測る。住居址7は住居址6の下に位置

していて，住居址６の貼床層と住居址７の上層の貼床層との間には厚さ５～７㎝の暗灰褐色土層が介在しているが，この層の上面では住居址７は検出できず，貼床層の存在で住居址７を認めた。したがって，その残存状況はけっして良好とは言えないものであった。

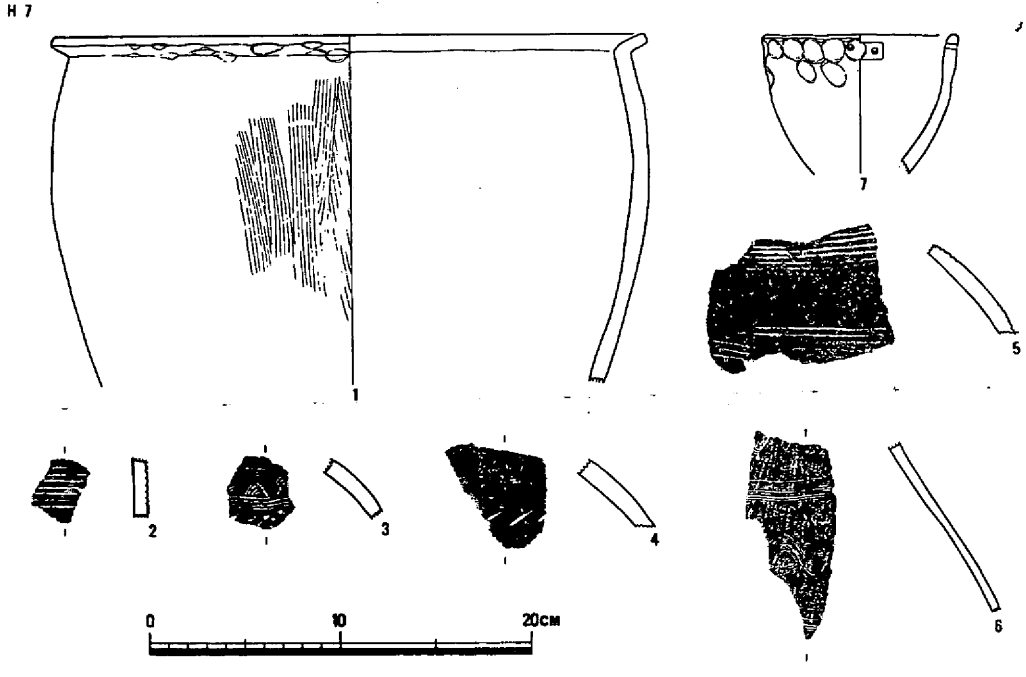
住居址の規模は内側で直径8,4ｍ，外側で9.4ｍ程度と推定される。住居址のほぼ中央には直径1.2ｍの大きな土壙があり，炭が多量に含まれていた。壙内は拡張のためか複雑で，複数の土壙の切り合いによるとみられる段がみられた。１条の中央土壙から壁体へ伸びる幅12㎝，深さ６㎝の小



第９図　住居址７　遺構図　（S＝1/60）

溝がある。柱穴は主なものについて第９図で番号を付したが，それ以外のものについてはどれが住居址７に伴うものか不明確である。柱穴９は住居址７には伴わない。主柱穴の分布をみると，３ケ所に集中して切り合い関係をもっていることがわかる。この切り合い関係は拡張を含む建替えによって生じたと考えられ，２・５・８・12の例からすれば最低４度の建替えが考えられる。それぞれの組合わせは困難であるが，一応，数の連続で示している。しかし，推定の域を出ない。組合わせは判然としないが，３ケ所は中心から30度ずつの角度差をもっているために12本柱ではないかとみられる。柱穴の規模は直径30～50㎝である。壁体溝はなかった。

遺物　残存状態が悪かったため，住居址の時期を判断する遺物は貼床層出土のもの（**1**～**5**・**7**）と柱穴１出土のもの（**6**）を含めごくわずかしかなかった。**1**・**2**・**5**・**7**は胎土に砂粒を多量に含んでいて，**2**・**5**の施文は篦描沈線である。**1**は厚手で口縁端面をもち，口縁部に指頭圧痕を残している。**7**は２孔１対の紐孔をもつ。口縁部は指頭圧によって成形されている。いずれも前期末から中期初頭の土器であろう。**3**・**6**は櫛描文で飾られる。**4**は刺突文をめぐらせている。**6**の内面には篦削りが認められる。いずれも小片で時期を明確にし難いが，**3**は中期前葉，**4**・**6**は中期中葉と考えられ，したがって住居址７は中期中葉を遡らず，切り合い関係にある土壙88・89・92出土遺物から判断しても中期中葉頃と考えられる。しかしなにぶんにも僅少の遺物と複雑な遺構の重複地区であるため断定は困難である。　（岡本）



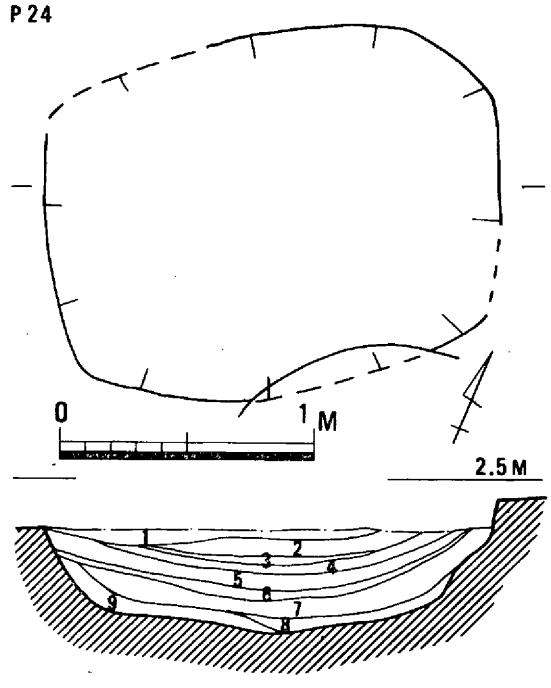
第10図　住居址７　出土土器　（S＝1/4）

土 壙 24 （第11・12図，図版11・15）

N21・W10に位置する。やや胴張りの長方形を呈し，長さ1.8m，幅1.5m，深さ0.5mを測る。長軸方向は北東一南西方位をとる。壙内堆積土は9層に分けられるが，底より順序よく，中央が厚く周辺がやや薄い薄層となり堆積している。各層に炭を含むが，第2層・第3層の底には炭の薄層が形成され，底の第8層は炭層となっていて，炭を含む割合が各層で違っている。第6層と第9層には地山（微高地基盤層）の黄色砂質土が粉砕された状態の小粒となって包含されているため，土層観察では鮮やかな縞模様をみせる。壙内各層から土器片の出土をみたが，第7層からはとくに大型破片が重なった状態で出土した。壙内堆積土は大きくみれば下層になるほど粘性が強く，粘性度を指標とすれば，第4層と第5層の間で上下2層に分離できる。図示した土器はいずれも第7層出土のものであろう。

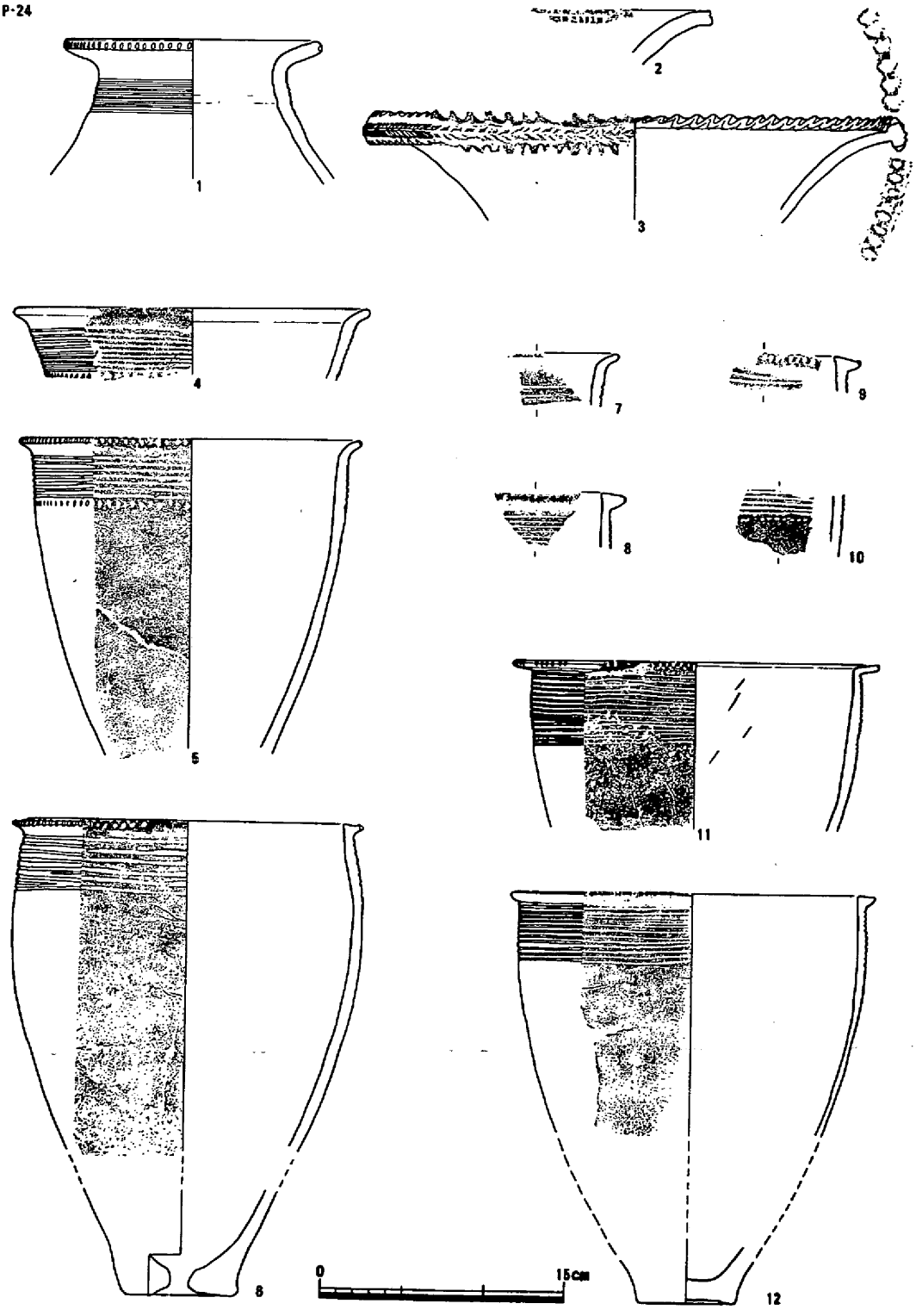
遺物　壺形土器と甕形土器の2種類が出土している。個体数としては，壺形土器6個体，甕形土器10個体＋αを数えるが，第12図は図示できるもののすべてである。

壺形土器はいずれも口径の¼程度の破片である。1は「ハ」の字に開く頸部から,「く」の字状に外傾する口縁部をもち，口縁端部外側には6～7㎜間隔で米粒状の刻み目を施している。頸部には8本の箆描沈線が繞る。2は口縁部のみであるが，端面に1条の沈線を繞らせたのち刻み目を施している。3はラッパ状に外反して開く口縁端部の上下に，端面に添って断面三角形の凸帯を貼り付け，凸帯頂部方向からの刻みにより，波形に整形している。口縁端面には綾杉状に細かな刻みを加えてある。1～3のいずれも内外ともに丁寧に，押圧と横ナデで調整されている。また，赤褐色を呈し，胎土に大きなもので4㎜前後の石英粒が散見されるほか，2㎜前後の長石が目立つ。甕形土器は形態的には，「く」の字口縁を有するもの（4・5・7）と倒「L」字口縁を有するもの（6・8・9・11・12）に大別できる。施文からすれば，いずれも口縁部直下から数状の箆描沈線をもつが，ほかに施文のないもの（12）や口縁端面に刻み目だけのもの（6），刻み目＋沈線施文部下に刺突文を繞らせるもの（5）や刺突文だけのもの（4）など前述の2形態の特徴と合わせて一定の規則性はない。また，刻み目についても比較的口縁全体に整然と施文する5



1. 暗灰茶褐色土
2. 灰黒褐色土
3. 含炭灰黒褐色土
4. 含炭灰黒褐色土
5. 灰黒色土
6. 黄色砂質土斑暗灰色粘性土
7. 含炭暗灰色粘性土
8. 炭層
9. 黄色砂質土斑暗灰色粘性土

第11図　土壙24　遺構図　（S＝1/30）



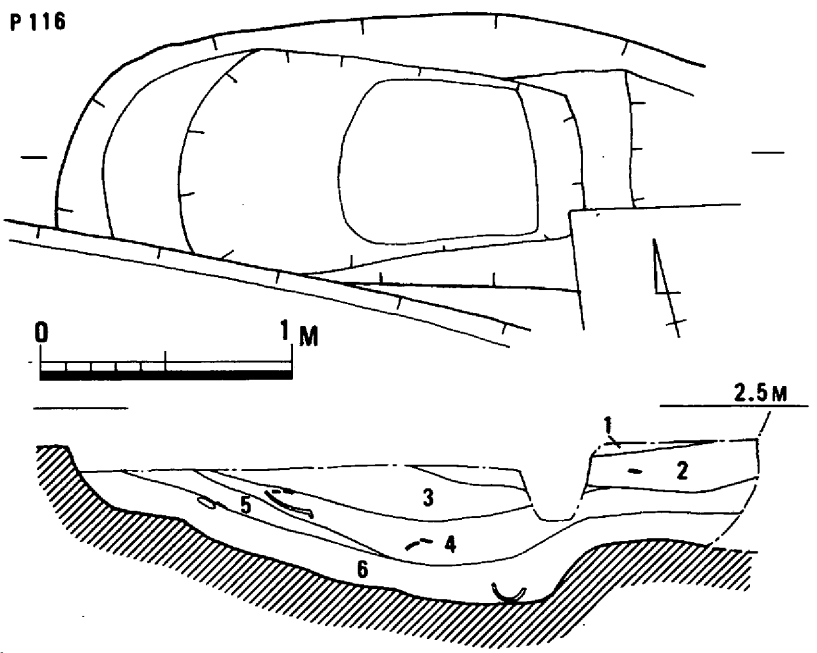
第12図　土壙24　出土土器　（S＝1/4）

のほかに，間隔の雑な8や，口縁部の4ケ所に数センチにわたり無文部をもつ6，数個ごとに多少の間隔を開ける11など変化に富んでいる。刺突文も施文工具により縦長楕円（5）や横長楕円（10），三角形（4）の3種がある。4～12のいずれも赤褐色を呈し，内外とも押圧，ナデ，篦磨きなどで丁寧に調整している。胎土に比較的大粒（3～5㎜）の長石・石英が粗く入っている。

土器の出土状況及び形態等の諸特徴から，ほぼ単一時期における一括資料として捉えられる。特に甕形土器についていえば，「く」の字状口縁と，より新しい時期を示す特徴である倒「L」字状口縁が共伴することから，弥生時代前期後葉の一時期を与えることができよう。

土 壙 116 （第13・14図，図版16・24）

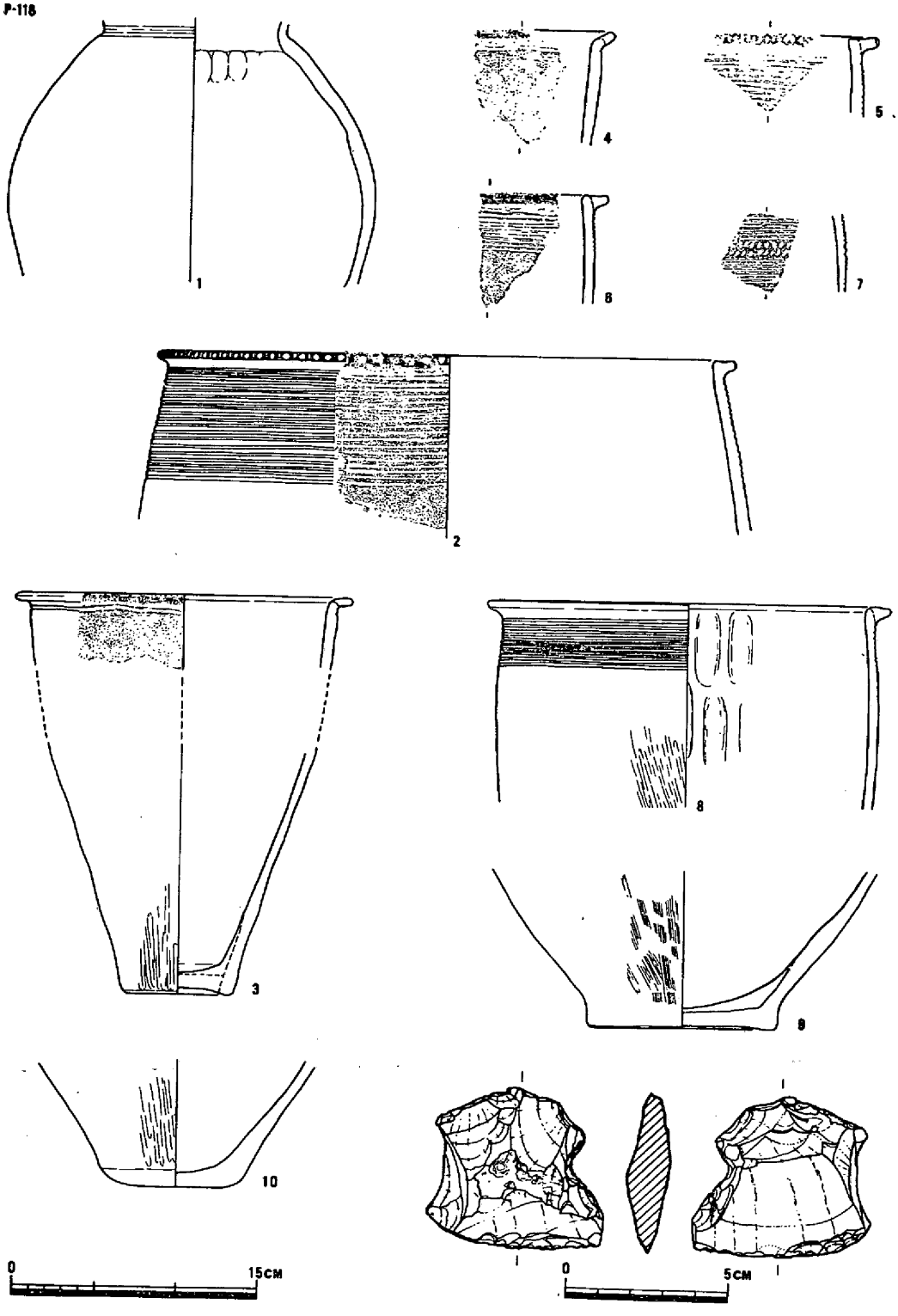
N12・W10に位置する。長楕円形の平面形態をもち，主軸方向は東一西方位をとる。検出部分で長さ2.6m，幅1.1mを測り，最深部分で0.6mを有する。壙底面はかなり複雑な状況を呈するが，おおむね階段状に中央へ向かって深くなり，おおざっぱにいえば，緩やかに凹む底面の中央部分が20㎝程度でさらに一段深く落ち込んでいるとみることができよう。壙内堆積土は6層に分けられるが，大きくは第3層と第4層を境として上下2層に分離しうる。第4層と第6層には炭や土器片をかなり含むが，第4層ではさらに多量の焼土塊が認められた。第4層と第6層の間層である第5層の黄褐色砂質土は地山の砕粒であり，第4層・第6層と鮮やかなコントラストをみせる。この土層状況は，形態を異にしているが，前述の土壙24とよく類似している。遺物は主に第4層と第6層から出土したが，とくに第4層に集中し，かなり大型の破片もみられた。図示したものはいずれもこの両層から出土したものである。



1. 暗褐色土　4. 含炭暗褐色土（焼土含む）
2. 黒褐色土　5. 暗灰褐色土斑黄褐色砂質土
3. 暗褐色土　6. 暗灰褐色土

第13図　土壙116　遺構図（S＝1/30）

遺物　壷形土器，甕形土器，石庖丁が出土している。壷形土器と思われる破片数は多いが，個体数としては図示した1，9，10の他は1～2個体しかな



第14図　土壙116　出土遺物　（S＝¼，½）

い。甕形土器も10個体くらいであった。

壺形土器1はナデ肩の胴部を有し，頸部界に浅い1条の篦描き沈線を施す。土器の内外面ともに剝離部分が多く，調整痕跡が不明な点が多いが，外面はナデ，内面は押圧とナデによるものと思われる。9は大型の甕形土器の底部の可能性もある。外面は刷毛，内面はナデによっている。10は底面端部が丸くなるほど磨滅している。外面は篦磨きか。いずれも黄味を帯びた赤褐色をしている。胎土には1～5㎜の砂粒を多く含んでいる。

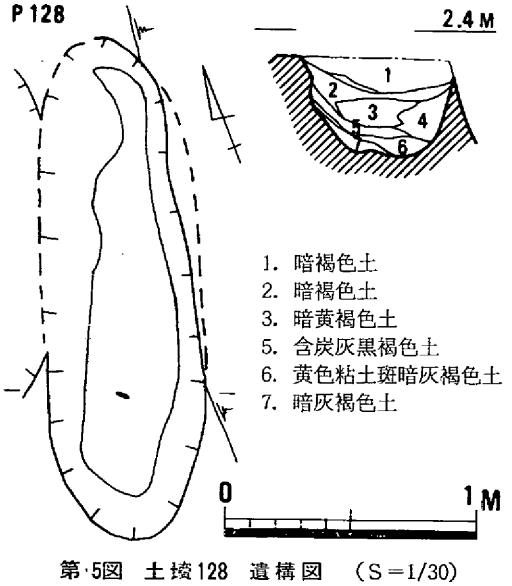
甕形土器は口縁部が「く」の字状の4と手法的には同類の3が口縁屈曲部下に1条の沈線を繞らせているのに対し，三角凸帯を口縁端の外側に貼り付けて繞らせる（倒L字）手法の2，5，6，8は口縁下の篦描沈線の数も多く，後出の様相を呈している。また7は篦描沈線の間に2条の刺突文帯をもつ。甕形土器の調整は，いずれも内外面ともに口縁部付近は横ナデ，外面下半には篦磨きを，また内面は押圧及びナデをそれぞれ丁寧に行っている。いずれも胎土・色調とも壺形土器と大差はない。

石庖丁は正面の一部に自然風化面をもつ。短辺の片側にのみ抉りを残していることから破損後の再加工品であろう。サヌカイト製で，36.8gを計る。

時期は土壙24とほぼ同一の，弥生時代前期後葉の中で捉えられる。

土 壙 128 （第15・16図，図版11・15・23）

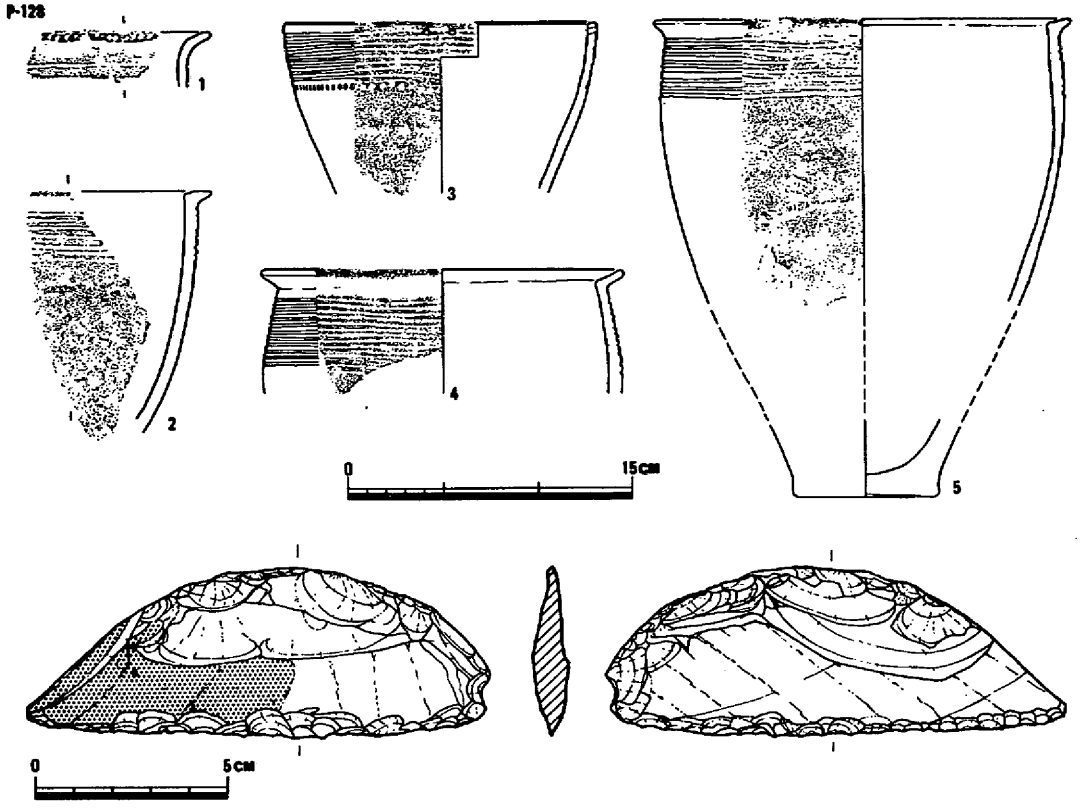
N25・W15に位置する。長楕円形の平面形態をもち，長さ2m，幅0.6mの規模である。長軸に直交する断面はほぼU字形をなし，深さは0.4mを測る。底面はわりに平坦であるが，長軸方向の断面をみると中央付近がもっとも深く，ゆるやかな曲線を描いている。長軸方位はほぼ北一南方向をとり若干東へ振る。壙内堆積土は7層に分かれ，やや複雑な状況を示すが，おおむね壙内へ流入したような堆積である。地山の黄色砂質土の小ブロックを含む層と，炭を含む層が互層となり，縞模様を呈する。第3層には炭の他に焼土塊が含まれていて，また獣骨片らしきものも包含されていた。遺物は各層に包含されているが，前述の土壙24・116と同様に含炭層に多い。図示した石庖丁は第1層の上面すなわち検出面で出土した。



第5図 土壙128 遺構図 （S＝1/30）

遺物 壺形土器らしき破片1片と甕形土器7＋α個体，鉢形土器1，石庖丁1，サヌカイト片5を数える。

甕形土器は口縁部が「く」の字状に外反する1と，倒「L」字状に開く2・3・4の2形態にわかれる。1は口唇部に刻み目をもち，口縁下に多少の間隔をもって推定2条の篦描沈線を施し古い



第16図　土壙128　出土遺物　（S＝¼，½）

様相を示す。2・4・5は口縁部下に8～11条の比較的雑な篦描沈線をもつのみである。外面はいずれも剝離などで器表の調整は不明であるが，内外面ともにわずかな凹凸部がみられるところから押圧後丁寧なナデ調整がなされていると思われる。

3は甕形土器と手法的には大差はないが，口縁端部を丸くおさめ，ロート状にすぼまる形態から鉢形土器と考えられる。口縁部直下には径約3㎜の円孔（2個1対）をもち，その下部には9条の篦描沈線と1列の円形刺突文を繞らす。刺突文の痕跡から考えて，施工具は多少右横方向から使用されているように思える。

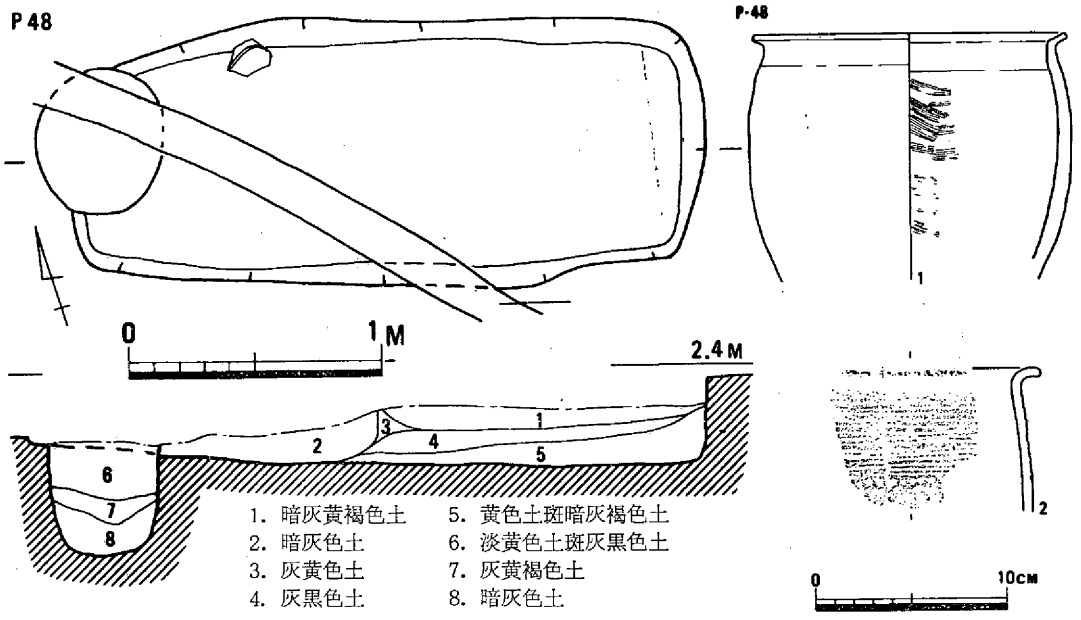
1～5までの土器は，いずれも胎土に長石・石英が目立つなど前記の土壙と大差はない。色調は甕形土器が暗褐色または褐色を呈するのに対し，鉢形土器は多少白っぽい淡褐色を呈す。

石庖丁は長辺に直線的な刃部とわずかに丸みを帯びた背部をもち，短辺の一方は尖がって，もう一方には抉りをもつ，サヌカイト製の打製である。正面の中央部から尖がった短辺にかけては，プラントオパールによる磨滅痕跡が顕著に認められる。53.3gを計る。

土器及び石庖丁の形態的特徴などから，弥生時代前期後葉の時期が考えられる。

土 壙 48　（第17図，図版13・16）

N11・W15に位置する。長方形の整った平面形態をもち，断面も箱形を呈している。底面は平底



第17図　土壙48　遺構図（S＝1/30），出土土器（S＝1/4）

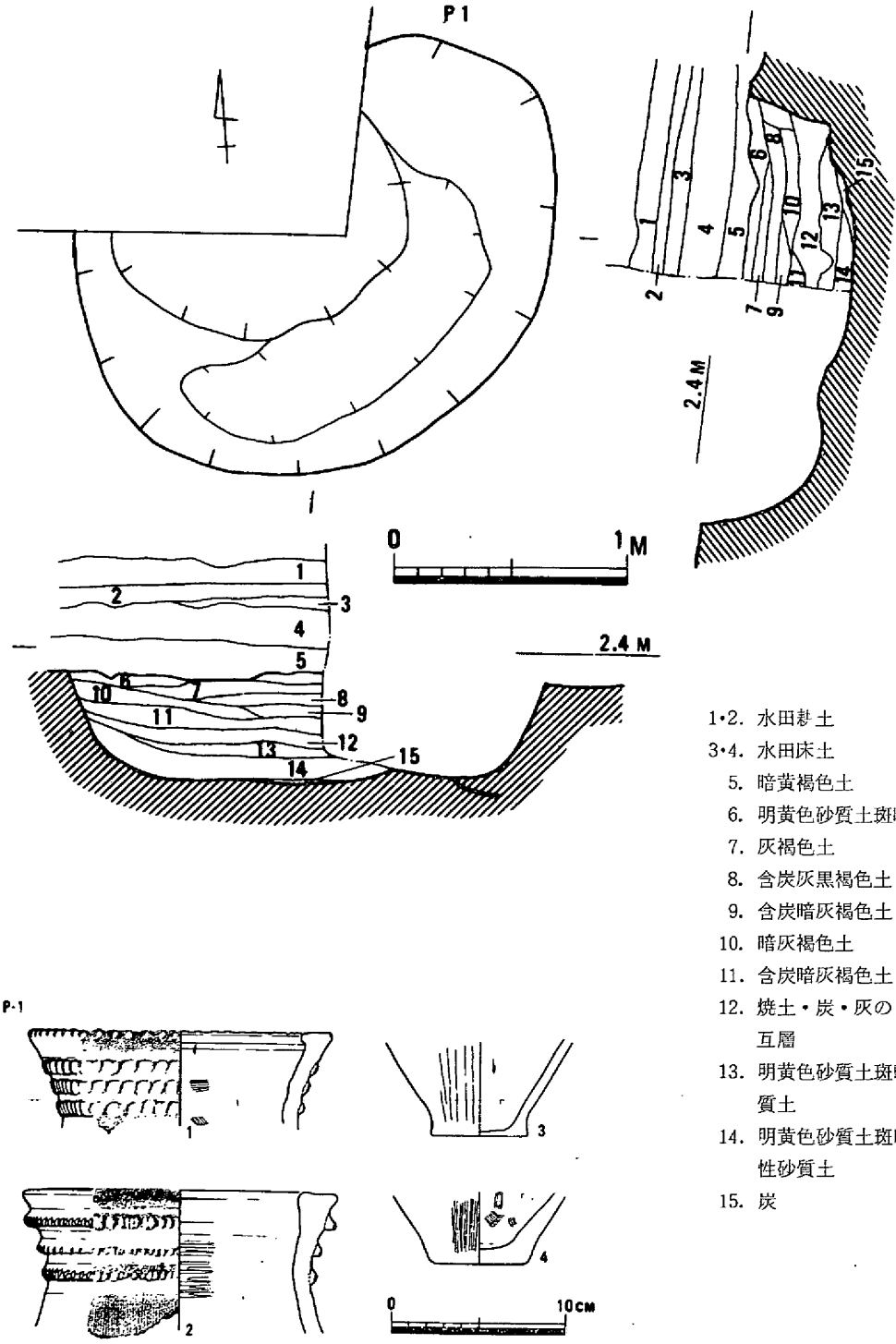
であるが，西端が東端より10cm程高い。長さ2.5m，幅1.1m，底面では長さ2.4m，幅0.9m，深さは東端で0.35mの計測値を得た。土壙119，住居址6によって切られている。土層断面図によれば壙内堆積土は東西に二分されるようにもみられるが，第4層・第5層の堆積状況からみて，第2層・第1層の順で東から壙内へ流入堆積したとみられなくもない。形態的には土壙墓の可能性が考えられそうであるが，図示したように木棺痕跡らしきものはいっさいみられなかった。壙内より出土した遺物は僅少である。遺構図に図示されている土器は底部破片であり，土壙検出面で出土している。

遺物　土壙中に数片の弥生時代中期と思われる土器がみられたが，図示できるものは前期の甕形土器2点であった。1は図示の⅔が現存するもので，ややふくらみぎみの体部からわずかに「く」の字形につまみ上げた口縁部をもつ。口縁部近く横ナデ，器表面は丁寧なナデ，内面は浅い刷毛で調整されている。焼成は非常に良好で，胎土には石英粒が目立つ。暗褐色を呈す。2は比較的ゆるやかに外反して倒「L」字形を呈する口縁部をもち，端面に刻み目及び口縁部下位に15本の篦描沈線，またその下に円形の刺突文を繞らす。胎土は1に比べて粗い。

土器は弥生時代前期後葉に位置づけられるが，遺構が削平等の改変を受けていないとすれば，遺構の時期は中期前葉の可能性が強い。

土 壙 1　（第18図，図版10・16）

N25・W16に位置する。楕円形を呈し，長径2.2m，短径1.6mと円形に近い。壙壁はかなり急傾斜で，最深で0.5mを測る。底面の状態はやや乱れ，中央から北西に片寄って円形の軽い凹部があり，その周囲に沿うような形で西から南へかけて弧状のこれも軽い凹みがある。壙内堆積土は図で



1•2. 水田耕土
3•4. 水田床土
5. 暗黄褐色土
6. 明黄色砂質土斑暗褐色土
7. 灰褐色土
8. 含炭灰黒褐色土
9. 含炭暗灰褐色土
10. 暗灰褐色土
11. 含炭暗灰褐色土
12. 焼土・炭・灰のラミナ状互層
13. 明黄色砂質土斑暗褐色砂質土
14. 明黄色砂質土斑暗褐色粘性砂質土
15. 炭

第18図　土壙1　遺構図（S＝1/30），出土土器（S＝1/4）

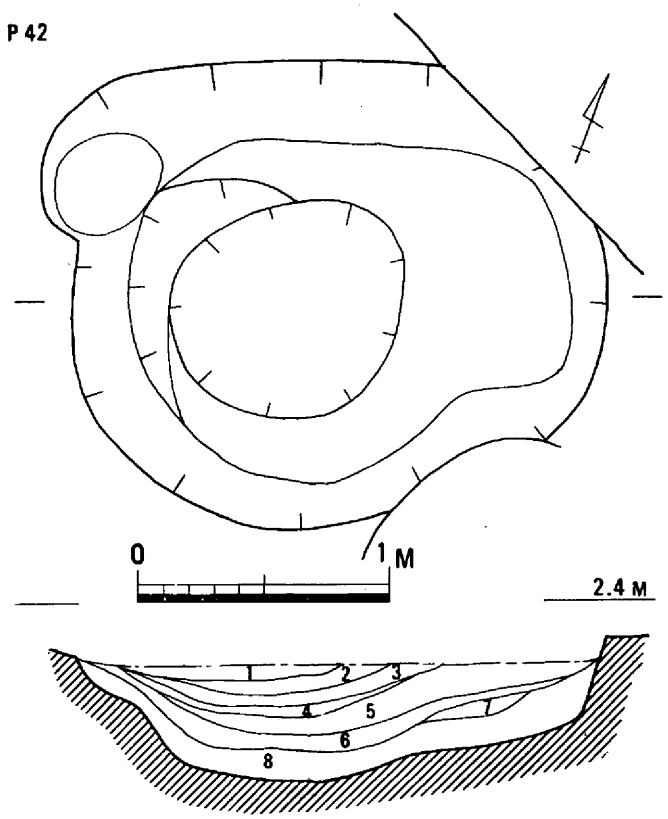
はかなり複雑な状況にみられるが，基本的には中央が厚く縁辺が薄い薄層がほぼ水平に順序よく堆積している。土壙24・119・128と同様に，地山の黄色砂質土の砕粒を多く含んだ層と炭を含んだ層があり，それらが互層となって堆積し，間層として炭・黄色砂質土をほとんど含まない層もみられる。底の第15層は炭層であるが，それについで炭の含量の多いのは第12層であり，炭の薄層がある。第12層は焼土・炭・灰が薄層になって重なっているもので，細分すれば焼土層3枚・炭層5枚・灰層6枚を数える。この層からは骨粉のような白色粉抹が出土している。灰層は第11層にも認められた。遺物は各層から出土するが，大型の破片はみられず，概して少ないようである。

遺物　出土土器の個体数は，壺形土器2＋αと破片ばかりの中から甕形土器6～7を割り出した。

壺形土器1はわずかに外反しながら立ち上がる頸部と口縁部をもち，端部を内側に肥厚させて上部に幅広の端面をつくっている。また，口縁端部の外側には刻み目を約1㎝間隔に繞らせ，頸部は3条の指頭押圧による貼付凸帯で飾られている。口縁部付近は横ナデ，内面は部分的に刷毛目が残る。2は「ハ」の字状の肩部からわずかに外反して立ち上がる頸部をもち，口縁部内側を肥厚させて逆台形の口唇部をつくっている。口縁部から頸部にかけては，3条の刻み目を施した貼付三角凸帯で飾られている。肩部は縦方向の刷毛目で調整している。凸帯間及び口縁部は横ナデ，内面は横方向の細かな篦磨きで仕上げている。胎土は1・2ともに1㎜前後の砂粒が多く，中でも細かな長石が目立つ。1は赤褐色，2は暗褐色を呈す。

甕形土器3は底の厚さが4と比べて非常に薄い。外面はどちらも篦磨きで調整されているが，内面は3がナデ，4は粗い刷毛が一部に残る。胎土に長石の細粒が目立つ。

壺形土器が頸部から上の破片であるので，時期の確定はむずかしいが，弥生時代中期前葉から中葉を考えておきたい。

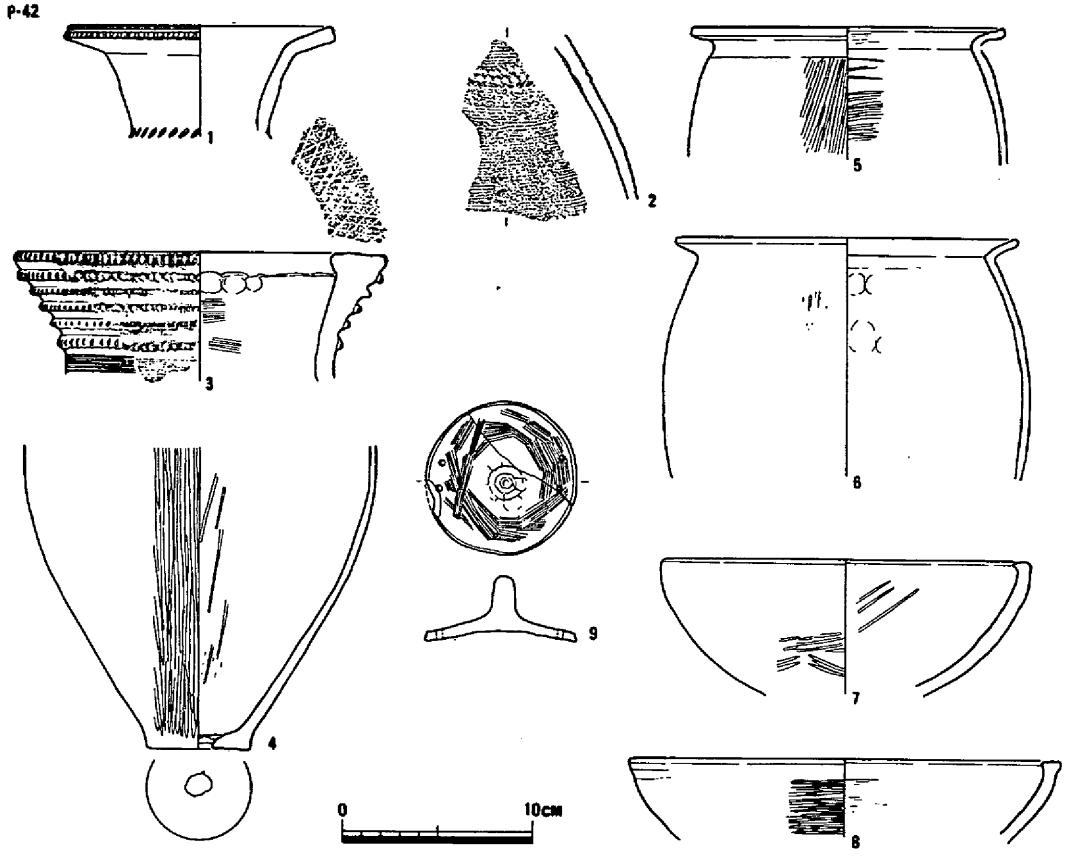


1. 灰黒褐色土
2. 黄褐色砂質土
3. 含炭灰黒褐色土
4. 黄褐色粘性土
5. 灰黒褐色土
6. 含炭暗灰色土
7. 灰黒褐色土
8. 灰黒褐色土斑黄褐色粘性土

第19図　土壙42　遺構図（S＝1/30）

土壙42（第19・20図，図版12）

N17・W17に位置する。卵形に近



第20図　土壙42　出土遺物　（S＝1/4）

い不整楕円形を呈する。北西隅に小円形の平坦面があるため不整形となるが，あるいはこの部分は他遺構の可能性も考えられる。長径 2.1m，短径1.9m，最深 0.9mである。底面は一様に平坦ではなく，西にやや片寄って皿状に浅く一段落ち込む。壙壁もこれに影響されたかのように，東と西で形状を異にする。東壁は急傾斜で直に下がるが，西壁は途中に軽い段をもち，皿状の凹みに続く。壙内の堆積状況は土壙縁辺部から中央へ流入堆積した様子を示す。黄褐色砂質土層と含炭層がやはり互層に堆積している。第３層の上面には炭の薄層が認められた。最下層の第８層は灰黒褐色土と地山の黄褐色粘土がブロック状に混合した層で炭を含んでいる。土器は各層から出土している。散在していて，とくに大型の破片が集中して出土するというような状況はみられなかった。

遺物　壺形土器５，甕形土器20＋α，高杯形土器４，蓋形土器１などの個体数を認め得るが，蓋以外はほとんど小片であり，時期的にも多少の幅をもっている。

壺形土器 **1** はわずかに外傾して立ち上がる頸部から，急に屈曲して開く口縁部をもち，口縁端面には１条の沈線の上から押しあてるようにして線状の刻み目を繞らせている。頸部下には米粒大の刺突文が約 45° の傾きをもって配されている。**2** の壺形土器の肩部には，５～６本単位の櫛状工具による沈線が連続して配され，一部に平面三角形を呈す２列の刺突文帯を繞らせている。**3** は５条

の三角凸帯を口縁部に貼り付け，口縁端部外面とともにその頂部に刻み目を配している。図に見られるように刻み目はかなり雑に入れられている。底部には刷毛目というより櫛目に近い沈線が横方向にみられ，2かあるいはその種の文様を配した胴部をもつかも知れない。幅の広い口縁上端面は篦描斜格子文で飾られている。内面は口縁肥厚部下に指頭圧痕が顕著であり，その下は部分的に刷毛目が残っている。1が胎土に2～5㎜の長石・石英が目立つのに対し，2・3は0.5㎜前後の砂粒が多く，特に3は金雲母をかなり含んでいる。

甕形土器5・6は肩にあまり張りをもたない胴部から「く」の字状に外傾して開く口縁部をもつ。6が口縁端部を丸くおさめているのに対し5はわずかに端面をもち，多少の後出性を示している。5・6ともに口縁部内外面は横ナデで調整されているが，5は口縁部内側の一部にも細い篦磨き痕を残す。5は胴部外面は篦磨きとも刷毛目ともつかない痕跡を残し，内面には篦磨きが観察される。6は内面の押圧痕跡のみしか確認できない。4の外面は篦磨き，内面は細い篦磨きがところどころみられるが，底部近くは篦磨きの下に篦削り痕を残す。甕形土器の胎土には，いずれも均一の細かい長石・石英粒が含まれている。

高杯形土器は外面を細かい篦磨き，内面をおもにナデによっている。7は胎土に小さめの長石と大きめの石英が含まれ，8は長石・石英粒の大きめのものが散在している。

蓋形土器9は径8㎝の小ぶりのもので，2個1対の穴をもつ。表面は凸起状のつまみを中心にして刷毛目で調整し，裏面はナデによっている。胎土は甕形土器と特に違いはない。

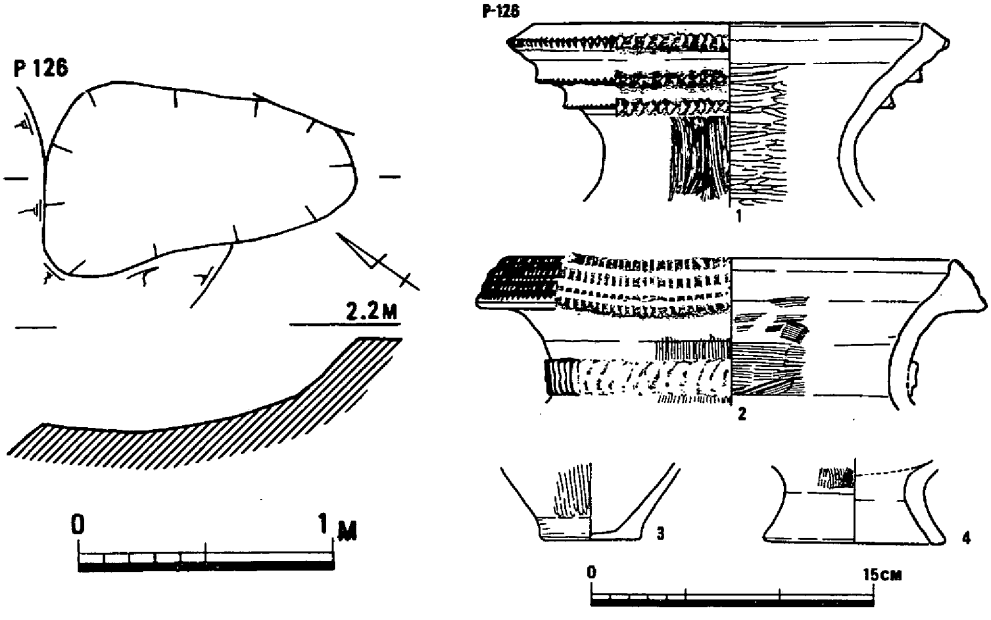
時期は1が弥生時代前期後葉，その他を中期前葉から中葉の初めに比定できよう。

土 壙 126 （第21図，図版19）

N22・W19に位置する不整長楕円形の土壙である。西半は採土壙によって上方を削平されている。また東隅は土壙127に切られる。残存長径1.2m，短径0.8m，深さ0.4mを測り，長軸の方向は南東一北西方位である。壙壁の傾斜は緩く，壙底も丸味をもって皿状を呈する。壙内堆積土は均質で分層できない。地山の黄色砂質土の小ブロックを含む暗灰褐色土が詰まっている。

遺物　第21図が図示できるもののすべてであり出土個体数を示す。

壺形土器1はナデ肩と思われる。「ハ」の字状の胴上部から，ゆるやかに反転して斜め上方に立ち上がって口縁部をつくる。口縁端部は斜め上下方向にわずかにつまみ出して端面をつくる。口縁部外面には2条の三角凸帯を貼り付け，端部外側及び凸帯頂部に刻み目を施している。口縁上部は内外面とも横ナデによって仕上げているが，頸部から口縁部にかけての外面は細かな縦方向の刷毛，内面は横方向の篦磨きでそれぞれ丁寧に調整している。2はゆるやかに外反して立ち上がる口縁端部を三角形に太く肥厚させてつくり出した端部外面に3条の凹線を繞らせ，4～5㎜間隔に縦方向の線状刻み目を施している，頸部外面には縦方向の刷毛調整後，下端に指頭押圧文凸帯を貼り付けて装飾している。口縁端部は内外面ともにおもに横ナデで仕上げ，頸部から口縁部にかけての内面は横方向の刷毛（幅1㎝前後に7～8本単位）調整が成されている。1・2ともに胎土に1㎜以下の長石・石英と金雲母を多く含み，淡灰色を呈している。



第21図　土壙126　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）

3の表面は篦磨きののち底から約1㎝の部位に横ナデを加え，内面は丁寧なナデで調整している。胎土に3㎜以下の砂粒を多く含む。4は鉢形土器などの台脚部と思われる。円盤充塡による底部は欠損している。台脚部は内外面ともに横ナデ，脚上部から底部にかけては浅い刷毛調整が残る。胎土に1㎜以下の長石・石英粒を多く含み，雲母も散見される。

壷形土器はどちらも口縁部のみで時期の確定はむつかしいが，1は弥生時代中期前葉から中葉にかけての，また2は中期中葉の時期にそれぞれ比定されよう。

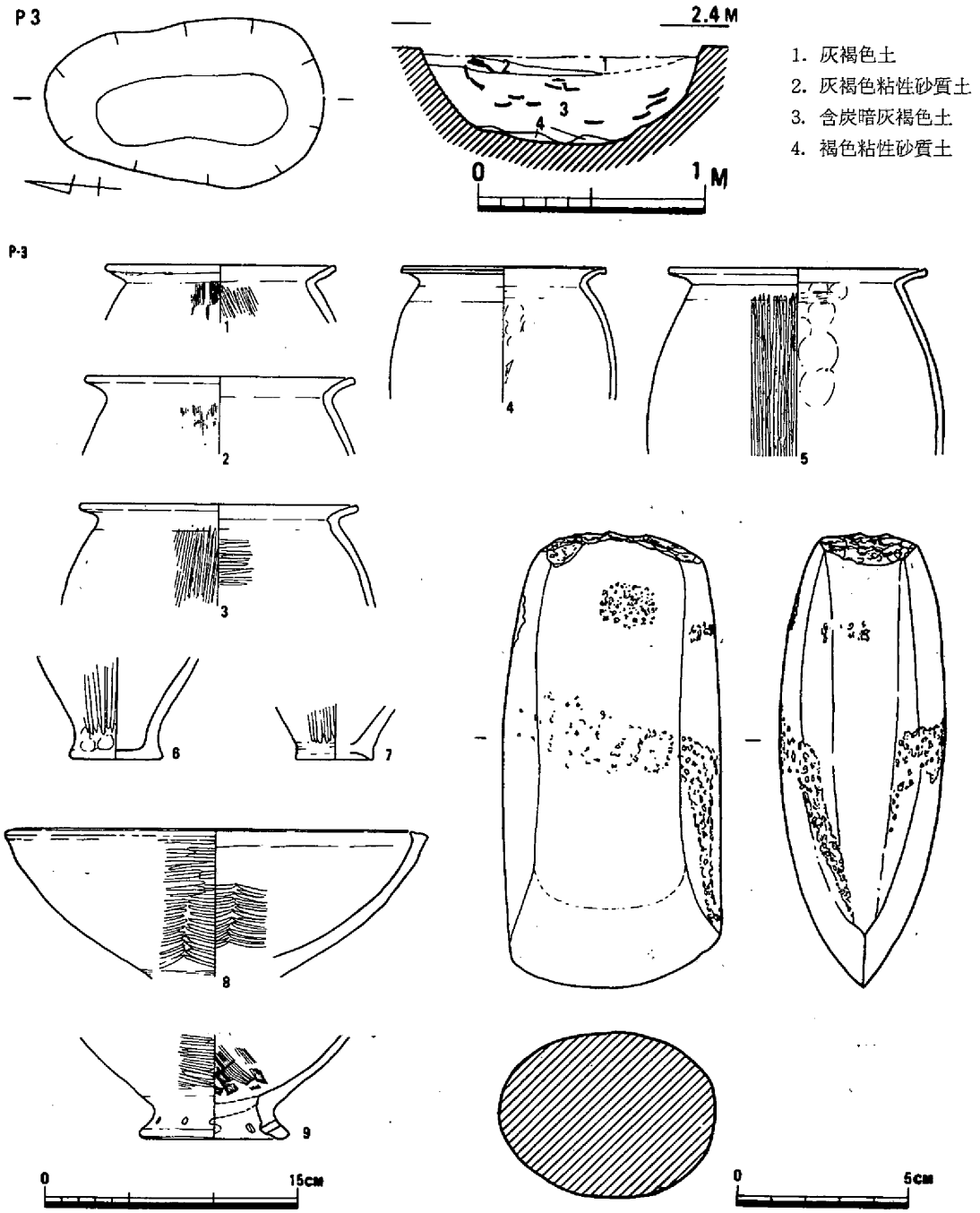
土 壙 3　（第22図，図版24）

N23・W18に位置する卵形の土壙である。長径12.5m，短径7.5m，深さ0.45mを計測する。壙底はかなり丸味をもち，壙壁から底面への移行は屈折的ではない。壙内堆積土は第2層の地山砕土からなる黄灰色砂質土層を挾んで上下二層に分層されるが，前述してきた土壙とは異なり，下層の第3層はきわめて厚くて土壙の大部分を充塡している，壙底の褐色微砂は大型土塊とみられ，本来は第3層に包含されたものと考える。当該土壙はかなりの土器片を包含していて，やや大型の破片を散見できた。図示した石斧は検出面上で出土し，第1層に包含されていた。

遺物　壷形土器は底部1個体のみで，甕形土器は12＋α個体，高杯形土器2～3個体を数える。

甕形土器はいずれも，肩の張りが少ない「ハ」の字状の胴上部から，斜め上方にわずかに外反して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部の形態からは，端部を比較的丸くおさめるもの（1～3）と端部を上方にわずかにつまみ上げて狭いながらも端面をもつもの（4，5）に大別できる。いずれ

も口縁部から肩の一部にかけての内外面は横ナデで仕上げ，肩部外面は1・2は細かな刷毛，3・4は篦磨き（中に繊維状の細かい線が残る）で丁寧に調整している。2・4は内外面とも押圧及び丁寧なナデのためか工具の痕跡は残さない。1・3の内面は刷毛様の磨きによっている。甕形土器



第22図　土壙3　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4，1/2）

の器表の調整は全体に丁寧である。また1は口縁くびれ部の器表面が約1㎝にわたり荒れていることから，紐か何かを縛りつけて使用したことが考えられる。

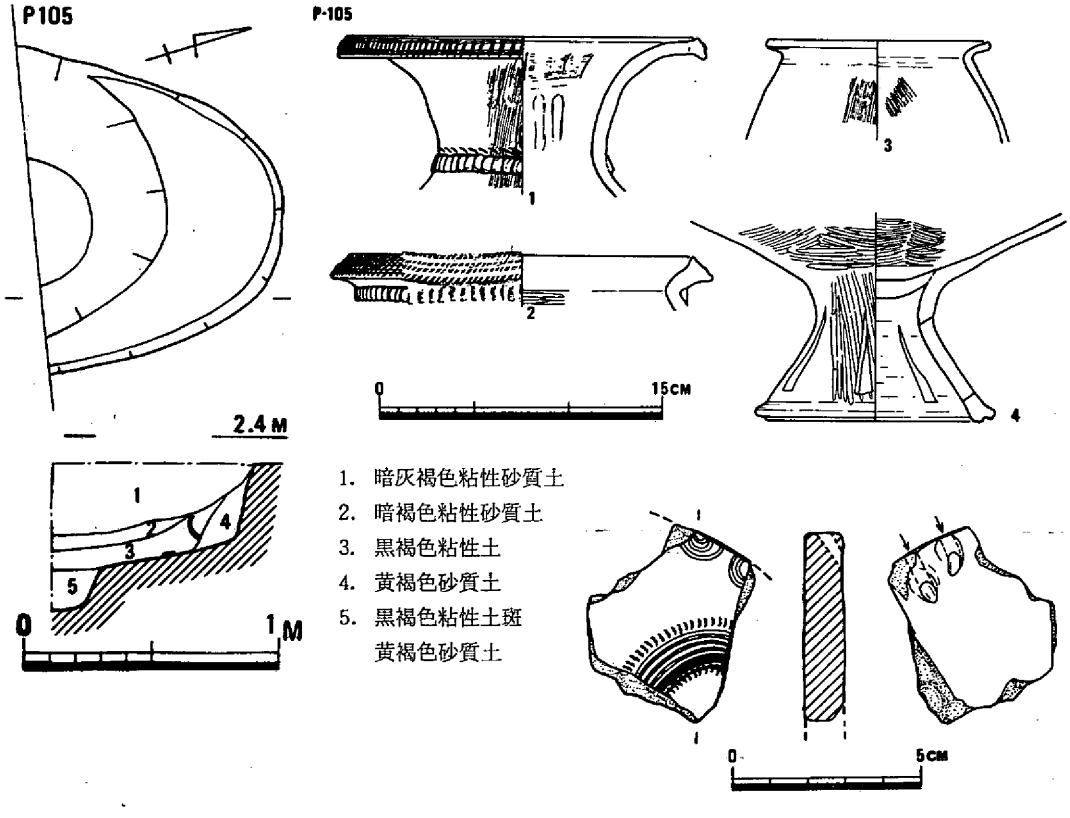
高杯形土器8は形態的には9の様な台脚部の付く台付鉢形土器の可能性もある。口縁端部は内側にわずかにつまみ上げて肥厚させている。杯部内外面ともに篦磨きされているが，口縁部に近いところは横方向の，体部は脚を中心にして弧状に表面調整されている。9は体部外面が篦削り，内面が刷毛目である。脚部はヨコナデによっている。9の円形透し穴は位置関係から12穴と思われ，内部まで貫通するものとしないものの両者がある。8・9ともに0.5㎜前後の均一の長石・石英粒を多く含む。

蛤刃石斧は全体に良く砥がれた完形である。刃部は鋭利で胴部中央はしっかり柄に固定できるよう調整敲打痕をそのまま残している。淡緑色を呈し，中に白っぽい斑点の結晶が観察されるところから，石材は閃緑岩の系統であろう。

甕形土器の口縁部の形態などからすれば，弥生時代中期中葉の範疇で捉えられる。

土 壙 105 （第23図，図版18・24）

N8・W13に位置するが，大部分は調査区域外にある。検出部分から推定すれば，長楕円形の平



第23図 土壙105 遺構図 （S＝1/30），出土遺物 （S＝1/4，1/2）

面形態をもつと思われる。検出部分の計測値は長さ1.1m，幅1.3mである。底部の形状は前述の土壙116と類似した階段状を呈し，段差は15㎝ある。2段目で深さ0.6mを測る。壙内堆積土は流入したような状況を呈し，1段目の底に堆積した第3層には炭・焼土が多量に含まれている。遺物は各層に含まれるが，第3層からは大型破片（4）が出土し，図示した分銅形土製品は1段目の底面上から付着した状態で発見された。

遺物　壺形土器2，甕形土器3，高杯形土器2，分銅形土製品1のそれぞれの個体数が確認された。

壺形土器**1**は外反してラッパ状に開く口縁部をもち，口縁端部は斜め上下にわずかに肥厚させて，端面には2条の凹線の上から線状の刻み目を施している。口縁部から頸部にかけての外面は細かい刷毛調整ののち，頸部下に指頭押圧凸帯及び，その直上には爪形の刻み目を繞らせている。内面には部分的に押圧痕跡が残る。**2**は口縁端部を斜め上下に肥厚させ，端面に3条の凹線を施した上から斜め方向（凹線と約45°の角度）の線状刻み目を繞らせている。また頸部は指頭押圧凸帯で飾られている。口縁部内外面ともに横ナデ，内面体部は箆磨きで調整している。

甕形土器**3**は口縁端部をわずかに上方につまみ上げ，口縁部近く（一部肩部）は横ナデ，内外面ともに細かい浅めの刷毛調整が成されている。

高杯形土器**4**は，図示した部分がほぼ完全な形で現存している。脚部には7個の三角透しをもち，脚端部はわずかに肥厚させて端面に1条の深い凹部をもつ。外面はおもに縦方向の箆磨き，内面及び脚縁部外面は横ナデにより調整されている。杯部内外面ともに，弧を描くように比較的雑な箆磨き痕跡が顕著である。杯の底部は円盤充塡法によっている。

1～**4**ともに胎土においては大差はなく，比較的細かい長石・石英粒を多く含む。

分銅形土製品は分銅上部の中央少し右寄りの部分の破片であろう。表面に櫛描きの弧文と刺突による弧文が配されている。裏面には上端部の側面から開けられた穴が貫通している。文様はない。暗褐色を呈し，胎土は甕形土器などと大差はない。破片から復原すれば，長さ13㎝最大幅11㎝位の比較的大型のものが考えられる。

1～**3**に比べて**4**は形態的に新しい様相も窺えるが，全体的には弥生時代中期中葉と考えられる。

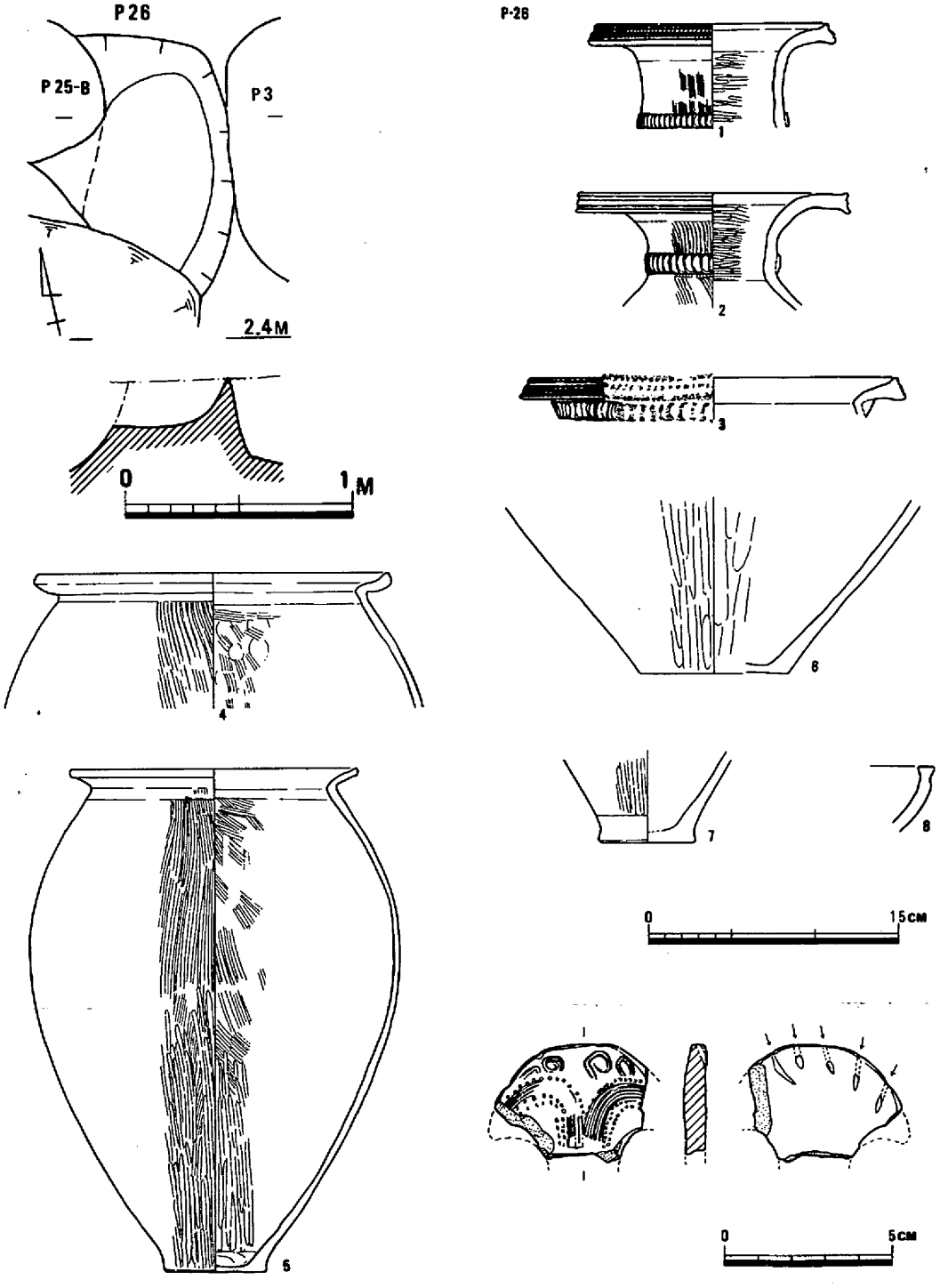
土 壙 26 （第24図，図版24）

N23・W19に位置する。南を採土壙，西を土壙25に切られ，明瞭な平面形態は不明であるが，底面の形状からすればやや長楕円形と推定される。残存部分で長径1.1m，深さ0.2mを有する。底面はほぼ平坦である。壙内堆積土は灰黒褐色土で分層されない。

遺物　壺形土器4，甕形土器3＋α，高杯形土器2，分銅形土製品1の各個体数を得た。

壺形土器**1**は，ほぼ直立する頸部から急角度で外反して開く口縁部をもち，口縁端部を斜め上下にわずかに肥厚させて，端面には2条の凹線の上から線状の刻み目を施す。頸部外面は浅くて細い刷毛で調整し，下部に指頭押圧貼付凸帯を繞らせている。口縁部内外面は横ナデ，頸部内面は横方

向の篦磨きが部分的に残る。2はわずかに外傾する頸部から大きく外反して開く口縁部をもち，端部は上下に少し拡張させて端面に2条の凹線を施す。頸部から肩部にかけては粗い刷毛調整のの



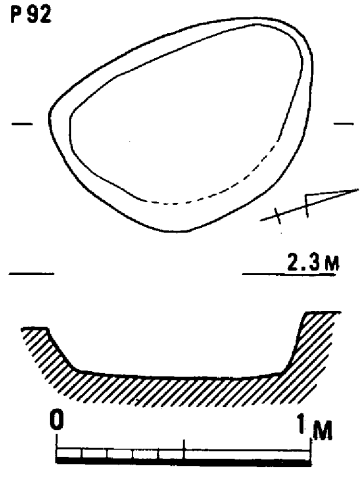
第24図　土壙26　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4，1/2）

ち，頸部下方を指頭押圧貼付凸帯で飾る。頸部内面の篦磨きは顕著に残る。3は口縁端部を三角形に肥厚させ，端面に2条の凹線を繞らせてその上から線状の刻み目を施す。頸部には指頭押圧貼付凸帯が繞る。6は大型の壷形土器底部と思われる。調整は内外面ともに篦磨きによっている。1～～6はいずれも胎土に1㎜以下の砂粒が多く含まれ，焼成良好である。色はおもに淡褐色を呈す。

甕形土器4の口縁部は斜め外方にわずかに内彎させている。肩部外面は粗くて浅い縦方向の刷毛で，内面は押圧後同様の刷毛で調整している。5は復原完形である。「く」の字状に開く口縁部は，端部を比較的丸くおさめることにより，わずかな端面しかもたない。内外面ともに胴部上半を刷毛で，下半を篦磨きで調整し，この種の土器としては痕跡が顕著に残されている。底の厚さは3～4㎜で，非常に薄く仕上げている。甕形土器は胎土に0.5㎜以下の細かい砂粒を含んでいる。

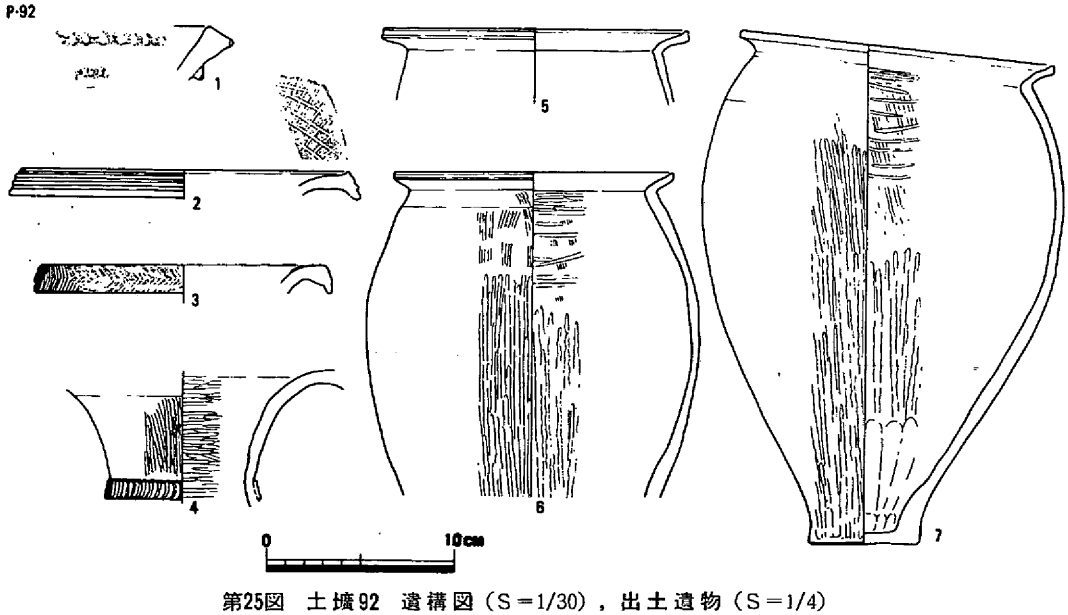
分銅形土製品は上部の破片である。表面にはほぼ左右対称の位置に櫛描きの弧状文とその縁に沿って小さな竹管文のような刺突文が配され，上縁部には半截竹管によると思われる円形 または うず巻状の 文様が 配されている。裏面には文様はないが，弧状を呈す側面矢印方向から開けられた穴の痕跡がみられる。胎土には1㎜以下の砂粒及び雲母を多く含み，部分的に鉄分粒を含む。淡褐色を呈す。

出土遺物は形態・手法などから弥生時代中期中葉の，ほぼ単一時期の一括として捉えられる。



土 壙 92 （第25図，図版17）

N11・W17にあって，住居址6の床面下に位置し，住居址7を切っている。平面形は不整楕円をなし，壙壁は急傾斜で，底



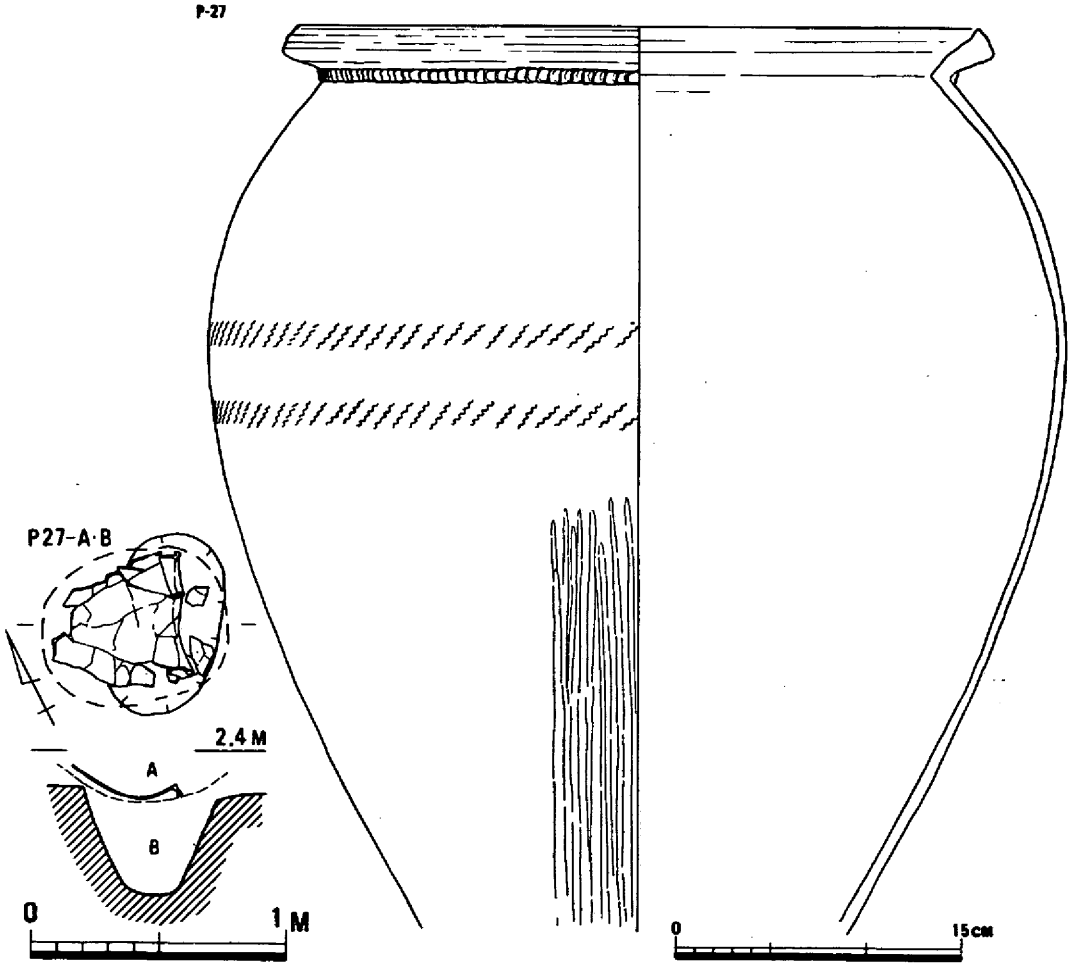
第25図 土壙92 遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）

面はほぼ平坦である。長径1.1m，短径0.8m，深さ0.25mを測る。壙内堆積土は分層されず暗灰褐色土が詰まるが，いろいろな土がブロック状で混合して一層を成している。炭を多く含んでいる。かなりの数の土器片が出土している。

遺物　壺形土器5，甕形土器6＋α，砥石小片1，サヌカイト片2を数える。

壺形土器**1**は土壙126の1に似る。時期的には**2**～**4**に少し先行するかも知れない。**2**・**3**は口縁部の小片であるが，**2**は口縁端面に凹線，内面の縁部に沿って斜格子文を施す。**3**は口縁端部を下方に拡張させて端面に綾杉様の刻み目を配し，口縁部内面には薄い円形浮文を付けている。**4**は口縁端部を欠損するが，形態・手法は土壙26の**2**に似る。

甕形土器はいずれも外反して開く口縁部をもち，端部を上方にわずかにつまみ上げるもので，**5**が全体をナデによって丁寧に調整するのに比べ，**6**・**7**は口縁部内外面を横ナデ調整する以外は肩部を刷毛調整後，体部はおもに縦方向の篦磨きで仕上げている。胎土焼成ともに土壙26などの甕形



第26図　土壙27　遺構図（S＝1/30），出土遺物（＝1/4）

土器と大差はない。

弥生時代中期中葉の時期であろう。

土 壙 27 （第26図，図版8・19）

N32・W13で大型の甕形土器が検出された。完品の⅓程度の大型破片であったが，その検出状況から判断すると，本来横倒して埋没していた完形品の上半が後世の削平によって削り取られたものと考えられる。周辺に明瞭な掘り込みを確認することは困難であったが，おそらく土器棺として使用されたものとみられる。甕の口は東へ向いて開いている。蓋に使用されたとみられる土器片はなかった。土器片を除去して長径0.7m・短径0.45m・深さ0.45mの楕円形の土壙を検出したが，上方の土器棺らしい遺構とは関係しない別の遺構と考えられる。前者を土壙27A，後者を27Bとする。

遺物　甕形土器は底部を欠く。口縁端部を肥厚させ，横ナデにより端面に浅い凹部が2条みられる。頸部外側には屈曲部を埋めるように幅の比較的狭い指頭押圧貼付凸帯が繞る。胴部の最大幅の付近には2条の貝殻圧痕文帯をもつ。胴部外面の上半及び内面はおもにナデにより丁寧に調整され，外面下半は箆削りののち箆磨きを加えている。淡褐色を呈し，胎土は他の甕形土器と特に大差はない。

弥生時代中期中葉の時期と考えられる。

土 壙 73・74 （第27図，図版9・10・17）

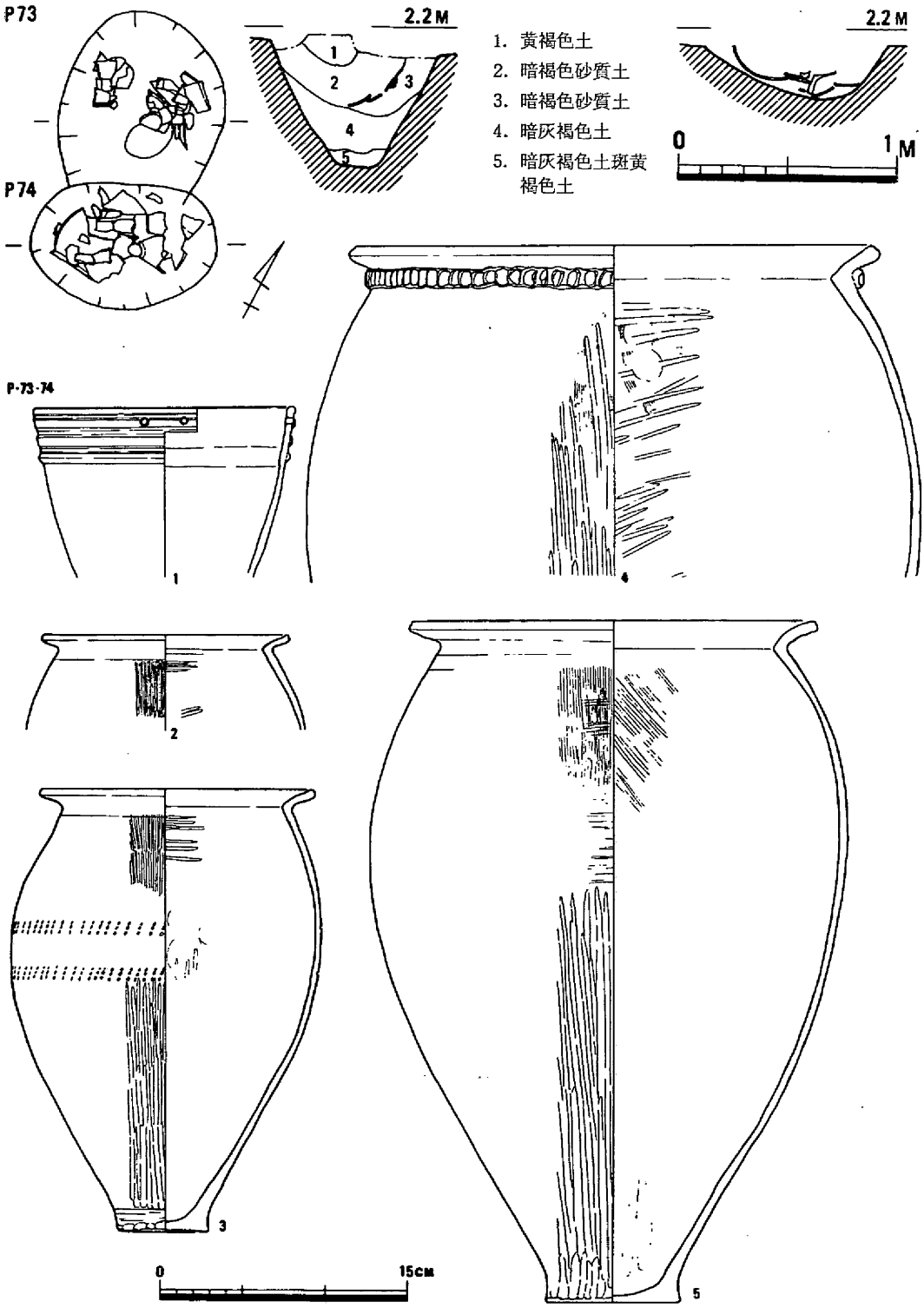
土壙73はN32・W14に位置し，一部土壙74により切られている。推定で長径0.9m程とみられ，短径は0.75m，深さ0.6mを測る楕円形の土壙である。底面は平坦であるが長径0.25mと狭く，土壙の断面はV字形に近くなる。壙内堆積土は一様でなく5層に分かれるが，第2層と第3層の境界面に沿うような形でかなりの数の土器片が出土した。

土壙74は土壙73を切って，その南側に位置する。長径0.85m，短径0.55mの楕円形を呈する。底は丸く浅鉢状をしているが，中央より東へ片寄って最深となる。その深さは0.25mである。壙内は黄色砂質土の小塊を含んだ暗灰褐色土で充たされている。壙内からは中形の甕形土器片がほぼ1個体分，底に集中する状態で出土した。おそらく完形品が埋められたものと考えるが，検出された破壊状況はこの甕が完品のまま埋められたということを証明するにやや不充分なものであった。しかし，この甕は土壙25A出土のそれとほぼ同大のものであり，甕以外の土器片も僅少であることからすれば，土器棺である可能性がきわめて高いと考えられる。

遺物　図示したものがほぼ出土個体数を示す。**1**～**4**が土壙73，**5**が土壙74の出土遺物である。

1は深鉢形の土器で，表面がほとんど剝離しているが，口縁下に3条の三角凸帯の痕跡を残す。器形的には土壙28の**3**に似る。

甕形土器はわずかに外反する「く」の字状の口縁部をもち，**2**が多少端部を上方につまみ上げているのに対し，**3**・**4**・**5**はほとんど丸くおさめている。**2**・**3**は肩部外面を細かな刷毛，内面を



第27図　土壙73・74　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）

横方向の篦磨きで調整している。3は外面下半に篦磨きを加えたのち，胴部のほぼ中央に3個1単位で，斜め方向に刺突した文様帯を2条繞らす。内面下半は篦削りののち，押圧と丁寧な篦磨きでほとんど痕跡を残さない。4は頸部に雑な指頭押圧貼付凸帯をもち，胴部内外面ともに篦磨きで仕上げている。5は肩部外面をおもに縦方向の刷毛（一部に横方向），下半を篦磨きで調整しているが，胴部の最大幅のあたりには横方向の刷毛目，篦削りの痕跡を残す。また内面の底部近くにも篦削りらしき痕跡を残す。甕形土器の胎土は，2・3・5が0.5㎜以下の細かい砂粒を含むのに対し，4は2～3㎜の石英粒が目立つ。

時期的には1が弥生時代前期末から中期前葉まで遡る可能性が強いが，2～5は形態的特徴からいえば，中期中葉の古い様相を示している。

土 壙 25（第28図，図版8・18）

N24・W20に位置する。検出当初一つの土壙と考えていたが，その後の発掘により切り合い関係にある二つの土壙であることが判明した。東西方向に並び，東の土壙が西の土壙を切っている。前者をB，後者をAとする。

25Bは不整円形の平面形をもつ。長径0.75m・短径0.6m程度と推定され，深さは残存部分で0.25mを測る。壙内は灰黒褐色土で充塡されている。

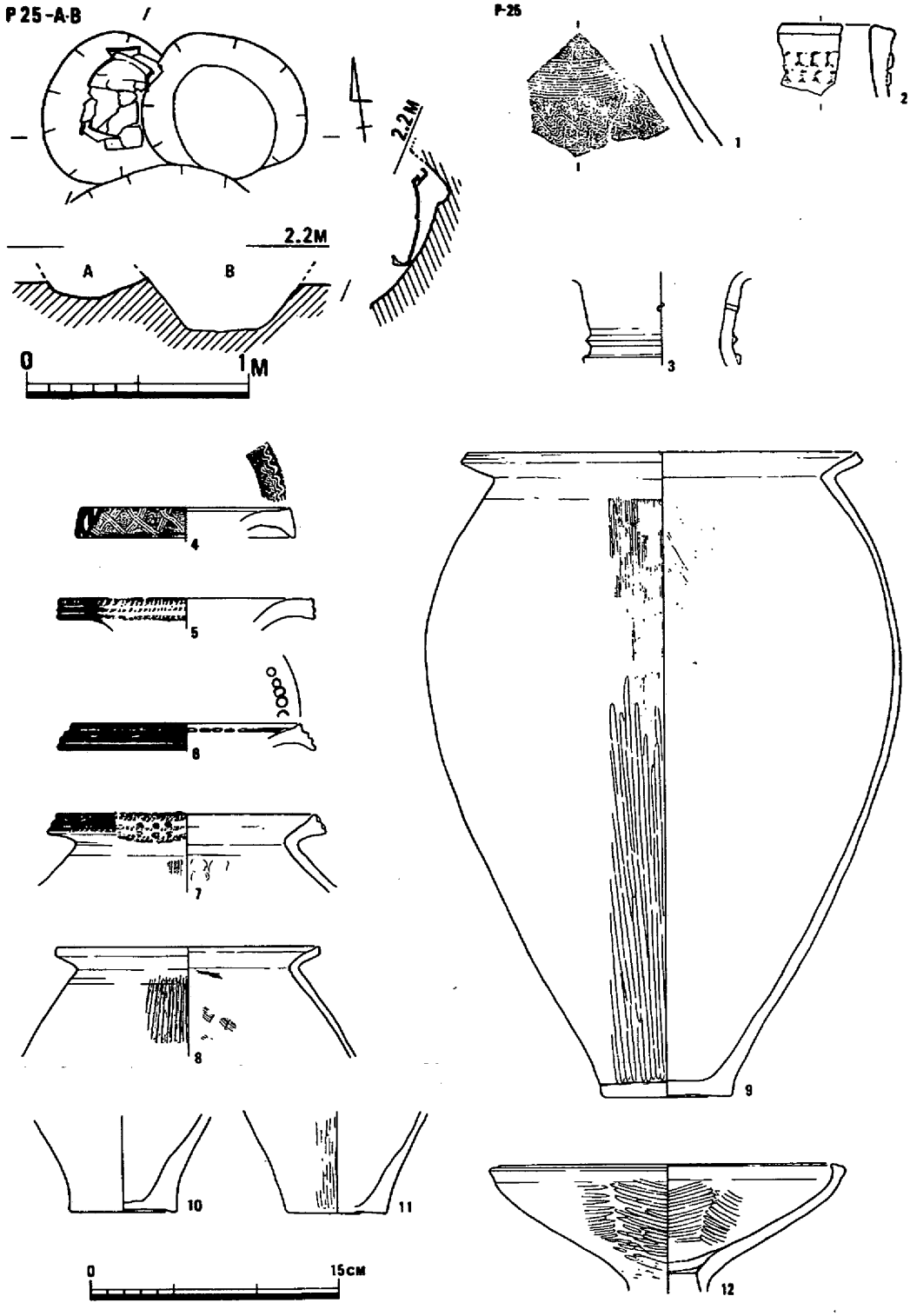
25Aは直径0.6m前後の円形の平面形をもつとみられるが，壙底から横倒しになった半完形の中型の甕形土器が検出された。土壙の深さは残存部で15㎝程度である。甕の口は北を向いている。胴部の一部は25Bによって破壊された痕が明瞭である。残存状況から判断して，土壙27Aと同様に，完形品であったものの上半が削除されたものとみられ，これもやはり土器棺として使用されたと考えたい。なお壙内からは蓋に使用されたとみられるような土器片は出土しなかった。壙内埋土は25Bとよく類似しているが，土器の下には灰黄色砂質土がみられた。

遺物　9が土壙A，他がBまたはその上面からの出土である。

壺形土器2はほぼ直立する口縁部をもち，器壁は端部に向って厚くなる。2本の指頭押圧貼付凸帯をもつ。1は2のような口縁部をもつ壺形土器の肩部であろう。器表面は櫛描波状文や櫛描沈線文で飾る。3は口縁部を欠損する口頸部であるが，5や6あるいは土壙61のような形態のものが考えられる。口頸部のほぼ中央には径約2㎜の円孔が貫通している。4～6は3に近い頸部をもつと思われ，外反してラッパ状に開く口縁部の端部は肥厚あるいは拡張させ，端面には斜格子文（4），刻み目文（6・7）などを施し，4は口縁部内側に波状文，6は円形浮文で飾っている。また7は刻み目文を施したのち，2条の凹線部分に埋める形で円形浮文を配している。

甕形土器8・9はともに口縁端部をわずかに上部につまみ上げ，9は端面に凹部をもつ。8の肩部外面は約1.3㎝幅の7本単位の刷毛で調整され，内面に部分的にみられる細かい刷毛目とは区別される。9の外面は肩部から胴上半にかけて浅い刷毛，下半に篦磨きが加えられている。内面は部分的に押圧による整形時のものと思われる浅い凹凸と，上半に薄く刷毛目がみられる程度である。11の外面は篦削り後に篦磨きで調整しているようである。

高杯形土器12は，口縁端部を肥厚させ，端面には凹部をもつ。口縁部内外面ともに横ナデで仕上げているが，杯部内外面は脚柱部を中心として弧状に篦磨きで調整している。脚部に近いところには篦削り痕跡を一部に残す。底は円盤充塡によっている。明褐色を呈す。



第28図　土壙25A・B　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）

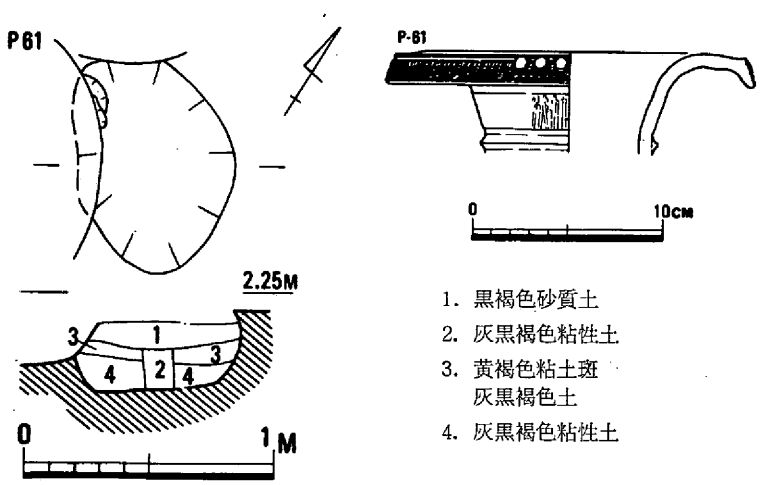
壺形土器と甕形土器においては胎土にほとんど差はなく，全体に0.5㎜以下の長石・石英粒を多く含む。高杯形土器には，長石・石英のほかに鉄分粒が目立つ。

時期的には1・2が他より遡ると思われるが，全体的には弥生時代中期中葉の中で捉えられる。

土 壙 61 （第29図，図版12）

N15・W17にあり，西縁を土壙51・55によって切られている。平面形は不整楕円をなし，長径0.45m・短径0.35m・深さ0.3mを測る。壙壁はやや袋状に内彎し，壙壁から底面への移行はあまり屈折的でない。壙内堆積土の断面観察で柱痕らしい土が認められ，柱穴の可能性がある。第1層の土と柱痕の土とはよく類似しているため，柱痕はさらに上まで伸びていることも考えられる。

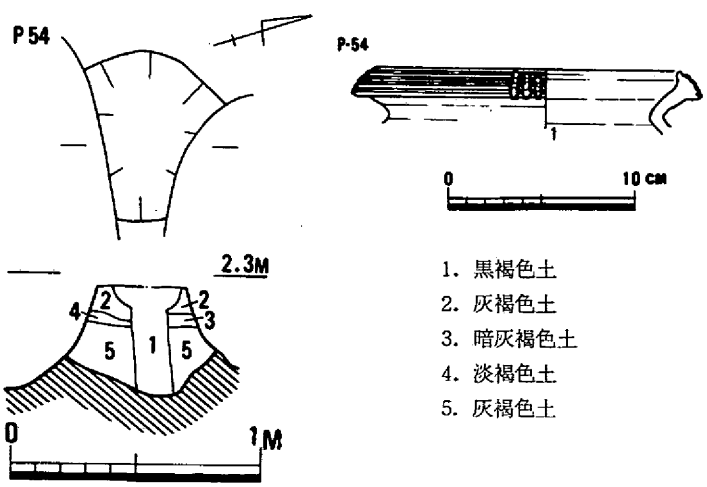
遺物　壺形土器，甕形土器，高杯形土器をそれぞれ各1個体ずつ認めたが，図示できるものは壺形土器のみであった。



第29図　土壙61　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）

口縁部は大きく外反して開き，端部を斜め下方に拡張させて端面に3条の凹線を施したのち，上から刻み目を繞らせている。3個1単位の円形浮文で飾る。頸部は篦磨きが薄く残る。頸部下端近くには三角貼付凸帯が繞る。胎土に1㎜以下の砂粒を多く含む。

時期は中期中葉。



第30図　土壙54　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S＝1/4）

土 壙 54

（第30図）

N 15・W 15.5に位置する。検出時には土壙43・44に切られていると判断したが，その後の出土遺物の検討からすれば54出土の土器が編年的にもっとも新しいため，この切合い関係については疑問がある。土壙は不整円形と推定され，直径0.35m内外であろう。壙底

は丸味をもち，壙壁と底面との境は明瞭でない。壙内堆積土の観察で柱痕が認められ，柱穴と考えられる。柱痕部分は幅14㎝である。柱痕は直立せず，やや南へ傾いている。

遺物　細片を除けば，壷形土器１点のみであった。

口縁端部を斜め上下に拡張させ，端面に４条の顕著な凹線を施し，３本１単位の棒状浮文を対面する４カ所に配している。口縁部内外面ともに横ナデが顕著に残る。胎土中の砂粒は非常に細かく，焼成は良好である。褐色を呈す。

時期は弥生時代中期後葉であろう。

土 壙 55 （第31図）

N16・W18にあり，不整な卵形の平面形をもつ。底面は中央より南東へ片寄っているため，北西壁は南東壁より緩傾斜で長く，途中に軽い段をもつ。壙壁と底面との境は不明瞭である。壙内堆積土は２層に分けられる。上層は遺構上面の包含層と類似した土で，下層は地山砕粒と包含層類似の土とがブロック状に混合している土である。長径0.95m・短径0.65m・深さ0.3mを測る，

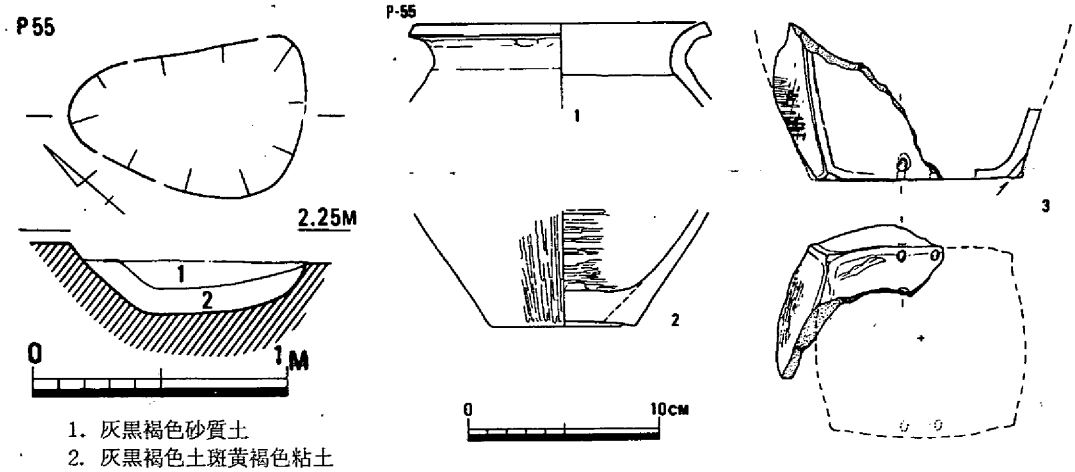
遺物　壷形土器２＋α，甕形土器１，不明１，サヌカイト片１などの個体数が認められた。

壷形土器の底部と思われる**2**は，底の中央部が内側にわずかにへこむ。外面は縦方向の篦磨き，内面は指頭押圧及び横方向の篦磨きで仕上げている。底部外面は縁部の約1.5㎝間に篦磨きがみられる。

甕形土器**1**は「ハ」の字状の肩部から外反しながら立ち上がる器壁の厚い口縁部をもち，端面には浅い凹部をもつ。表面磨滅のため調整手法が理解しがたいが，内面は篦削りの可能性が大きい。

無頸の鉢形土器の底部と思われる**3**は，四隅に稜線をもち胴張りの方形を呈す特異な器形である。底から側面に向けて，２個の円孔を穿つ。器表には一部に篦削りと横方向の篦磨き痕跡がわずかに残る。内面は押圧とナデで調整されている。胎土に0.5㎜前後の長石・石英・黒雲母を含む。

時期的には，**2**・**3**の胎土及び手法から両者はほぼ一時期の，弥生時代中期中葉の中に求められ



1. 灰黒褐色砂質土
2. 灰黒褐色土斑黄褐色粘土

第31図　土壙55　遺構図（S＝1/30），出土遺物（S.＝1/4）

るが，1は篦削りなどの特徴から後期の初めの可能性が強い。

土 壙 23 （第32図，図版16）

N13.5・W15に位置する。長径0.9m・短径0.7m・深さ0.2mを測る楕円形の土壙である。底部は浅鉢状を呈し，明瞭な底面をもたない。壙内埋土は灰黒褐色土で分層されない。

遺物　甕形土器のみ4個体分を確認しているが，中期前葉から中葉にかけての多少の幅が認められた。図示できるものは第35図の方に載せた。倒「L」字状に外反する口縁部をもち，屈曲部下の約7㎝間に30～32本の櫛描沈線を施し，その下には円形刺突文を2列に繞らせている。胎土に0.5～3㎜の長石・石英を多く含んでいる。茶褐色を呈す。

時期は弥生時代中期初頭と考えて良いだろう。

土 壙 10 （第32図）

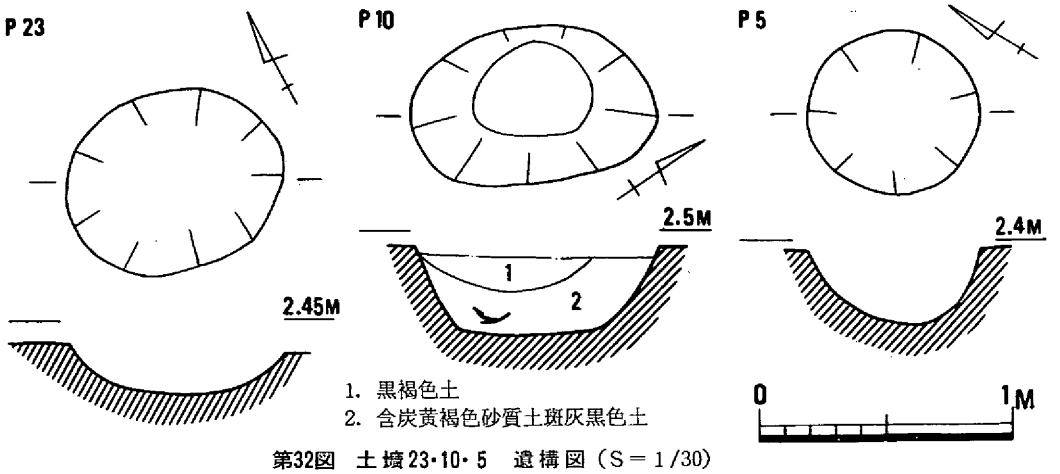
N19・W10にある長楕円形の土壙である。長径1m・短径0.6mで，中央にほぼ平坦な底面をもつ。壙内堆積土は二層に分けられるが，第1層は中央ではなく南へ片寄って堆積している。第1層の底には炭が多く含まれていた。第2層は地山砕粒をかなり含み，また多量の炭も包含されていた。

遺物　遺物としては甕形土器が5個体＋α確認されるが，その中で特徴のあるものを第35図に載せた。口縁端部をわずかにつまみ上げ，端面に線状の刻み目を密に施文している。口縁部内外面ともに横ナデ調整，肩部外面は細い刷毛，内面は粗い刷毛調整ののち横方向の篦磨きで仕上げている。

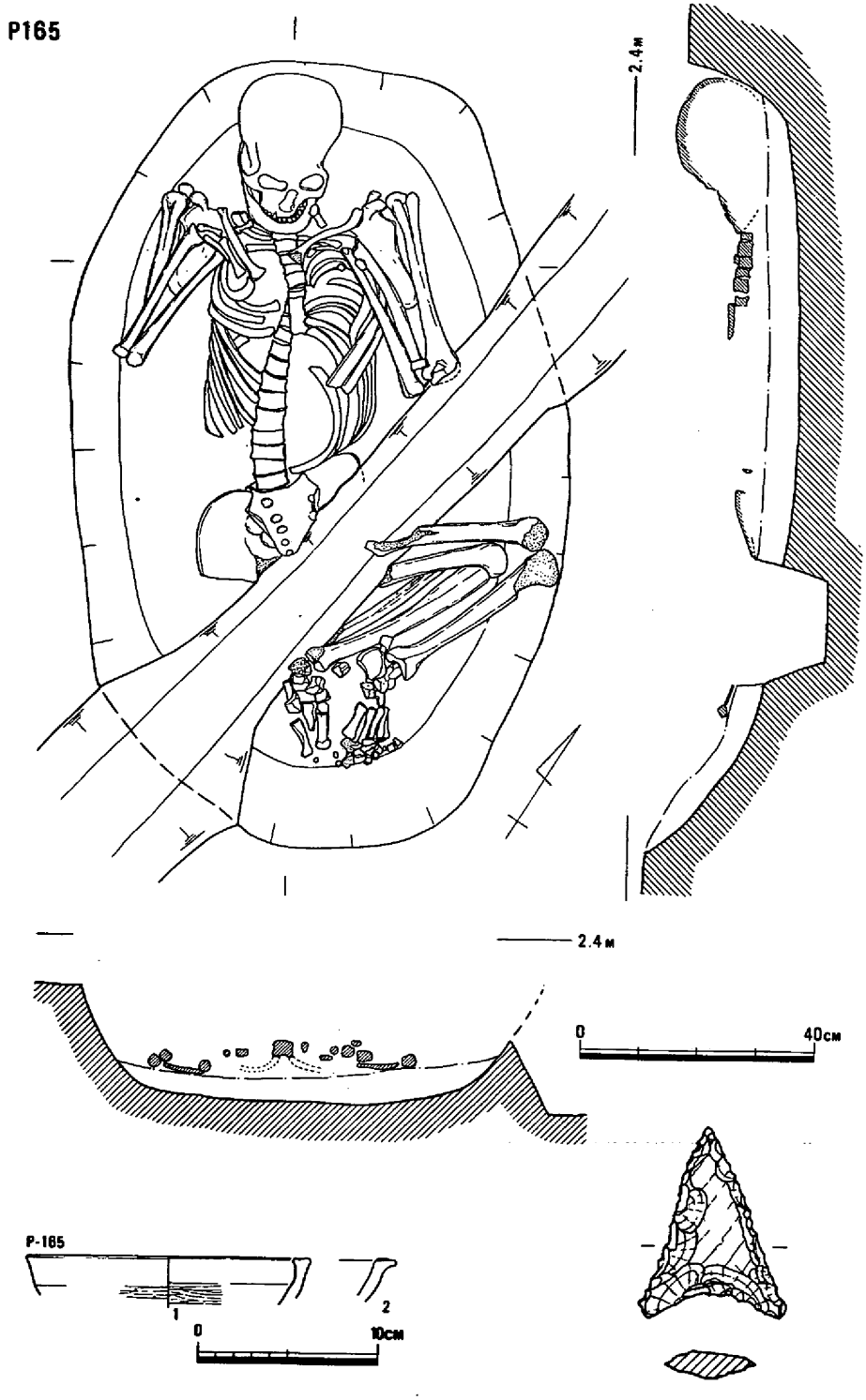
時期は弥生時代中期中葉の中では比較的後出の様相を窺わせる。

土 壙 5 （第32図）

N13・W12にあり，土壙40・41を切っている。直径0.7mの円形土壙である。椀状を呈する土壙で明確な底面はもたない。深さは0.3mを測る。壙内は灰黒褐色土のみで充ちている。



第32図　土壙23・10・5　遺構図（S＝1/30）



第33図　土壙165　人骨実測図（S＝1/12），出土遺物（S＝1/4，1/1）

遺物は図示のできない破片のみ数片出土している。時期は弥生時代中期中葉か。（柳瀬・岡本）

土 壙 165 （第33図，図版14）

N13・W９の位置に，人骨を伴って検出された。土壙は平面的には楕円形を呈し，底は多少舟底形である。長径1.3m，短径0.85m，深さ約0.2mを測る。壙内堆積土は暗灰褐色を呈し，壙底と人骨検出レベルとの間層土も，上部の堆積土と差はなかった。人骨は，調査予定地の周囲に入れた湧水に備えての排水溝掘削時に発見した。そのため，図面上では骨盤と大腿骨の一部を欠損している。人骨は頭をN－31°－Wに向け，仰臥屈葬されていた。壙底と人骨検出レベルとの間に５～６cmの間層が認められるのが多少気になるが，土壙の平面形態からすれば，木棺が使用された可能性は少ない。全体に人骨の各部位の保存度は良好であり，手や足の指の骨までほとんど確認できる。手は肘と手首をそれぞれ内側に折り曲げ，足は股と膝のところで折り曲げられている。また，現状では胸椎の５番目あたりから下が多少ずれており，足は左側に倒れる状態を示すが，本来埋葬時に立膝にしていたものなのか，初めから現状に近い状態であったのかの判定は下せない。

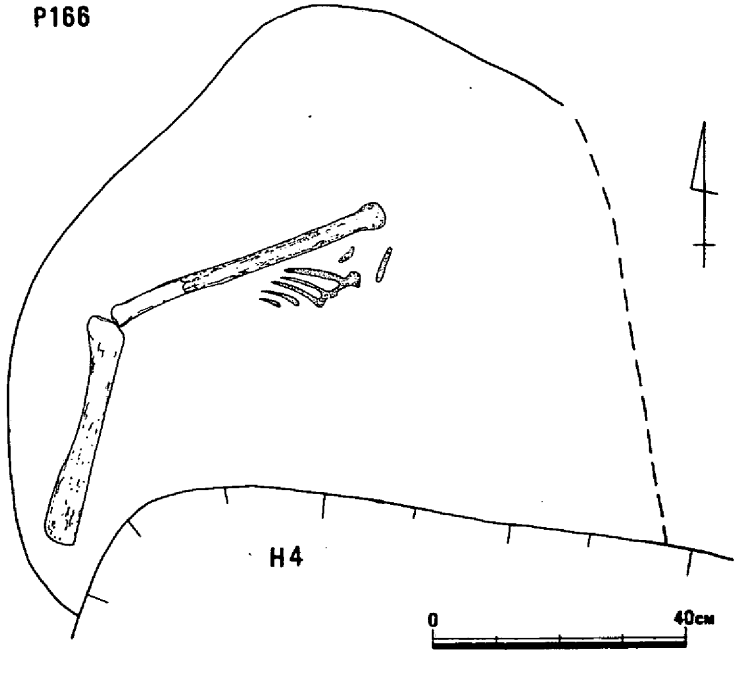
遺物　人骨のほかに数片の土器片と石鏃１点を検出したが，いわゆる供献などによるものでなく覆土からの出土である。

高杯形土器１・２はどうにか図示できるほどの細片である。１は口縁端部をわずかに内外に肥厚させ，杯部内外面に篦磨きを加えている。２は口縁端部を外側に拡張させて，上部端面に円形浮文を貼り付けている。石鏃は凹基式のサヌカイト製である。1.17gを計る。

高杯形土器の形態的特徴から言えば，弥生時代中期中葉に比定できる。土器は覆土中の細片であるためこの土壙の時期を確定することはできないが，周辺の遺構の在り方及び遺跡全体の時期幅を考えたとき，ほぼ近い時期だとみてよかろう。

土 壙 166 （第34図）

N12・W12に位置する。土壙139と140を切り，住居址４に切られて存在する。削平により平面形はほぼ底の形態を残している。東側の一部は平面形がはっきりしない。人骨はほとんどボロボロの状態で，上腕骨あるいは前腕骨と思われる骨以外には，わずか



第34図　土壙166　人骨実測図（＝1/12）

に胸骨と肋骨の一部を残すのみである。長く見える骨は二つが重なっていると思われる。

この土壙に土器は伴っておらず，また土壙139と140にも土器が見られないことから時期決定を困難にしている。ただ，住居址4は古墳時代前期の古い時期の土器を伴っているので，それより先行する時期は与え得る。一方，土壙165や土壙墓と思われるものが付近に存在するため，墓域として捉えるならば165と近い時期の可能性が強い。

各種土壙及び包含層遺物（第35図～第40図，図版16・22・23・24）

前記の土壙については，出土遺物にある程度まとまりがあるもの，あるいは時期的にあまり差がないと思われるものについて図示できるものを抽出し記述してきた。ここでは，遺構の時期を直接には示さないが文様や形態に特徴があり，時期の目安になると思われる土壙出土の遺物と，同様の包含層出土の遺物を取り上げた。

土器　**包－1**はラッパ状に開く口縁部をもち，端面に1条の沈線を繞らせた上から刻み目を施す。内面には刷毛調整ののち，細めの三角凸帯を3本併行して弧状に貼り付けている。**包－2**は端面に楕円形の刻み目を繞らせ，頸部には現状では2本の沈線を施して一見削り出し凸帯風を呈す。**包－3**は粗い刷毛目の上に肩部及び頸部に沈線と波状文を施す。器形的には**包－4**などに似るが，施工具は半截竹管が用いられており，いわゆる櫛描沈線とは区別される。胎土に土壙24出土遺物などと同様に，大粒の砂粒を含む。以上の壷形土器は弥生時代前期後葉に比定できる。

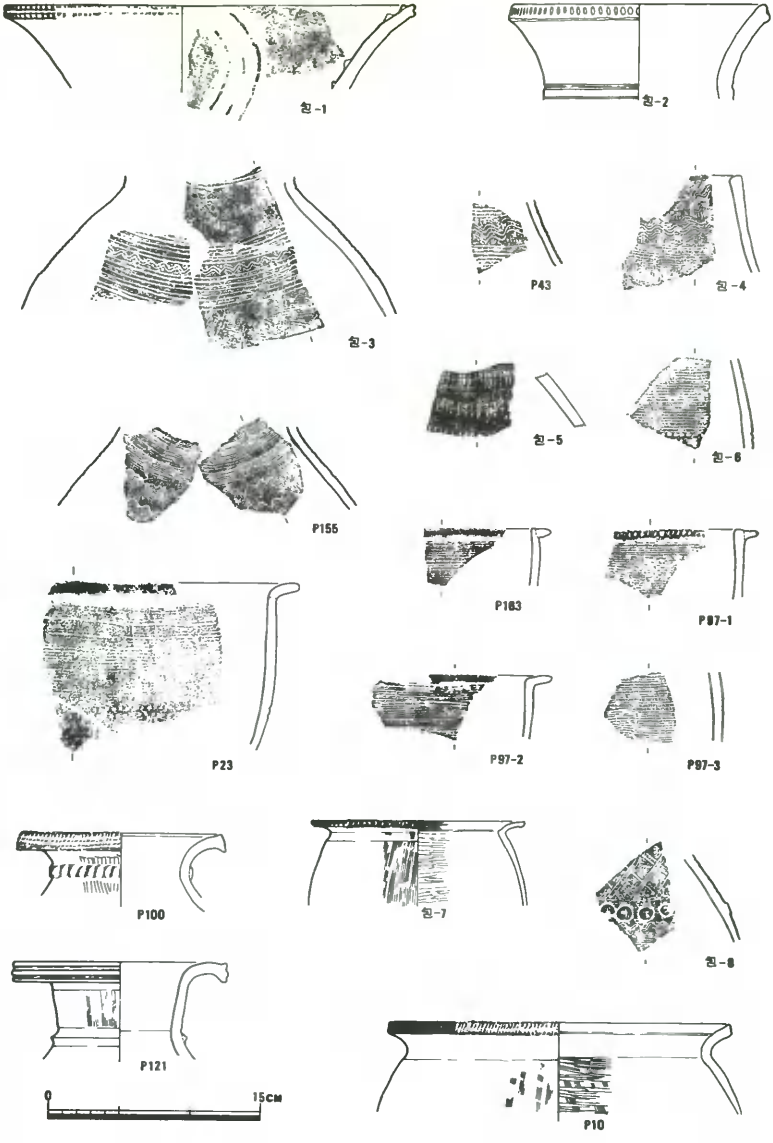
P44，包－4・5，P155は器形的にも文様的にも**包－3**に後続する壷形土器である。**包－5**は櫛描沈線文が部分的に簾状文風に施文されている。この種の文様は当地方においては極めて少ない。櫛状工具は8本1単位である。**包－6，P23，P163，P97－1～3**の甕形土器は，口縁部が倒「L」字状を呈すものばかりではないが，胴上部の文様はいずれも櫛描沈線によっている。**包－7**は肩部があまり張らず，外反して鋭く外方に折れ曲がる口縁部をもち，端面には刻み目を施すもので，口縁部の内面にも篦磨きを加えてある。以上，弥生時代中期前葉に位置づけられる。

包－8は肩部に櫛描きの斜格子文と平行沈線及び波状文を施し，上に円形浮文を配した壷形土器である。時期的には中期前葉～中葉に位置づけられよう。**P100，P121**は文様の装飾には差があるものの，土壙26や土壙61の壷形土器と器形的にも胎土や手法においても大差はない。中期中葉の範疇で捉えられよう。

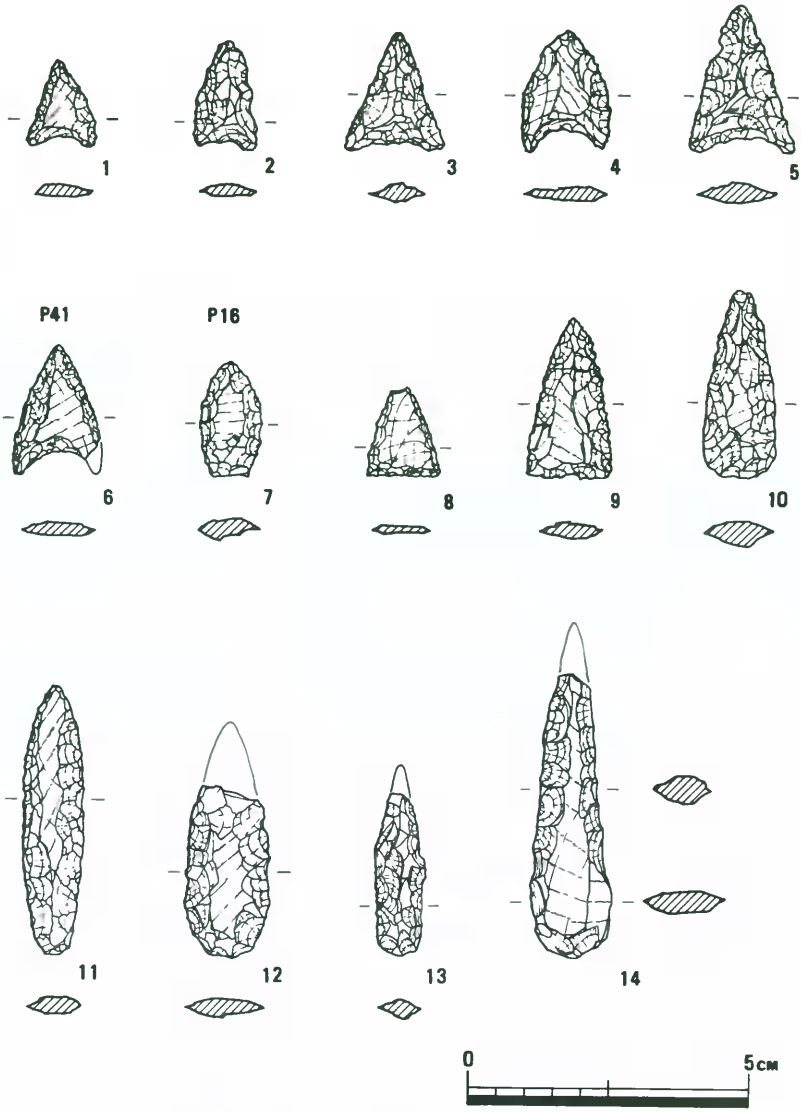
石器　石鏃，石庖丁，スクレーパー，石槍，砥石，蛤刃石斧などが出土している。またサヌカイトの剥片は120片を越す。なお砥石と蛤刃石斧のほかは，いずれもサヌカイトの打製である。

石鏃は土壙に伴う**6・7**を除き，**1～14**は包含層または古墳時代住居址の覆土からの出土である。基部の形状によって凹基式（**1～6**），平基式（**7～9**），凸基式（**10～14**）の3種に分けられる。**1～9**まででは，0.4～1.2gの重量を計る。**12～14**は先端を欠損しているが，錐の可能性もある。**10**は2.2g，**11**は2.3g，**14**は3.9gを計る。

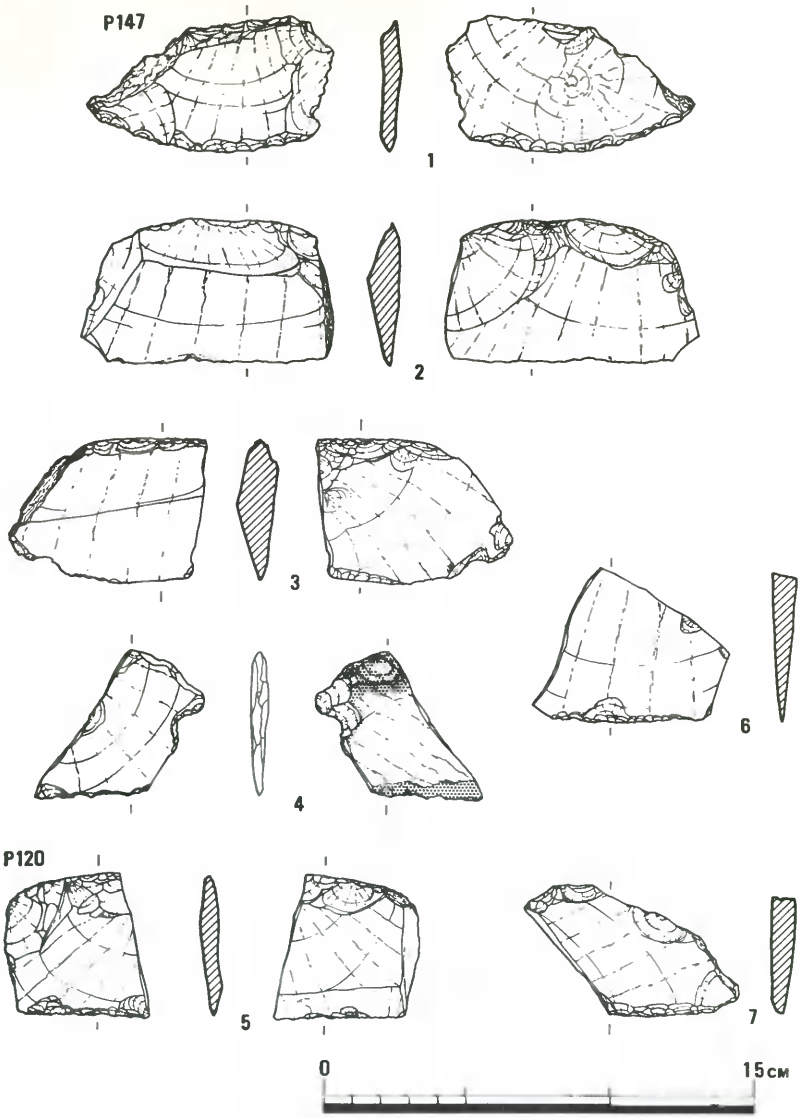
石庖丁は**1・5**以外は包含層からの出土である。完形のものあるいは完形に近いものは少ない。**4・7**を除きいずれも短辺に自然風化面を残す。長辺の上部は**6**のほかはかなりの調整が加えられ



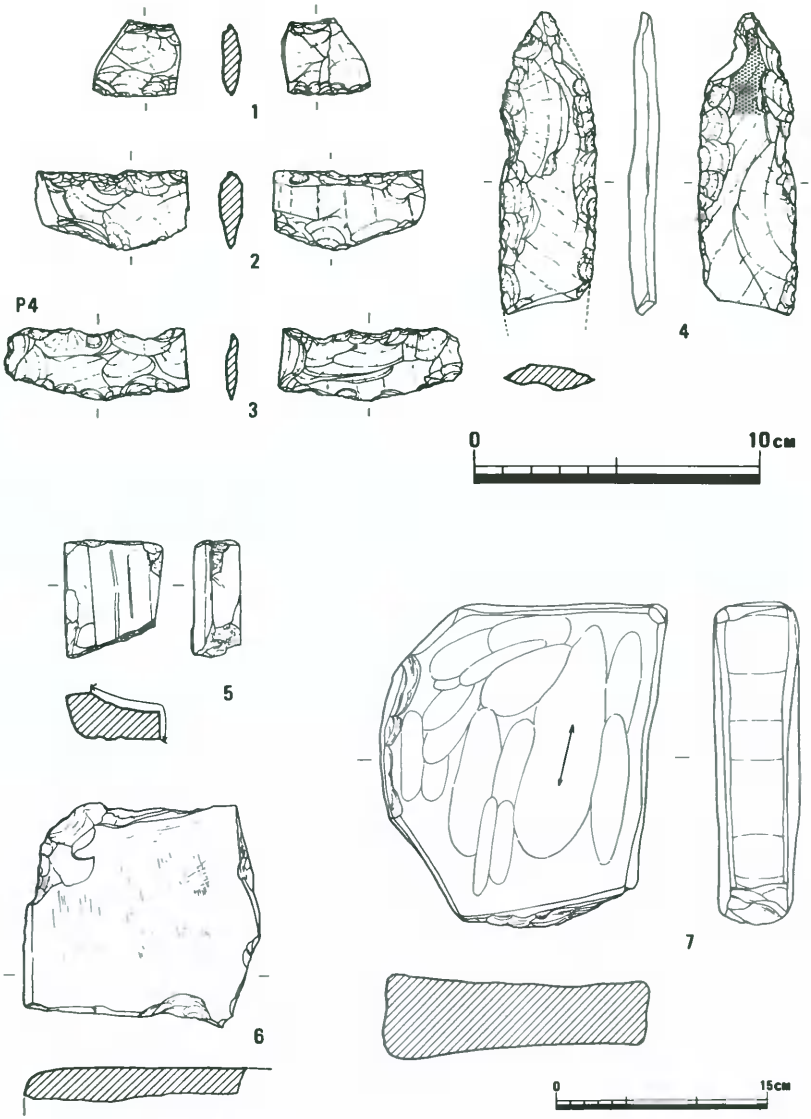
第35図　各種土壙，包含層出土土器　(S＝1/4)



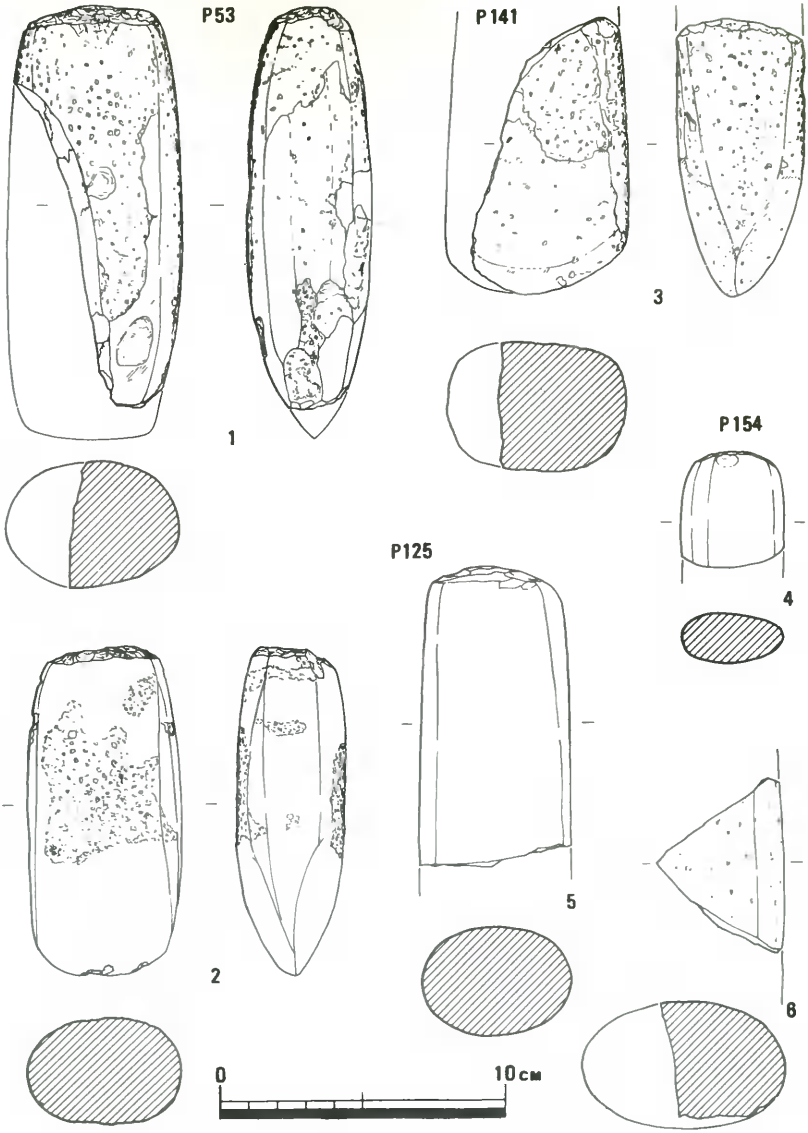
第36図　土壙，包含層出土石器Ⅰ（S＝1/1）



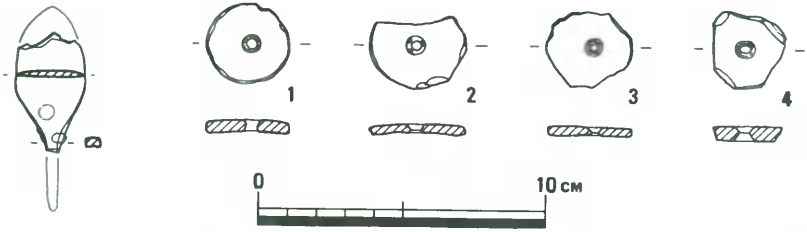
第37図　土壙，包含層出土石器Ⅱ　（S＝1/2）



第38図　土壙，包含層出土石器Ⅲ（S＝1/2，1/4）



第39図　土壙，包含層出土石器Ⅳ　（S＝1/2）



第40図　包含層出土鉄器，紡錘車　（S＝1/2）

ているが，下端（刃部）は主要剝離面で形成された鋭角の稜部をそのまま利用したもの（2）や比較的加工の少ないもの（3・5・6）もある。現状では短辺に抉りをもつものは4のみで，裏面にはプラントオパールによる磨滅痕が観察される。完形の2は63.5g，また4は15.2gを計る。

スクレーパーとした1～3は不定形を呈し，上辺は調整されている。3は特に雑な剝離痕をもつ。石庖丁などの欠損品を再加工したものであろう。1・2・3はそれぞれ8.0g，17.8g，10.6gを計る。4の石槍は一部欠損している。刃は比較的粗く付けられている。裏面の先端近くの大剝離面にプラントオパール痕が残ることから，石庖丁の転用と考えられる。38.2gを計る。

砥石はいずれも包含層から出土している。5は上面と側面に磨面をもつ。上面はわずかなカーブをもって窪んでいる。磨面には小さな凹凸がみられ，図の上下方向においても中央部がわずかに窪む。28.5gを計る。6は大きな砥石から剝離した一部である。磨面にはわずかに擦痕が残る。7はほとんどの面が磨面として使用されている大型のものである。4.32kgを計る。砥石はいずれも砂岩である。

蛤刃石斧は2が完形のほかは，いずれも破損している。1は全体に砥がれているが，刃部を除き調整敲打痕をわずかに残す。2・4・5は全体に丁寧に仕上げられ，2は表裏両面の中央部に敲打痕が顕著である。3は刃部に砥ぎ痕跡が認められるが，形状からみて未製品であろう。石材は閃緑岩あるいは斑糲岩である。完形の2は437.2gを計る。

第40図の鉄鏃及び紡錘車はいずれも包含層から出土している。鉄鏃は先端部と茎の大半を欠損している。身部は表面にわずかにふくらみをもち，茎は裏面に凹部をもつ。4.3gを計る。紡錘車はいずれも土器片を利用して縁部を比較的丸く調整し，中央に穿孔している。胎土に0.5㎜前後の砂粒を含み，また裏面に筐磨き痕を残すものもあり，土器片の特徴からは弥生時代中期中葉の時期を与え得る。1～4は，それぞれ4.3g，3.5g，3.3g，4.5gを計る。　（柳瀬）

註1.　土器型式でいう門田式の時期

註2.　土器型式でいう前山Ⅱ式の時期

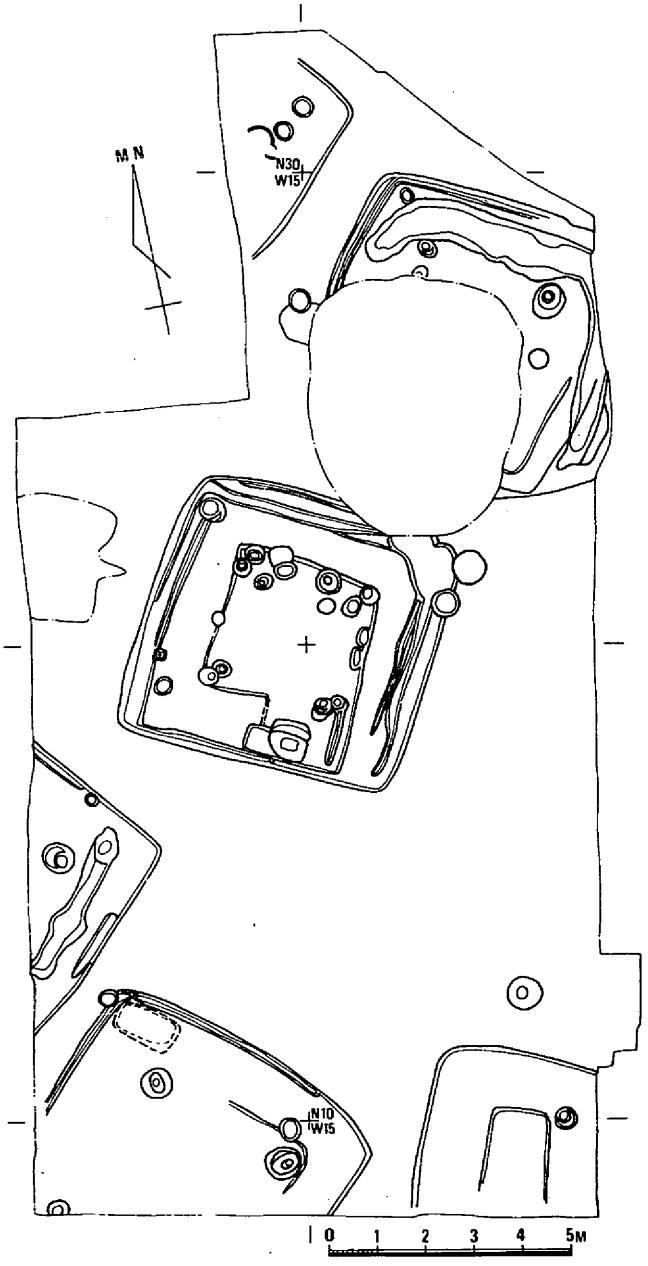
註3.　土器型式でいう南方式の時期

註4.　土器型式でいう蒐池式の時期

第2節　古墳時代の遺構と遺物

今回の調査によって検出した古墳時代の遺構は住居址6基と土壙十数基であり，その分布は第41図に示すとおりである。土壙の数がきわめて少ないが，出土遺物と住居址等との切り合い関係によって明確に古墳時代と判断される以外の土壙は一応弥生時代の遺構としているためである。

住居址6基は重複することなく調査区内全域に分布する。いずれも方形の平面形をもち，北からやや東へ振ったほぼ同一の方向性を有する。各住居址の出土遺物から判断していずれも古墳時代前期のものであるが，6基が同時に存在したかどうかについては，第4章で少し考察を加えたいが，まずその近接状況からしてありえないと考えられる。2ないし3基程度が併存したのではないかとみられる。住居址3は建て替えられているが，他の住居址にはその痕跡をみない。住居址の形態をみれば，住居址3と住居址6は高床部をもち，住居址2と住居址5には溝状遺構が伴うというような組合せがみられる。これも住居址の変遷を考える指標となりえよう。なお，焼失したとみられるような住居址はなかった。この地域が古墳時代前期に居住地，それも集落の中心部として利用されていたことは確かである。



第41図　古墳時代前期遺構分布図（S＝1/160）

住居址1（第42・43図，図版2）

調査区の北端，N30・W15で検

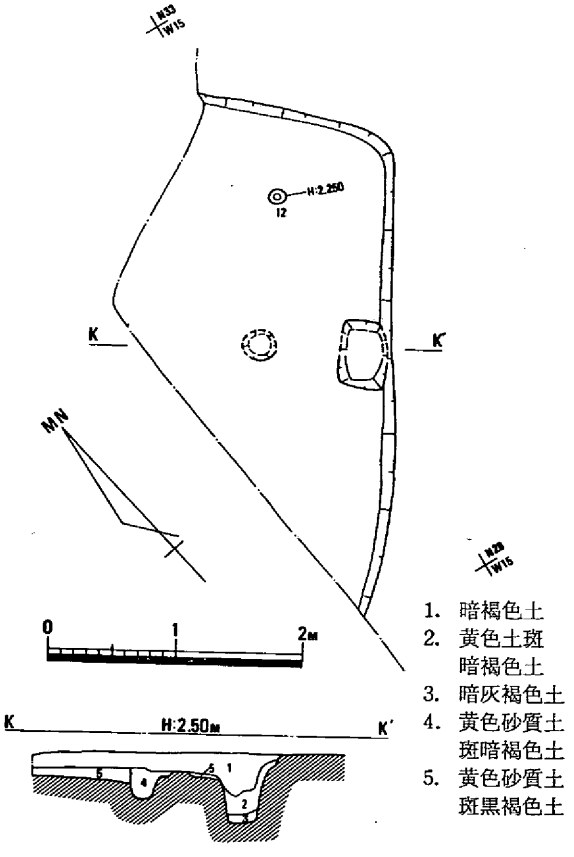
出された竪穴住居址である。全体の¼程度とみられる。南東辺は検出部分で3.8 mを測り，ほぼその中央付近で壁に接して30cm×55cmの方形土壙が伴っている。深さは床面から0.4mである。床には地山の黄褐色砂質土の砕粒を多量に含んだ貼床層（5の層）があり，その厚さは5～10 cmである。精査したにもかかわらず柱穴は検出されなかった。方形土壙の北西に直径25cmの小円形土壙がみられたが，深さが床面から25cmと浅く，とてもこの住居址の主柱穴と考えることはできない。残存部分から判断して，方形の平面形をもつことは間違いない。

床面での遺物の出土はほとんどみられなかった。わずかに壷形土器の体部完品（12）が床面から3 cm程浮いた状態で出土したにすぎない。

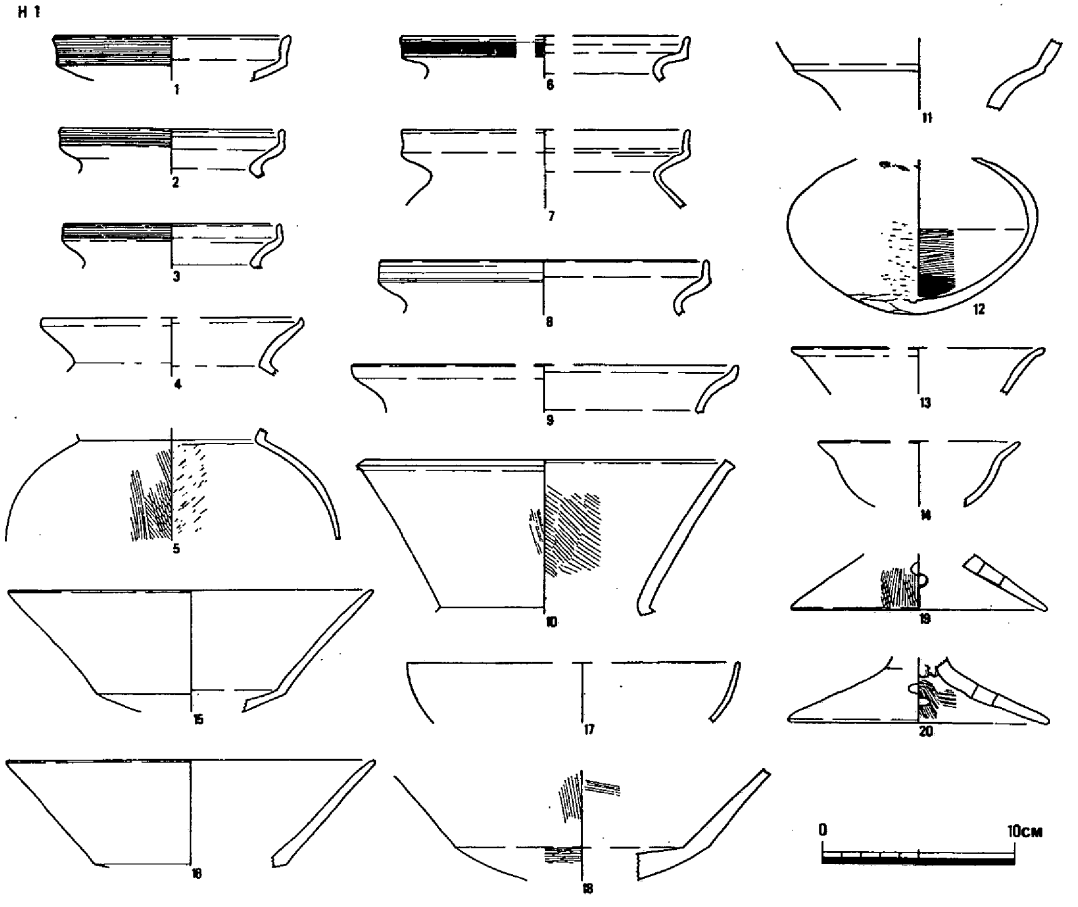
遺物　床面より出土したことが明瞭なものはなかった。遺物は埋土上層と下層の2層に分けて取り上げた。この分層は高度差によるが，下層には一部貼床層包含の遺物の含まれている可能性がある。下層出土のものは1～4・6・8・12～14・16・17・19・20である。

1～9は甕形土器である。口縁部が屈折して上方に高く立ち上がるものと，単に「く」の字状に外反して端部をつまみあげたもの（4・9）の2種がみられる。前者の立ち上がり部外面にはいずれも櫛描直線文を施すが，端部の形状には端面らしいものをもつもの（1），単に丸くおさめたもの，内面が肥厚するもの（2）と変化がある。概して立ち上がり部は薄く，わずかに外反する。4の口縁端部は尖り，内面体部上端の稜は鋭い。9の端部は丸くおさめられ，全体に鈍い感じを与える。9の色調は白色，4は茶褐色を呈するが，他は灰褐色で，焼成は9以外いずれも良好で堅緻である。

10～13は壷形土器である。その形状は各種各様で変化に富む。10は大型の直口壷で球形に近い体部をもつであろう。口縁端面は明瞭で稜は鋭い。上下両側へ若干拡張する。胎土は砂質で多粒の細砂粒を含み，焼成は良好で堅緻，色調は淡赤褐色～淡褐色を呈す。11は二重口縁の壷形土器で，立ち上がり部分は貼り付けによるとみられる。12も直口壷であろう。底部中央には小円穴がある。体部外面下半は篦削りで調整している。胎土には細砂粒が多量に含まれる。13の口縁端部は外へ少し折り曲げている。砂粒をかなり含む胎土である。



第42図　住居址1　遺構図（S＝1/60）



第43図　住居址１　出土土器（S＝1/4）

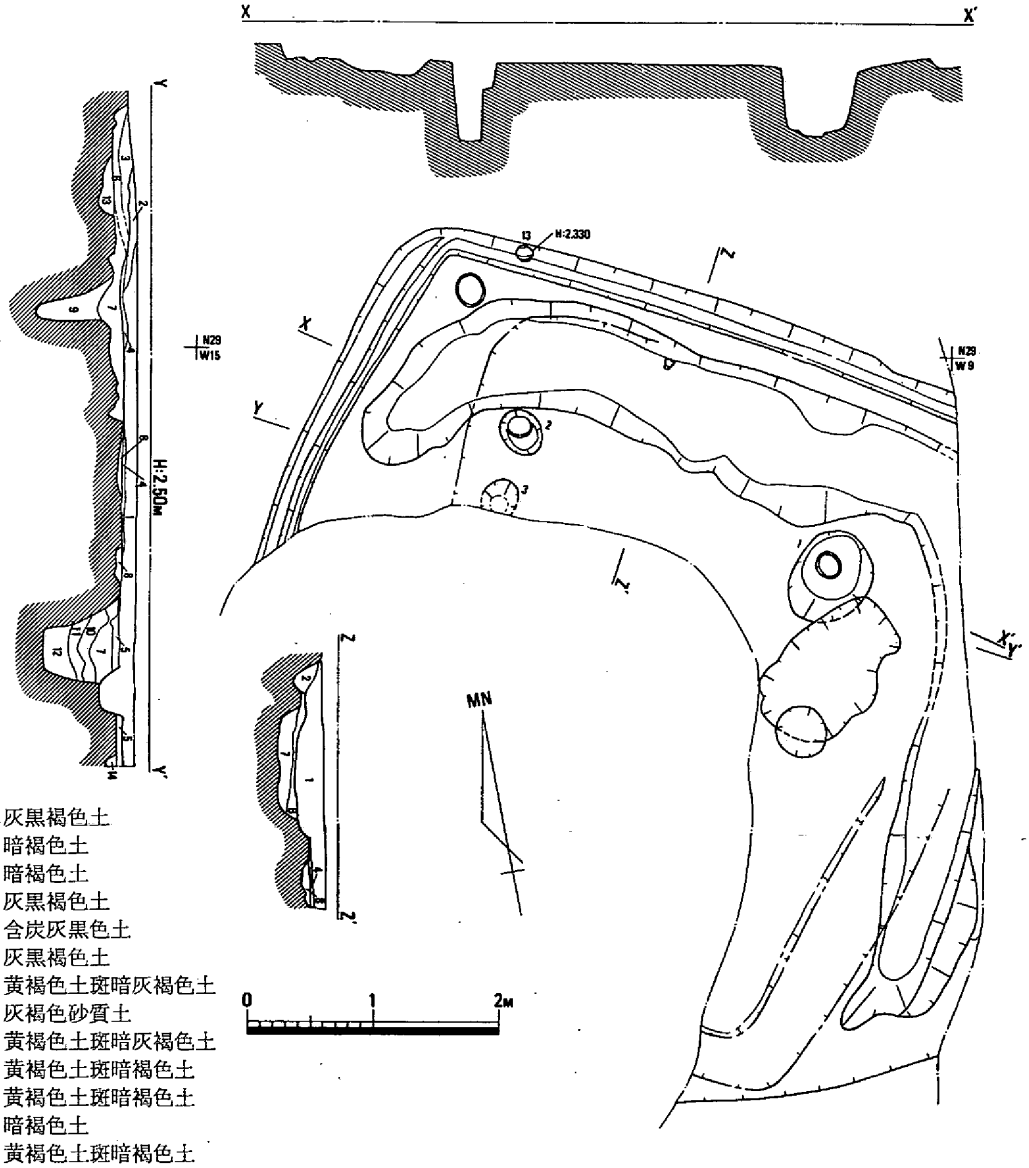
14は坩形土器である。口縁部は内彎気味で端部は丸くおさめる。胎土には細砂粒を多く含む。

15～20は高杯形土器である。口縁部の形状にはラッパ状に大きく開くものと椀状に内彎するもの（17）の２種がある。脚部でも直線的に開くもの（19）と強く外反するもの（20）の２種がある。胎土はいずれも細砂粒を含むが，精良で緻密である。色調も20の暗灰茶色以外すべて褐色・赤褐色を呈する。

住居址２（第44・45図，図版２・３・21）

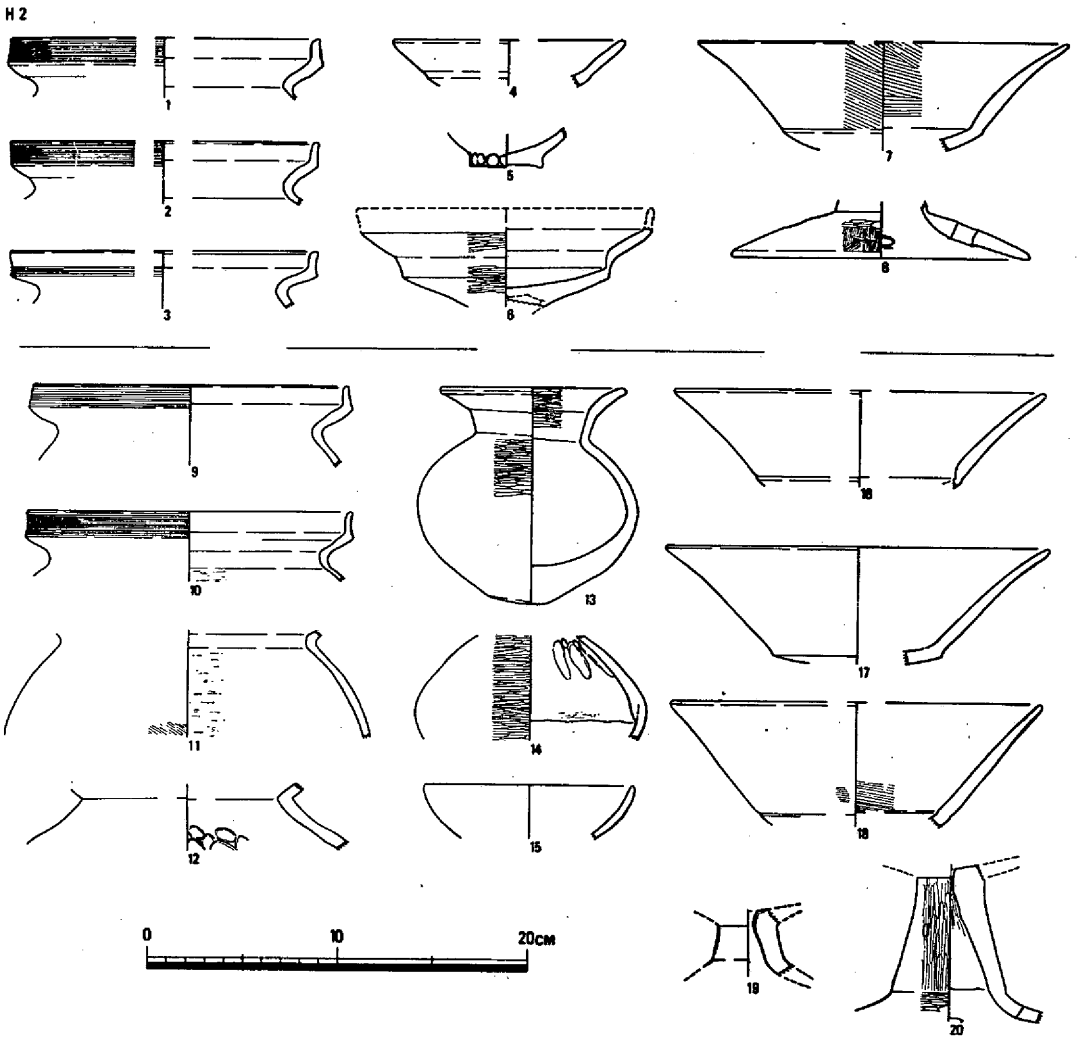
住居址２はN26・W12あたりを中心に位置している。ほぼ全体が調査区域内にあるが，南西部分は採土壙により大きく破壊されていた。方形の竪穴住居址である。南東隅については明瞭な線を確認できなかった。検出面から一段下げた段階で図の破線で示した線を検出し，北東辺の乱れから２基の住居址の切り合いの可能性を考えたが，明瞭な壁を確認できず，最終的に地山面まで下げて第45図の遺構図を得た。

この住居址のもっとも大きな形態上の特徴は壁面に沿ってかなり不整形な溝状の落ち込みをもつことである。この落ち込み埋土からは古墳時代前期の土器片が出土し，ほぼ壁面に平行することから住居址に伴うと考えざるをえない。ただ，土層観察の結果，床面下に埋没していることがわかり，実際の居住生活においてどのような働きをしたかは疑問であり，その機能については判然としない。土層断面図にみられるように，この住居址の掘り方床面である地山面には凹凸がかなりあり，凹部に土を入れ，平坦な床面をつくっている。床面は4の層の底面，5の層の上面である。一応貼床と呼ぶべきであろう。床面は一面しか確認されないが，柱穴1を埋めて床が貼られていると



1. 灰黒褐色土
2. 暗褐色土
3. 暗褐色土
4. 灰黒褐色土
5. 含炭灰黒色土
6. 灰黒褐色土
7. 黄褐色土斑暗灰褐色土
8. 灰褐色砂質土
9. 黄褐色土斑暗灰褐色土
10. 黄褐色土斑暗褐色土
11. 黄褐色土斑暗褐色土
12. 暗褐色土
13. 黄褐色土斑暗褐色土
14. 暗褐色土

第44図　住居址2　遺構図（S＝1/60）



第45図　住居址２　出土土器　（S＝1/4）

考えざるをえない土層状況があり，前述の破線の存在を考慮すれば，再度，住居址２基の切り合い関係あるいは住居の拡張が想起されるが，現時点ではその平面形態を復原しえない。したがって，ここではその可能性があるとしておく。北東壁と北西壁では壁体溝が検出された。柱穴は３基検出されたが，１と２が対応するとみられ，その柱間は2.7mを測る。１は長径80cmと大きく，深さは床面より60cmあり，直径20cmの柱痕が認められる。２は長径40cm，深さ75cmと深く，直径25cmの柱痕をとどめる。３は深さ65cmを測る。４本柱の住居址であろう。北東辺は4.5m分を検出したが，推定で一辺６m前後の規模であろう。

遺物　**1～3**は床面下貼床層，**4～6**は床面上，**7・8**は溝状遺構出土で，**9～20**は埋土より出土した。

1～3・9～11は甕形土器である。口縁部はいずれも屈折して上方へ高く立ち上がる。立ち上が

り部外面には櫛描直線文を施す。口縁端部は大概丸くおさめるが，3は明瞭な端面をもち，1・2もそれに近く肥厚している。10の立ち上がり部は薄く，外彎する。いずれの胎土も細砂粒を多量に含む。焼成は良好，暗灰褐色～淡灰褐色の色調を呈する。

4・12～14は壷形土器である。12は大型の壷形土器とみられ，他は小型で球形ないしは下膨れの体部をもつ。12は体部上端内面に指頭圧痕を残し，胎土には細砂粒を多量に含む。褐色を呈し，焼成良好である。4は二重口縁の小形壷形土器であろう。口縁の屈折部から上方は強く外傾する。胎土は精良できめが細かい。13は直口壷の変形であろう。口縁部上半は厚くなって大きく外反し，口縁部下半は頸状になる。色調は褐色で，胎土には細砂粒が多く含まれる。14も直口壷であろう。胎土は精良緻密である。体部内面はナデて調整するが，一部箆削りがみられる。

5・15は鉢形土器であろう。5の底部外縁には指頭圧痕がめぐる。15は内彎する口縁をもつ浅い鉢であろう。いずれも胎土は細砂粒をかなり含むが精良で，淡褐色を呈する。

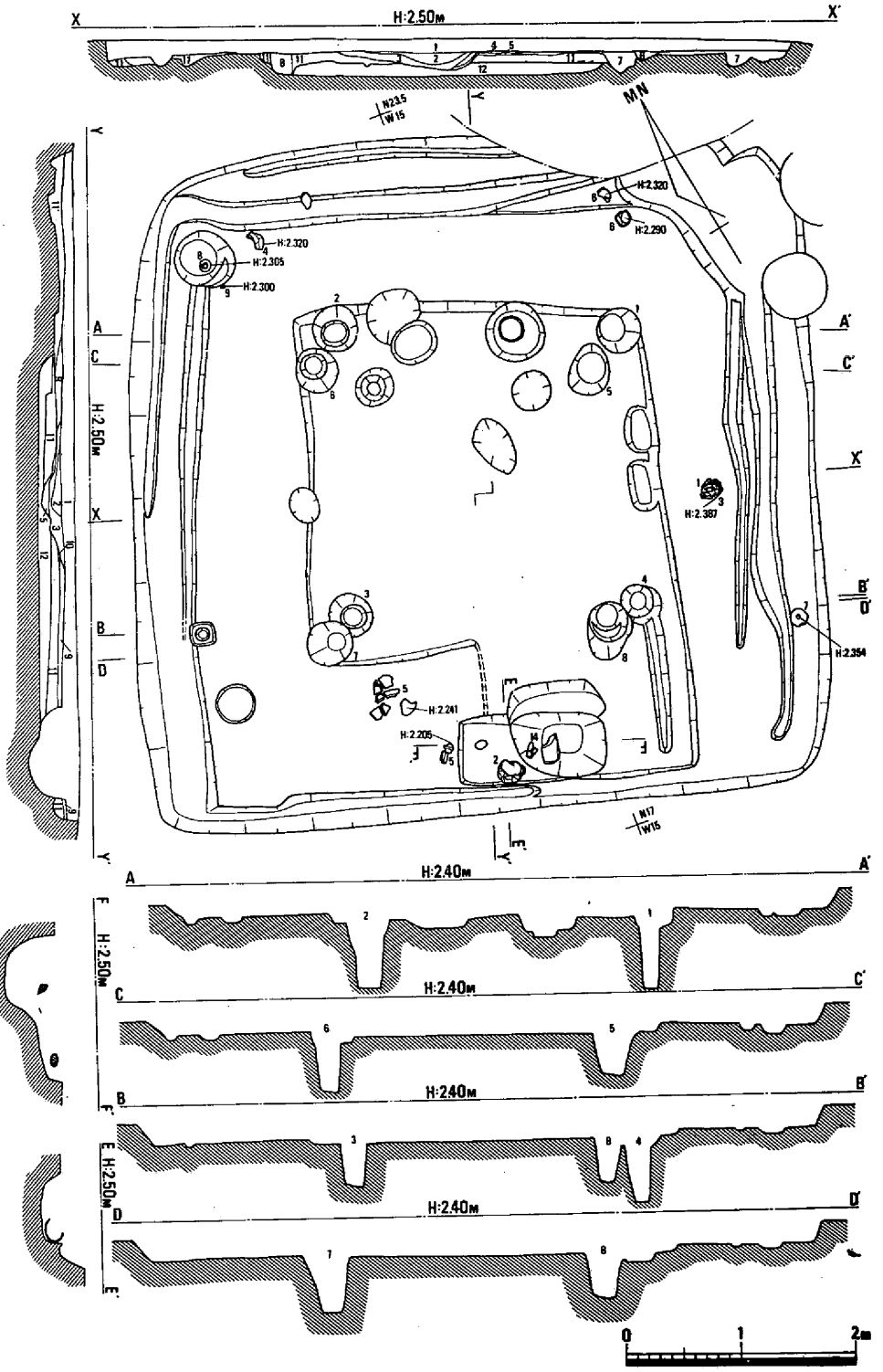
6～8・16～20は高杯形土器である。口縁部はいずれもラッパ状に大きく開き，端部は丸くおさめる。6のみ二重の口縁部とみられる。胎土はすべて精良緻密，色調は淡褐色～淡赤褐色を呈す。脚部では柱状部の短いもの（19）と長いもの（20）の両種があり，8は柱状部が長くなるであろう。

住居址3（第46・47・48・49図，図版3・4・20・21・22）

N20・W15あたりを中心として調査区のほぼ中央に位置する方形の竪穴住居址である。北東隅の一部を採土壙で壊されているが，全形を捉えることができた。柱穴ならびに埋土の断面観察から建て替えられたことは確実である。

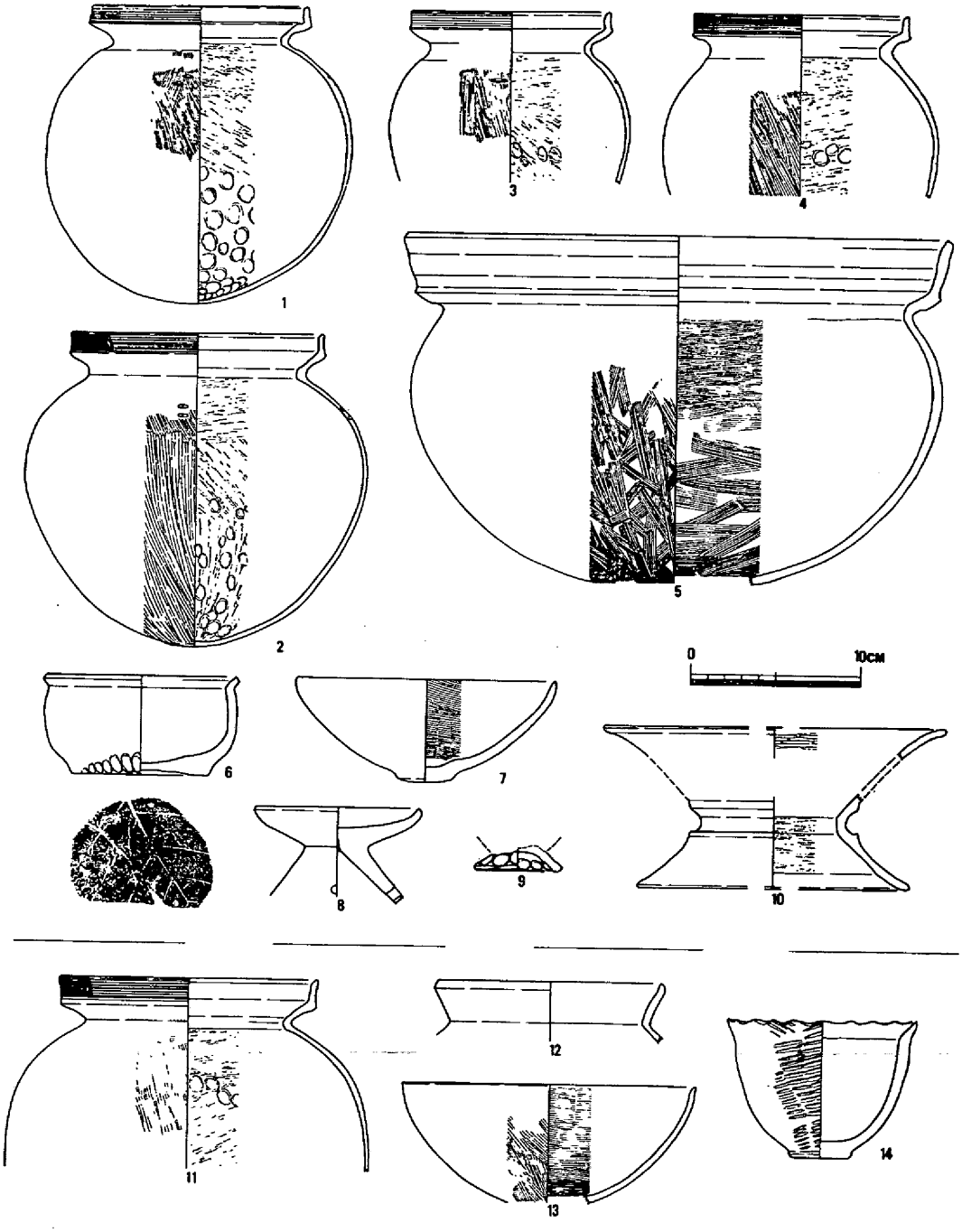
4本柱の住居址で，1～4，5～8がそれぞれ対応する。前者の柱間は1と2の間が2.45m，2と3の間が2.4mを測り，後者では5と6の間が2.4m，6と7の間が2.3mあり，ほぼ同規模で建て替えられている。3と7の切り合い関係から，少し南西へずれて建て替えられたと考える。壁体溝が東壁側・北壁側・西壁側にそれぞれ2条検出されている。土層観察の結果ではいずれも上層の第2次床面下に埋没しているようにみられたが，土層図1・7・8′はともに暗灰褐色土でよく類似しているため，建て替えられていることを考えれば第2次床面上から落ち込んでいるものもあろう。したがって，東壁側の外の壁体溝と北壁側の内の壁体溝，それに西壁側の外の壁体溝を第2次の床面に伴うものとすれば，最初の住居址の規模は東西5.5m，南北5.8m，建て替え後は東西5.6m，南北5.4m程度ではないかと推定される。2枚の床面は当然建て替えによってできたもので，それぞれ建て替え前と建て替え後の床面と考えられる。

第1次床面では中央部分が東西3m，南北3mの規模で5～10cm程度落ち込み，周縁に高床部が形成されている。中央の落ち込みは南辺では東半が壁側まで伸びている。この中央の落ち込みは竪穴の掘穿時点から企図されていて，住居址の掘り方は中央部分では周縁部より20cm深く，地山面を4cm掘り込んでいる。この中央落ち込み部分には10cm前後の厚さで地山を掘削した土が敷かれ，貼



1. 暗灰褐色土
2. 炭
3. 含炭灰黒色土
4. 黄色粘土斑暗灰褐色土
5. 炭
6. 暗灰褐色土
7. 暗灰褐色土
8. 黒褐色土
9. 黄褐色粘土斑含炭暗灰褐色土
10. 焼土
11. 黄色粘土斑暗灰褐色土
12. 灰褐色粘土斑黄褐色粘土

第46図 住居址3 遺構図 (S＝1/60)



第47図　住居址３　出土土器（S＝1/4）

床（12の層）がつくられている。中央落ち込み部分では円形ないしは楕円形の土壙がいくらかあったがいずれも浅いもので，中央土壙も存在していない。ただ５の柱穴の西に接した皿状の土壙内に

は炭が充塡されていて注意された。

第２次床面は第１次床面に地山砕粒を含んだ土を敷いて再度貼床（９・７・11の層）をつくって形成されていて，この貼床層は中央落ち込み部分だけでなく，高床部にもみられる。第２次床面には中央の広い落ち込みはなく，全面平坦にされている。細かく土層を観察すると，９の層と11の層の間には焼土（10）が挟まれていることがわかり，11の上層が床面であった時期が考えられるかもしれない。第２次床面では中央に直径65㎝，深さ18㎝の土壙があった。底には炭が堆積して薄層をなし，間層を挟んで再度炭の充塡がみられた。

南壁に接し，中央部分よりやや東で方形土壙の伴っているのが確認された。土壙は検出面で東西1.3m，南北0.6mを測り，東半0.8m分は西半より一段深くなっている。東半の深さは第二次床面から0.35m，西半は0.2m前後である。土層観察の結果から，西半は第２次床面を切っていることが確認されたが，この方形の土壙のあり様がいささか複雑であり，建て替えのあったことを考慮すれば，この土壙の東半部分は第１次床面に伴う可能性がある。調査時点では確認しえなかったが，２土壙の切り合いと考えるのが妥当なようである。

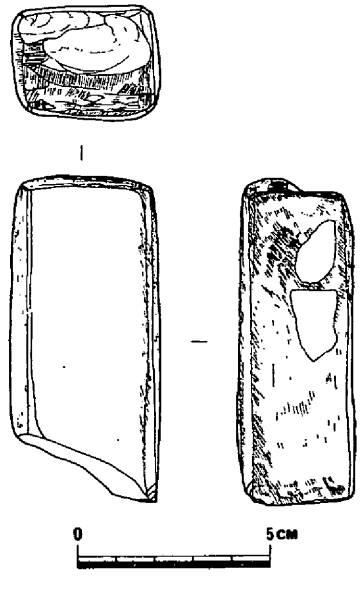
遺物　床面からかなりまとまって遺物が出土しているため，まずそれらについて述べたい。第47図の破線から上は床面出土であり，**5**は第１次床面，**2**は南壁方形土壙底面，他は第２次床面に付着して出土した。破線より下は南壁方形土壙埋土出土である。

1～**4**は口縁部が屈折して立ち上がる甕形土器である。立ち上がり部外面には櫛描直線文を施す。口縁端部は丸くおさめているが，いずれも内へ傾斜する端面の名残りをとどめている。体部の形状は**1**・**3**・**4**では球形となるが，**2**はやや肩が張る。**1**の底部は完全な丸底であるが，**2**はかすかに平底の痕跡を残す。**2**の体部中央以下の箆磨きは底面に及ぶ。いずれも体部内面には底から中央付近まで指頭圧痕が顕著に認められる。**1**～**3**では肩部に２個あるいは１個の刺突文が施されている。胎土には細砂粒が多量に含まれている。

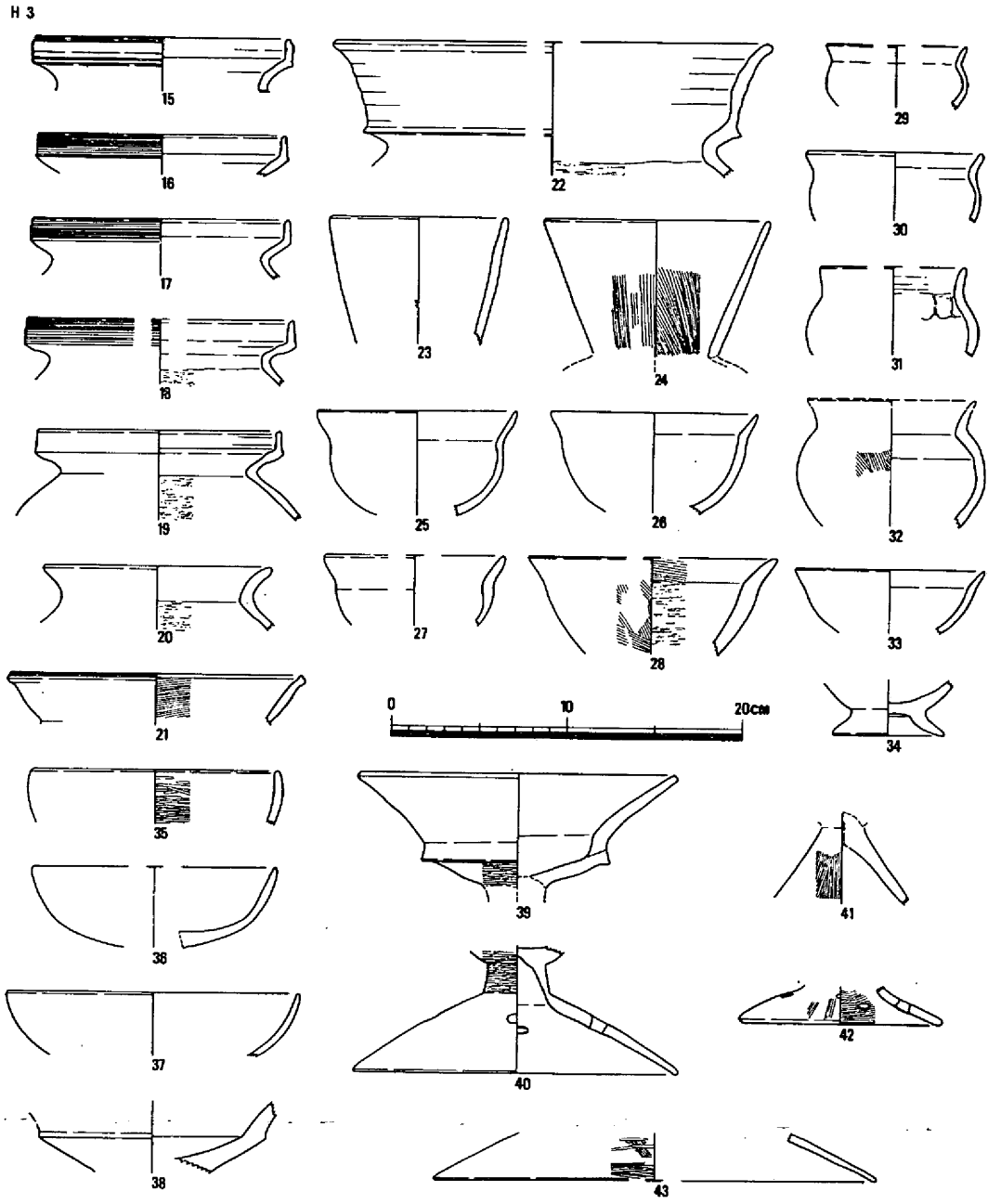
5は屈折して立ち上がる口縁をもつ大型の鉢形土器である。口縁端面をもつ。体部内面の上半には箆削りの痕を残す。胎土には多量の砂粒が含まれる。**6**・**7**も鉢形土器である。**6**は「く」の字状に外反する短い口縁部をもつ，端面は明瞭で稜は鋭い。底部周縁には指頭圧痕がみられる。平底で中央は凹み，木葉文を残す。胎土は細砂粒が多いが緻密である。**7**は内彎する直口の鉢である。底部は平底気味で突出する。胎土は砂質である。

9は製塩土器の底部で，暗灰赤褐色を呈し，焼成良好。胎土には石粒・砂粒を含む。

8・**10**は器台形土器である。**8**は皿状の杯部をもち，脚



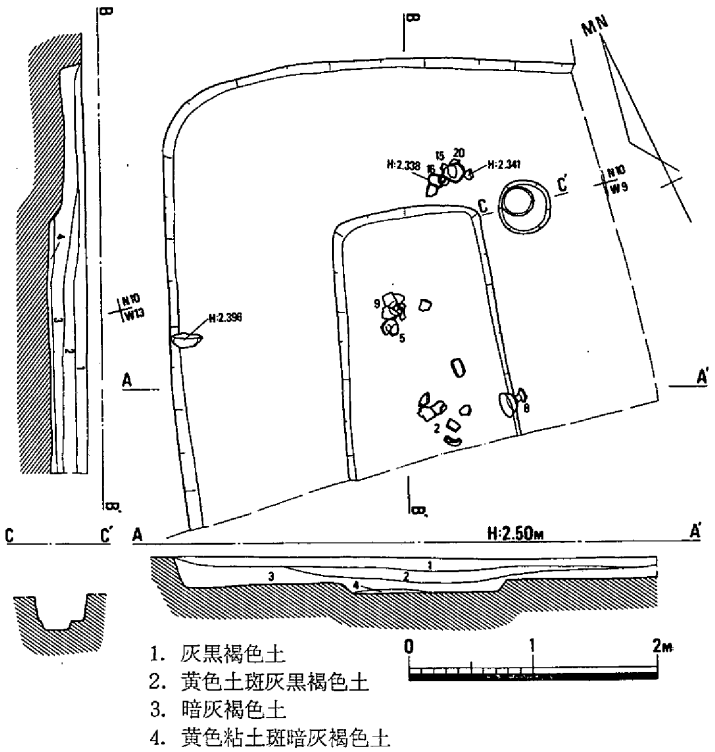
第48図　住居址３　出土石器（S＝1/2）



第49図　住居址３　埋土出土土器（S＝1/4）

部はまっ直ぐに開く，胎土は精良緻密で赤褐色を呈す。10は３個の小破片から復原したが，鼓形器台と考えられる。口縁部・脚部ともに小破片のため，径は推定である。口径が脚端径をしのぐとみられる。胎土には砂粒が多く含まれるが，焼成良好で堅緻，褐色を呈する。

第２次床面から砥石が出土しているので略述する。断面長方形を呈し，長さは8.7㎝である。各



第50図　住居址4　遺構図（S＝1/60）

面ともに細かい擦痕が無数に走り，鈍い光沢を放つ。稜は丸味をもつよう磨かれている。図の下端には欠損がある。砥石と考えているが，各面ともほとんど凹んでいないことと，木口面まで磨かれていることから，何らかの磨製石製品である可能性もある。石材はきめの細かい水成岩で，灰縁色を呈す。

11～43は埋土出土の土器である。埋土の土器は高度から上・中・下の3層に分けて取り上げた。下層出土のものは16・20・37。中層出土は15・23・26・27・30・35・40・41・43である。

11・12・15～21は甕形土器である。多くは屈折して立ち上がる口縁部をもつが，12・20・21は「く」の字状口縁である。立ち上がり部には櫛描直線文を施すが，15は特異で上端と下端に沈線を1条ずつ施す。11は明瞭な口縁端面をもち，16～18はその名残りを止める。19は端部が内面へ肥厚する。12は口縁端をつまみあげ，21の口縁端は面をもって両側へ拡張し，この面に軽い沈線を施す。

22～24は壺形土器である。22は砂質の胎土をもち，焼成良好で堅緻，淡灰褐色を呈す。23・24はともに直口壺の口縁である。いずれも胎土は精良緻密で，23は丹を塗っている。

25～27・29～33は坩形土器である。25～27・33は半球形の体部で短い口縁部が外折するが，口縁部は内反りである。26の胎土は精良であるが，他は砂粒を多く含む。29～32は球形の体部に外反する短い口縁部がつく。29・30は細砂粒を多量に含む胎土，31・32は精良緻密な胎土である。

13・14・28は鉢形土器で，三者三様に異る。13は内彎する直口の鉢で先端はヨコナデで調整し，かすかに外反する。14・15は外折する短い口縁部をもつが，14の口縁は指頭による挟みつけで波状を呈する。14の外面は叩目である。3個体とも胎土には細砂粒を多く含むが，とくに13は砂質である。34は脚台で，かなり外反する。鉢形土器あるいは坩形土器につけられたものか。

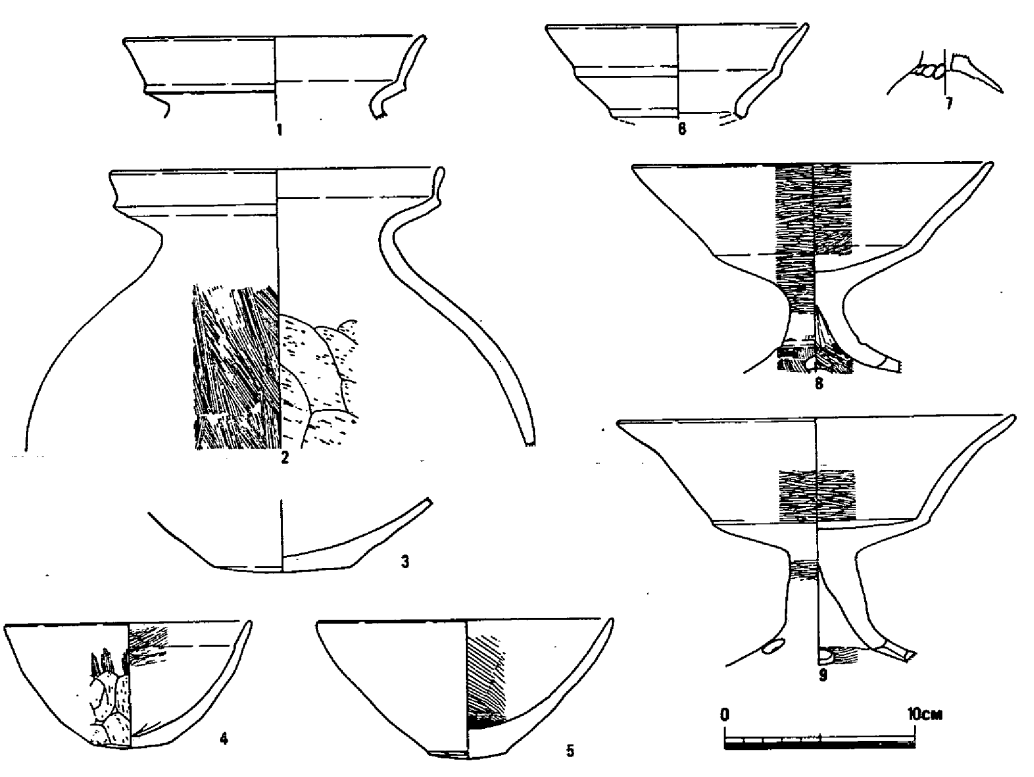
35～43は高杯形土器，あるいは器台形土器である。39の口縁部は杯底部から少し立ち上がったのち大きく外反するが，底部との境に突帯を有する。脚部の形状は変化に富む。40は中空の短い柱状

部をもち，裾部は内彎気味に大きく開く。43もこれに類似するか。41は器台脚部の可能性があり，丹塗りである。42の穿孔は５孔である。高杯形土器の胎土はいずれも精良緻密である。

住居址４（第50・51・52図，図版５・21）

調査区の南東隅，Ｎ９・W12あたりを中心に位置する。方形の竪穴住居址で，北壁３ｍ，西壁3.3ｍ分，全体の⅔強を検出した。中央に幅1.3ｍ，検出長２ｍの長方形の落ち込みを伴う。この落ち込みは周縁より15㎝程度低い。高床部をもつ住居址として捉えうるか。柱穴はそれらしいものを１基検出したが，床面からの深さは50㎝と浅い。直径45㎝で，柱痕跡は径20㎝を測る。他の柱穴は精査したが検出しえなかった。壁体溝は確認されなかった。今仮りに中央落ち込みの中軸線を住居址中心線と考えれば，住居址の推定規模は１辺４ｍ程度となり，かなり小型の住居址となる。土層観察では床面は１面のみである。貼床をもたない。壙内堆積土は４層が規則正しく上下に重なり，周縁から自然に流入したような状況を呈している。中央落ち込み部分には炭層が形成されている。中央落ち込み部分から完形に近い３点の土器が倒壊した状況で出土した。

遺物　第51図は床面出土の土器であるが，５・８・９はほぼ完形で床面に付着して出土し，２も残存部分については完存に近いものだった。

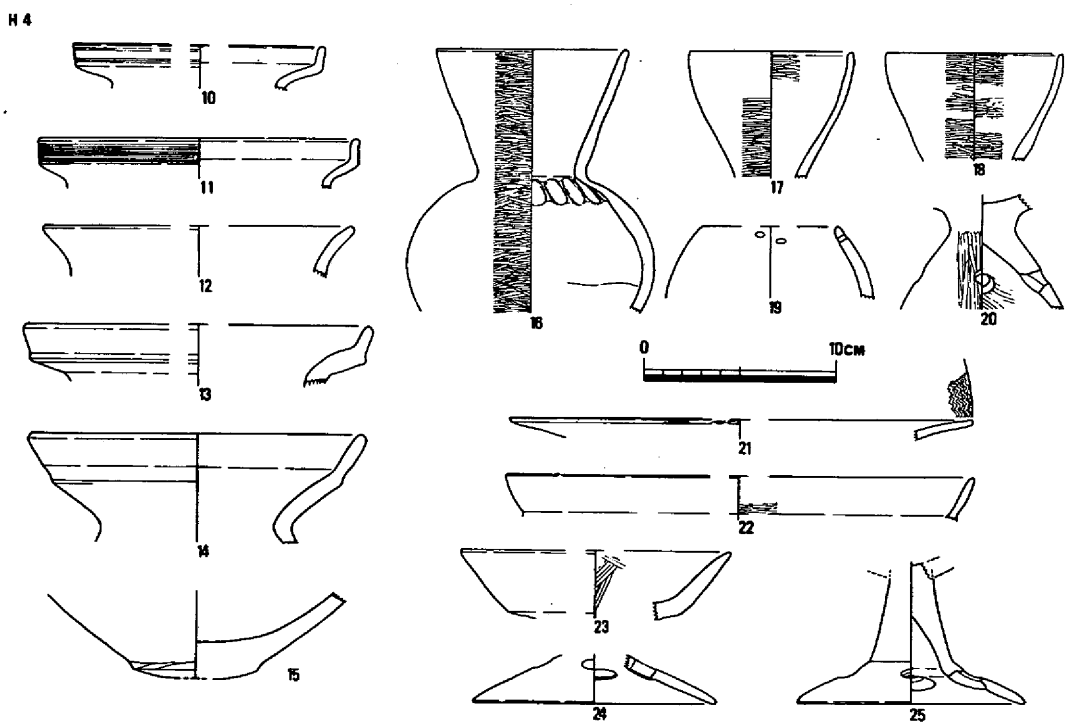


第51図　住居址４　床面出土土器（S＝1/4）

1～3は壷形土器である。1・2はともに二重口縁であるが，立ち上がり部の形状を異にし，異質な感じを与える。1の立ち上がり部はゆるやかに外反して長く伸び，屈折部分の外面は突帯状となる。これに対して2の立ち上がりは短くて直立に近く，端部は厚くなる。2の体部内面の篦削りは荒く，凹凸が目立つ。3は壷形土器の底部と考えられる。かなり丸味をもっているが，平底の意識を残している。1・2は胎土に細砂粒を多く含み，褐色を呈するが，3はきめの細かい胎土で赤褐色である。

4・5はともに直口の鉢形土器であるが，種々の面でお互い相違している。4の口縁部内面は平坦な面をもって篦磨きで丁寧に調整されているが，外面下半部は篦削りのままである。底面をつくっている。5は内面にはハケ調整がなされるが，外面はオサエやナデによっているだけで概して未調整である。底部は突出し，丸味をもった底面を有する。4・5とも細砂粒を多量に含む胎土である。

6・8・9は高杯形土器である。7についてはどのような器形になるのかいささか判然としない。6は二重口縁をもつ小型の高杯で，褐色を呈し，胎土は精良緻密である。8・9は類似した器形であるが，微妙な点で異なる。8の口縁部は一度外反したのち軽く内彎するが，9は単純に外反し，先端はさらに軽く外折する。8の柱状部は細く短いが，9のそれは太くてすこし長くなる。8は柱状部から裾部へ移行する部分に凹線状の段をもつが，9にはみられない。また，8は4孔であるのに対し9は3孔である。胎土も8は細砂粒を多量に含むのに対し，9は精良で緻密である。7



第52図　住居址4　埋土出土土器（S＝1/4）

は柱状部らしい部分に穿孔をもち，柱状部と裾部の境に指頭圧痕をめぐらせている。胎土は細砂粒を含む。

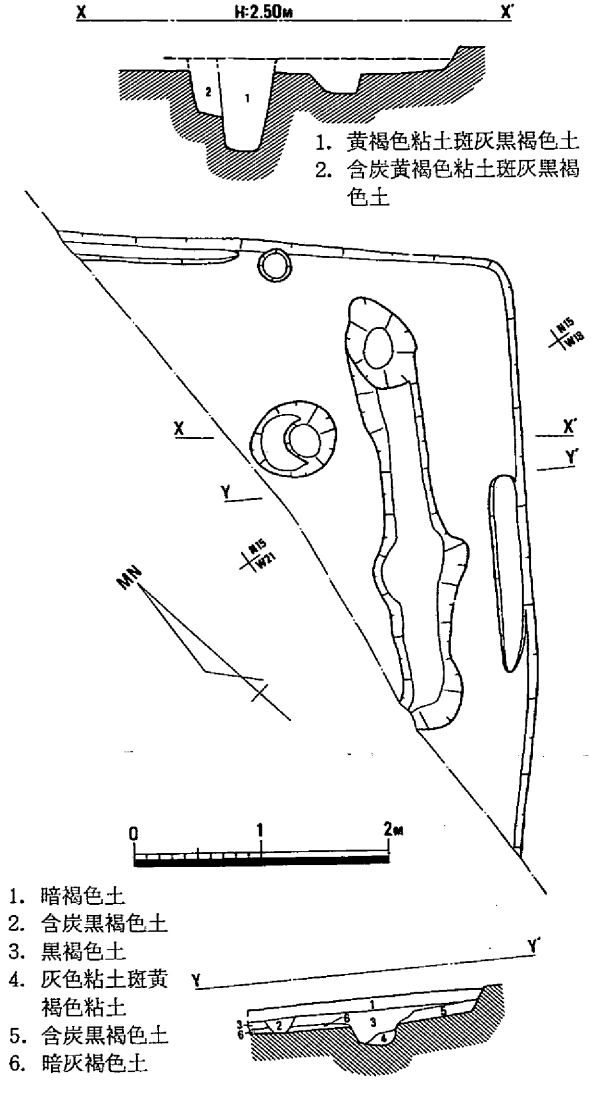
第52図は埋土出土の土器である。このうち16は住居址検出面上で，底部のみを欠いたほぼ完品で出土した。

10～12は甕形土器である。10・11は口縁部が屈折して立ち上がるもので，立ち上がり部外面には櫛描直線文を施す。口縁端部は丸くおさめる。12は単純に外反する口縁部である。いずれも胎土には細砂粒を多く含むが12はやや少ない。10・11は暗灰褐色，12は淡褐色を呈す。

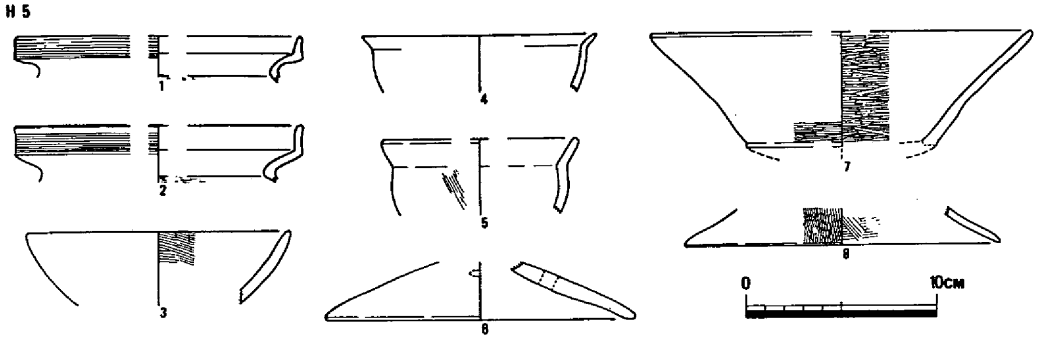
13～18は壺形土器である。13・14はともに二重口縁の変形とみられる。いずれも口縁の屈折部外面に小さな細工があり，屈折部を突帯風に少し強調しているようである。15は突出する底部で凸面の底面をもつ。13～15の胎土には砂粒が多く含まれる。16～18はいずれも直口壺であるが，16の口縁部がまっ直ぐ伸びるのに対し，17・18は内彎する。16の体部上端内面には．口縁部の接合のためとみられる指頭圧痕が顕著に認められる。胎土はどれも精良緻密で，褐色を呈している。

19は２孔１対の紐孔をもつ土器である。胎土から判断して図示しているが，古墳時代前期には稀な器形であり，弥生時代の産である可能性も考えられる。

20～25は高杯形土器である。21・22はやや大型であるが，いずれも小破片のため径は推定である。21は端面と端部内面に櫛描波状文を施す。22は二重口縁の高杯ではないかと考えている。いずれも胎土は砂粒を若干含むも精良緻密である。23は小型の高杯杯部であろう。細砂粒をかなり含んだ胎土である。脚部の形状には２種がある。柱状部と裾部が明確に分かれるもの（24・25）と，変化なく連続するもの（20）である。前者の胎土は精良緻密であるが，後者は細砂粒をかなり含む。25は長い柱状部から裾部が屈折する。



第53図　住居址５　遺構図（S＝1/60）



第54図　住居址５　出土土器（S＝1/4）

住居址５（第53・54図，図版６）

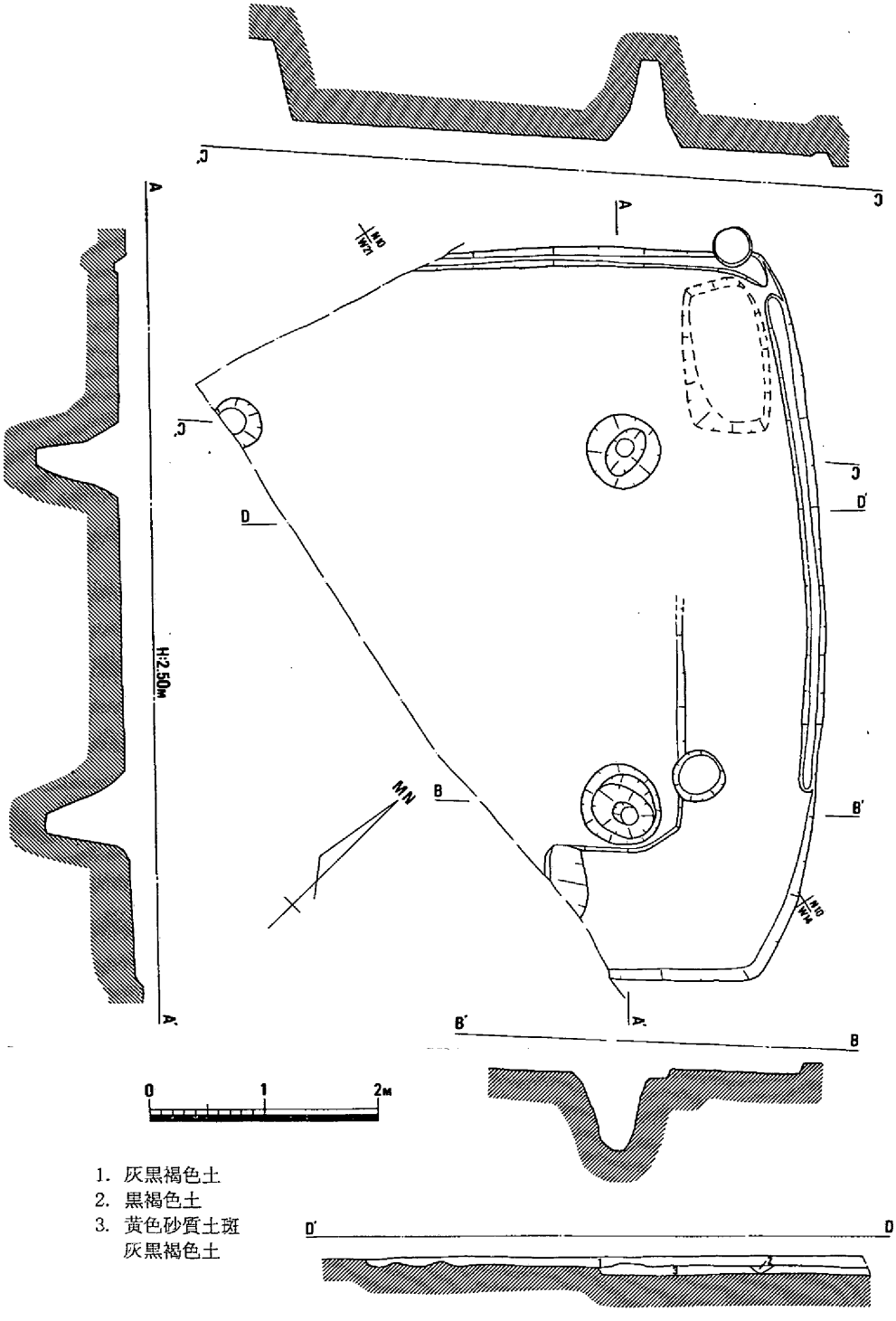
N15・W20あたりで検出された。方形の竪穴住居址で，検出部分はその一隅である。南東壁4.7m，北東壁3.5m分を確認した。両壁に壁体溝らしい痕跡がみられるが，全周しない。柱穴が１基検出され，その位置から判断すれば４本柱の住居址と考えられる。柱穴は直径70cmを測り，底部は二段になっている。深いところで75cmの深さがある。この住居址には住居址２と同様の溝状遺構が検出された。ただし，その在り方は住居址２とはかなり相違するようである。住居址２の溝は三辺にわたっていたが，住居址５では南東壁側だけにあるようで，それも途中で終わるか西へ曲がり，規模に大きな差がある。そしてなによりも，住居址２の溝は床面下に埋没しているのに対し，住居址５のそれは床面に露呈していたと考えられることである。このような溝状遺構がどのような機能を果していたかは，今後の類例資料の増加を待って考えたい。住居址内の土層断面観察から２面の床が考えられる。１面は堀り方底面をそのまま床にしているもので，貼床は存在しない。溝状遺構はこの面から堀り込まれている。第２次床面は第１次床面に20cm程度の盛土をして形成されている。この面を床面とするのは，ほぼ水平で，炭を含む土壙がこの面から堀り込まれていることによる。第２次床面は溝状遺構を埋めたてている。２面の床面をもつが，検出部分からでは，それが建て替えによるのか，拡張によるのか，あるいは単に床を貼りかえただけなのか明らかにできない。柱穴もどちらの床面に伴うかは明確にしえなかった。

遺物　住居址５出土の遺物は少なく，そのほとんどは埋土出土である。第54図に示しているが，このうち，**8**は柱穴出土，**5**・**6**は２次床面下埋土出土である。

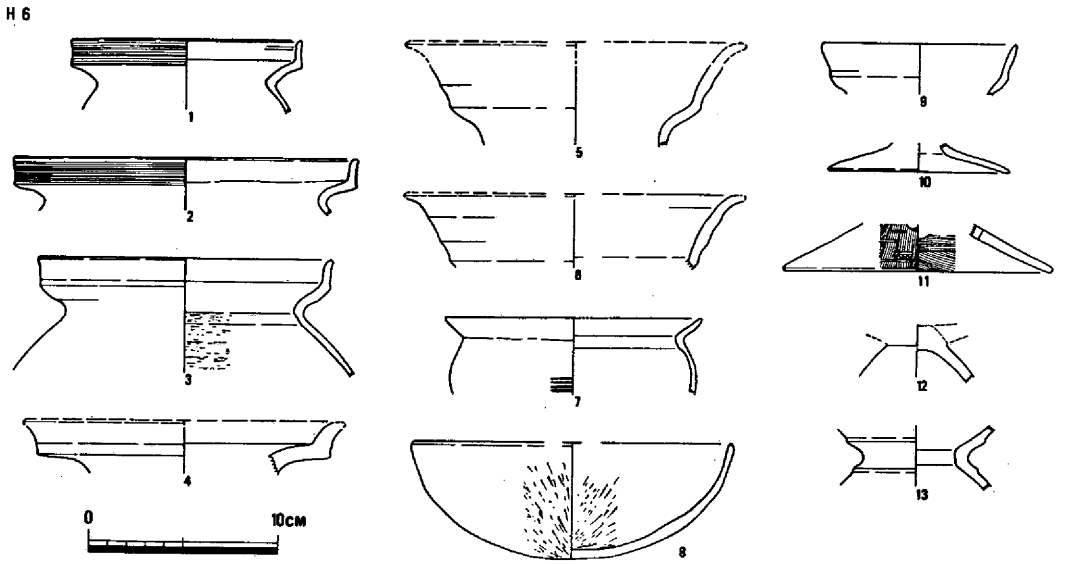
1・**2**の甕形土器はいずれも屈折して立ち上がる口縁部をもち，立ち上がり部外面には櫛描直線文を施す。端部は丸くおさめられ，端面はまったくみられない。どちらも小破片で口径は推定である。胎土には細砂粒を多量に含み，焼成は良好で堅緻である。

3・**4**は鉢形土器である。**3**は直口の口縁部，**4**は外反する短い口縁部をもつ。胎土はともに精良で砂粒をほとんど含まない。

5は坩形土器である。口縁部は「く」の字形に外反して，まっすぐに伸びる。口縁部はヨコナデ，体部内面はナデて調整している。胎土には砂粒・細砂粒を含んでいる。灰褐色を呈する。



第55図　住居址6　遺構図（S＝1/60）



第56図　住居址6　出土土器　（S＝1/4）

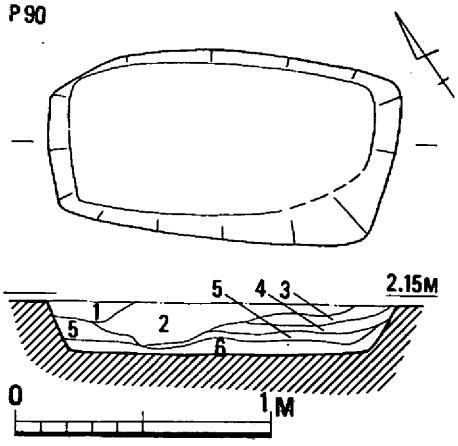
6～8は高杯形土器である。7の口縁部は大きく開き，先端には端面をもつ。内外面ともに横方向の篦磨きで調整している。6の脚部はかすかに内彎するが，8の脚部は逆に外反する。8は薄手のつくりで，胎土には細砂粒を多く含み，焼成良好で堅緻である。淡灰茶色を呈する。6・7は精選された緻密な胎土である。焼成は良好であるが，8に比して軟質である。8は淡灰赤色，7は外面灰黒褐色，内面淡灰褐色を呈する。

住居址6（第55・56図，図版6）

調査区の南西隅，N9・W18を中心に位置する方形の竪穴住居址である。全体の½強を検出した。北東壁は全長が判明していて，一辺6m程度の規模と考えられる。壁体溝が検出されているが，東隅付近では認められなかった。東隅付近から北へかけて幅1m前後の高床部を確認したが，北隅から北西壁側では検出されず，消失したのか，もともと付設されなかったのか判然としない。高床部床面は中央床面より8cm程高い。柱穴が3基みつかり，4本柱の住居址である。北柱穴と東柱穴の柱間は3.2m，北柱穴と西柱穴の柱間は3.4mを測る。東柱穴は床面で径72cm，深さ68cm，北柱穴は径64cm，深さ70cmで，西柱穴は床面より一段下げた面で検出したため径45cm，深さは床面から70cmある。柱は柱穴底部の径から直径15cm程と推定される。この住居址の掘り方は一様の深さではなく，壁側が残存で5cmであるのに対し，中央は15cmと一段深い。中央部分はこの深さでかなり広い面積にわたって平坦に削平されていて，その上に地山砕粒を多く含んだ貼床（3の層）が設置されている。

遺物　住居址6は残存状況が悪く出土した遺物の点数は少なく，明確に床面出土と確認できるものはなかった。ただ第56図に図示したうち13は柱穴出土，3・6・11は貼床層出土である。

1～3は甕形土器である。いずれも屈折して立ち上がる口縁部をもつが，立ち上がり部外面に櫛



1. 灰褐色土　　4. 暗褐色土
2. 暗灰褐色土　　5. 灰茶褐色土
3. 灰褐色土　　6. 暗灰褐色土

第57図　土壙90　遺構図　（S＝1/30）

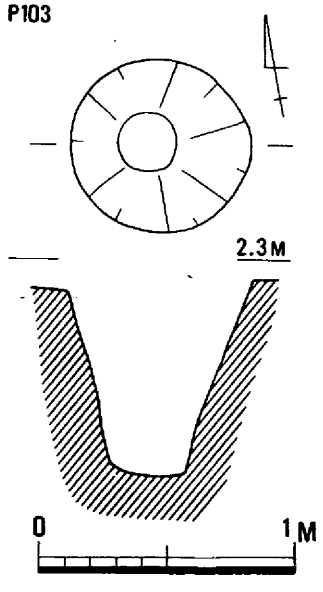
描直線文を施すものと無文のもの（3）の2種がある。前者は明瞭な口縁端面をもつが，後者は外反気味に丸くおさめる。胎土はともに砂質で細砂粒を多量に含む。

4～6は壷形土器である。すべて二重口縁であるが，4の立ち上がり部はきわめて短い。5・6はよく類似している。立ち上がり部はゆるやかに外反して長く伸びる。器表面は波打っている。いずれも細砂粒を多く含む胎土で，焼成は良好，4は褐色，5・6は淡灰褐色を呈する。

7・9は坩形土器と考えている。7はやや大型であるが，球形の体部をもつとみられる。口縁部はかすかに内彎する。体部外面には叩目らしい痕跡を残す。褐色を呈し，緻密な胎土である。7は口縁部が途中でわずかに屈折し，二重口縁を意識している。胎土は細砂粒を含み，淡灰褐色である。

8は内彎する口縁部をもった直口の鉢形土器である。口縁端は丸くおさめる。口縁部はヨコナデによって調整されるが，それ以外は内外面とも篦削りである。胎土には細砂粒が多量に含まれる。10は脚台である。小型であり，坩あるいは鉢につくか。高杯の可能性もある。

11～13は高杯形土器あるいは器台形土器である。どの胎土も精良緻密で，11・13は赤褐色，12は褐色を呈す。



第58図　土壙103　遺構図
（S＝1/30）

土壙90（第57図）

N12・W18に位置する。住居址6の床面上にある。図示しえなかったが，古墳時代前期と考えられる土器片が埋土下層に包含されていて，この時期の遺構と考えられる。

土壙は最大幅0.75m，長さ1.35mのやや不整な長方形の平面形をもつ。底面は平坦で幅0.6m，長さ1.2mを測る。深さは0.2mである。壙内の土層堆積状況を観察すると西から東へ土が流入したように捉えられる。1・3・5・6の層には地山の黄褐色粘土の砕粒が含まれ，弥生時代の土壙24や42のような縞文様を呈する。検出当初その形状から弥生時代の土壙墓ではないかと考えていたが，上記のようなことから否定され，住居址下であることから土壙墓とも考えられない。床面で検出されたことからすれば，住居址3の南壁方形土壙の存在もあることでもあり，住居址6に付属した施設である可能性も考慮される。

土 壙 103 （第58図）

N12.5・W11.5に位置する直径0.7mの円形土壙である。深さは0.8mを測る。截頭円錐形の整った形状である。壙内埋土は灰黒褐色土で，木炭片・焼土粒を含み，また地山の小塊を多量に含んでいる。この土壙の機能であるが，深さと形状からすれば柱穴ないしは井戸が考えられるが，柱痕がみられず，周辺に同様の土壙が存在しないこと，さらに埋土に木炭片や焼土を含むことを考慮すれば，柱穴の可能性はほとんどなく，むしろ後者の可能性が高いのではないかと思われる。しかし，他遺跡の類例からすれば，いささか規模の小さいのが疑問である。（岡本）

第4章 ま と め

第1節 住居址について

今回の調査で検出された住居址は7基である。時代別では，弥生時代中期中葉1基，古墳時代前期6基で，いずれも竪穴住居址である。

弥生時代の住居址は県内では従来あまり検出例のない時期のものであり，貴重な資料といえよう。数例知られている前期と，検出例が激増する中期後葉の間を埋める資料として，住居址構造の変遷を考えるうえで有用である。今後さらに資料の増加を待ち詳細な検討がなされるであろう。今回検出したのは約¼程度であるが，構造面から指摘しうる特徴として，平面形は円形で規模は直径9m前後，柱は6～12本程度，中央に土壙を備え，貼床をもつというようなことがあげられる。南方遺跡における弥生時代住居址の明瞭な形での検出は今回が最初であり，これから集落構造を考察する際に，1つの中核地点を提示するものとして重要である。

古墳時代の6基の住居址はその位置関係からみて同時に使用されていたとは考えられず，何度かの建て替えによる変遷が想定される。それはまた住居址の構造上の諸要素から考えられることでもある。この6基の住居址は構造面から組分けが可能である。1つは高床部の有無である。**H3・H4・H6**には高床部を認めるが，他にはみられない。2つめは溝状遺構の有無で，**H2・H5**のみに認められた。3つめは貼床の有無で，**H1・H2・H3・H6**には存在する。4つめは方向で，**H2・H3・H4**が同一方向。**H1・H5・H6**が別の同一方向をとる。この4つの要素のうち，とくに時期に深い関りをもつのが高床部の存在である。高床部をもたない住居址も弥生時代後期以来多く存在しているが，なべて高床部が消滅するのは，岡山市雄町遺跡では雄町13類から14類にかけての時期（註1），同市百間川原尾島遺跡では百間川古墳時代Ⅰ期にあたる（註2）と考えられる。今回の調査では**H3**の建て替えにその変化がみられる。建て替え前の住居は高床部をもつのに対し，建て替え後には高床部はなくなっている。検出された住居址の時期がちょうど高床部の消滅期にあたっているとみられる。このことから高床部の有無を時期差と捉えてよいのではないかと考える。2つめの溝状遺構はきわめて奇異であるが，位置や出土土器から判断して住居址に伴うもの

とみざるをえない。しかしその機能はまったく不明であり，今後の類似資料の増加を待たねばならない。これが時期的にどうなるのかは当然わからないが，事実としてＨ２とＨ５には存在する。このように構造面からみれば，高床部と方向を大きな根拠として６基の住居址を２期に分けられるようである。しかしここで，さらに土器による判断を試みたい。時期判定に良好な資料をもつ住居址はＨ３とＨ４にすぎない。Ｈ４床面出土土器は各住居址出土土器の中ではもっとも古相を示す。下田所式（註３）併行と考えられ，頸部に酒津式（註４）の特徴を残した壷形土器（２）や脚柱状部の伸びきらない高杯（８）を認める。これに対し，Ｈ３床面出土土器は完全に丸底となって亀川上層式（註３）の範疇に入り，南壁方形土壙出土の甕形土器（２・11）が下田所式の特徴をわずかに残すにすぎない。このことから，Ｈ４とＨ３の間にはわずかに時期差が存在するようである。Ｈ１出土土器は亀川上層式であるが，Ｈ３よりさらに後出する可能性がある。以上のようなことから総合すれば，６基の住居址は３期に分けられる。１期はＨ４，２期はＨ３・Ｈ６，３期はＨ１・Ｈ２・Ｈ５であり，それらは下田所式から亀川上層式に至る期間内の所産と考えられる。（岡本）

第２節　土壙について

今回の発掘調査で検出された土壙の数は200基を越え，調査区全域に分布している。その形状や内容は種々変化に富み，また年代も弥生時代前期後葉から中期後葉，そして古墳時代前期と広い幅をもっている。本報告書では様々の制約からそのすべてを紹介することができなかったが，ここではこれら土壙全体を概観し，それらが遺跡の中で果たしてきた役割を少し考察してみたい。

今回の調査で検出した土壙の一覧表を作成した（第１・２・３表）ので，それに基きながら進めたい。表の各項目について説明しておきたい。土壙番号は，遺物を包含していた土壙に対し，検出順に任意に付したものである。なお，遺物を包含していなかった土壙については，ここでは考察の対象外としていることを断っておく。土壙の在り方はきわめて変化に富むが，それらの機能を追究するにあたっては分類という作業が不可欠となる。分類にあたって異形・異端の存在は常である。不必要な細分はそれらを多数生み出すことになる。したがって，分類は誰が行っても同様な結果がでるような基準設定をまずすべきである。土壙のもつ種々の要素のうち客観的に分類しうるものは形態と埋土と包含物の３点であろう。

形態についてみると，検出した土壙は平面形では円形と方形，底部形状では平底と丸底のそれぞれ２種に大別しうる。円形には楕円形を含み，方形には長方形を含む。平底とは平坦な底面をもつもの，丸底は明瞭な底面をもたず，断面が椀状をなすものであり，これにはＰ116（第13図）のような階段状の底部も含めている。平面形と底部形状を組み合わせると４つの型が設定しうる。Ａ型は円形・丸底，Ｂ型は円形・平底，Ｃ型は方形・丸底，Ｄ型は方形・平底を指す。なお，平面形については変化が大きいため，別に形状を記しているが，これはきわめて主観的な基準によっている。土壙の底を平坦に整えることと，方形の平面形をとることはいずれも明確な意図なくしてはありえないことで，特定の機能を有したものと考えられる。したがって，Ｄ型の土壙についてはきわ

第1表 土壙一覧表(1)

No.	位置(m)		形態		規模(cm)			埋土		土器年代	包含物				機能	切合関係	掲載図
	N	W	型	平面形	長	幅	深	型	種		炭	灰	焼土	遺物			
1	25.2	16.2	A	楕円	222	(80)	57	B		Ⅰ・Ⅱ	○	○	○	大型土器片			第18図
3	23.2	18.3	A	不整楕円	123	75	44	B		Ⅰ・Ⅲ	○		○	石斧・大型土器片			第22図
4	10.9	13.6	A	円	91	85	26	A	1	Ⅲ							
5	13.3	11.9	A	円	67	65	30	A	1	Ⅲ							第32図
6	16.2	11.7	A	不整円	85	78	26	A	1	Ⅲ							
7	17.3	11.6	A	不整楕円	137	124	47	A	1	Ⅲ							
8	17.4	10.6	A	円	37	35	12	A	3								
9	15.8	10.5	A	不整円	49	45	25	A	3	Ⅲ					柱穴		
10	19	9.8	A	長楕円	99	61	36	A	1・2′	Ⅱ・Ⅲ	○			大型土器片			第32図
11	19.5	10.5	A	楕円	84	69	22	A	1	Ⅲ	○						
12	22	9.8	A	長楕円	108	69	37	A	2	Ⅰ・Ⅱ	○						
13	21	11.2	A	不整円	70	61	20	A	2	Ⅰ・Ⅱ	○						
14	21.6	11.6	A	円	70	66	36	A	2	Ⅲ	○						
15	22.5	11.3	A	不整楕円	(58)	57	17	A	3	Ⅲ							
16	16.6	14.1	A	不整円	86	85	41	A	1	Ⅲ				石鏃		<P86	
17	16.2	16	A	楕円	108	87	37	A	1	Ⅲ・Ⅳ				大型土器片			
18	14.1	15.7	A	円	61	55	22	A	1								
19	13.3	16.1	B	円	43	40	24	A	1	Ⅲ							
20	14.9	13.3	B	楕円	41	36	22	A	1	Ⅲ							
21	13.7	13.4	A	円	43	38	16	A	1	Ⅲ							
22	12.7	17.4	A	不整楕円	(138)	(93)	21	A	1	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ							
23	13.6	15.2	A	楕円	86	70	20	A	1	Ⅱ・Ⅲ							第32図
24	21	10.5	D	隅丸長方	177	135	53	B	2	Ⅰ・Ⅱ	○			大型土器片		<P12	第11図
25A	23.6	20.1	A	円	58	(42)	24	A	1	Ⅲ				半完形土器	墓壙	<P25B	第28図
25B	23.6	19.6	B	不整円	77	66	48	A	1	Ⅲ				大型土器片			第28図
26	23.3	19	A	不整楕円	92	61	22	A	1	Ⅲ				大型土器片 分銅型土製品		<P25B	第24図
27A	31.7	13.3	A						3	Ⅲ				半完形土器	墓壙		第26図
27B	31.6	13.3	B	楕円	72	45	43	A	3	Ⅰ・Ⅲ				大型土器片		<P27A	第26図
28	12.3	10.6	A	楕円	47	40	17	A	1								
29	19.8	18	D	方	23	21	15	A	4	Ⅲ					柱穴		
30	19.1	17.9	B	円	35	34	14	A	1								
31	13.7	11.3	B	円	54	50	43	A	2′	Ⅰ・Ⅲ	○			大型土器片			
32	17.9	19.5	B	楕円	49	40	26	A	4・6	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ							
33	13.8	14.8	A	円	33	33	12	A	1	Ⅰ・Ⅱ						<P23	
34	14	15.3	A	楕円	64	53	29	A	1	Ⅰ						<P23	
35	12.7	15.2	A	不整円	89	83	24	A	1	Ⅱ						<P28	
36	17.3	12.6	A	不整楕円	(150)	(60)	16	A	1	Ⅱ・Ⅲ						<P7	
37	17.8	12.8	B	円	38	33	18	A	1	Ⅱ							
38	18	12.1	A	(長楕円)	(66)	(54)	(26)	A	2′	Ⅱ						<P7	
39	19.6	11.6	C	(隅丸方)	(191)	(80)		A	1	Ⅲ							
40	13.7	12.4	D	長方	166	98	21	A	3	Ⅱ						<P5	
41	13	11.5	B	楕円	52	46	24	A	1′	Ⅱ				石鏃		<P5	
42	16.7	17.2	A	不整楕円	212	186	57	B		Ⅱ・Ⅲ	○			大型土器片		<P17	第19図
43	14.7	15.1	A	不整楕円	117	79	49	A	1・5′	Ⅰ・Ⅱ							
44	15.8	15	B	楕円	90	76	34	A	1	Ⅲ				大型土器片			
45A	15.1	14.5	B	円	23	21	4	A	1′								
45B	14.1	14.8	B	円	26	26		A	1								
46	13.2	14.6	A	長楕円	80	50		A	1							<P23	
47	13.5	14.1	B	円	19	19		A	1								
48	11.4	15.3	D	不整長方	250	107	35	B		Ⅰ・Ⅱ				大型土器片		<P119	第17図
49	14.8	13.7	A	楕円	89	74	47	A	1・5	Ⅱ・Ⅲ	○					<P20	
50	14.9	17.5	A	楕円	105	79	27	A	5		○						
51	14.1	17.7	A	不整楕円	90	77	28	A	5	Ⅱ・Ⅲ	○			大型土器片			
52	14	17.1	A	不整楕円	145	109	31	A	2	Ⅱ・Ⅲ	○	○	○			<P50	
53	15	10.5	A	不整楕円	76	57		A	2	Ⅲ				石斧			
54	15.3	20.3	A	(不整楕円)	(35)	67	43	C		Ⅳ					柱穴	<P44	第30図
55	15.7	17.7	A	不整楕円	93	62	28	A	1・6	Ⅲ							第31図
56	13.8	18.3	D	不整方	66	66	27	C	1′	Ⅲ					柱穴	<P51	

第2表 土壙一覧表(2)

No	位置(m)		形態		規模(cm)			埋土		土器年代	包含物				機能	切合関係	掲載図
	N	W	型	平面図	長	幅	深	型	種		炭	灰	焼土	遺物			
57	13.1	18.9	A	円	47	44	20	A	5′								
58	14.7	18.9	A	円	25	23		A	4	Ⅵ							
59	15.6	13.3	A	不整楕円	95	85	39	B			○					<P63	
60	15	18.2	B	楕円	53	(43)	53	C	1′·6						柱穴	<P50	
61	15.3	17.1	B	不整楕円	88	65	32	C		Ⅱ·Ⅲ					柱穴	<P50	第29図
62	15.4	13.7	B	円	13	11		A	1	Ⅲ							
63	15.3	13.2	B	円	27	27	25	A	1								
64	12.4	16.2	B	円	15	13	37	A	5								
65	12.9	15.7	B	円	17	16		A	5								
66	13.3	17.5	B	円	19	17	23	A	5								
67	14.8	16.6	B	円	33	28		A	1								
68	15	16.7	B	円	13	10			5								
69	15.3	16.2	B	円	8	8		A	5								
70	32.4	16.1	B	不整楕円	125	93	33	A	5	Ⅱ·Ⅲ	○		○				
71	31.8	16.6	B	(不整楕円)	(106)	(30)	(50)	A	5	Ⅲ						<P70	
72	32.6	15.4	B	長楕円	95	57	26	A								<P70	
73	32.1	14.3	A	不整楕円	80	74	117	B	5′	Ⅲ				大型土器片		<P74	第27図
74	31.6	14	A	楕円	84	58	23	A	5′	Ⅲ				完形土器	墓壙		第27図
75	15.5	12.4	A	楕円	60	48	43	A	2′	Ⅲ							
76	28.7	15.3	A	楕円	138	107	57	B		Ⅲ							
77	29.2	15.2	A	(楕円)	(201)	(97)	47	A								<P76	
78	15.5	20.1	B	楕円	68	60	65	A							柱穴		
79	22.2	11.6	B	長楕円	(65)	(31)		A	1	Ⅲ						<P15	
80	18.6	19	A	不整楕円	116	99	52	A	1′	Ⅲ	○			大型土器片		<P32	
81	26	10.1	B	円	41	40	29	C	6						柱穴		
82	19.5	15	A	不整楕円	113	97		A	5′	Ⅲ	○		○				
83	19	12.5	A	楕円	68	59	15	A	4								
84	19.9	18.3	A		(36)	(45)	17	A	5′	Ⅰ	○					<P85	
85	20.1	18.3	B	円	55	50		A	5′	Ⅲ						<P125	
86	16.8	13.7	B	円	25	22		A	1								
87	19.8	11.1	B	楕円	33	26		A	1								
88	10	20	A	円	65	65	31	A	5	Ⅲ	○						
89	9.8	19.2	A	円	79	76	31	B		Ⅲ	○						
90	12.1	18.3	D	不整長方	137	75	20	B		Ⅲ·古							第57図
91	11.4	17.1	B	楕円	62	(52)	34	A		Ⅲ						<P92	
92	10.8	17.2	B	不整楕円	106	76	24	A	5	Ⅲ	○			大型土器片			第25図
93	10.1	13.9	A	円	(45)	50		A		Ⅲ	○						
94	9.6	16.1	A	長楕円	137	83	19	A		Ⅲ	○						
95	16.9	14.9	A	不整楕円	(90)	77		A	1	Ⅲ						<P96	
96	17.1	20.4	A	長楕円	90	58	20	A	1	Ⅲ							
97	20.9	12.1	B	楕円	48	35	19	A	1	Ⅰ·Ⅱ				大型土器片			
98	18.5	16.5	A	円	39	37	24	A	5								
99	18.3	18.5	A	楕円	(77)	115	10	A	1	Ⅰ·Ⅱ	○					<P121	
101	22.8	9.7	A	不整円	145	111		A	3	Ⅰ							
102	21.3	9.7	B	楕円	47	35	19	A	5	Ⅰ·Ⅱ							
103	12.7	10.6	B	円	69	69	77	A	5	古	○		○		井戸		第58図
104	13.1	10.2	D	隅丸長方	57	38		A	5								
105	8	13.2	A	(長楕円)	(100)	(125)	(57)	B		Ⅰ·Ⅱ·Ⅲ	○		○	大型土器片 分銅形土製品			第23図
106	18.4	14.1	B	円	27	24		A	3′								
107	17.3	15.9	B	円	29	28		A	5								
108	17.6	12.8	D	(長方)	(29)	26	23	A	5′							<P37	
109	17.7	17	A	楕円	42	30		A	5	Ⅳ							
110	20.3	12.2	B	不整楕円	96	74	37	B	5′	Ⅱ	○						
111	17.7	14.9	A	(不整楕円)	(57)	60		A		Ⅲ							
112	18.2	15.3	A	(不整楕円)	(131)	(30)		A		Ⅲ							
113	16	14.3	A	楕円	(42)	43		A	1	Ⅰ						<P16	
114	14.8	11.4	A	不整楕円	89	68	25	A	5	Ⅰ·Ⅱ						<P115	
115	14.1	10.8	C	方	98	85	30	A	2	Ⅲ				大型土器片		<P31	
116	11.6	9.1	A	長楕円	(260)	109	63	B		Ⅰ	○		○	石鏃 大型土器片			第13図
119	11.5	16.4	B	円	59	51	41	B		Ⅲ							

第3表 土壙一覧表(3)

No.	位置(m)		形態		規模(cm)			埋土		土器年代	包含物				機能	切合関係	掲載図
	N	W	型	平面形	長	幅	深	型	種		炭	灰	焼土	遺物			
120	16.9	19.7	B	円	53	45	26	A	5′	II・III				石庖丁		<P136	
121	18.8	18.9	D	隅丸長方	112	76	40	A		IV						<P80	
122	17.8	17.6	A	長楕円	48	26		A	3	III							
123	19.7	17.8	A	不整楕円	75	65	47	A		III							
124	24.5	20.5	A	不整円	70	(58)	16	A	2	III				大型土器片			
125	20.8	18.4	A	長楕円	105	53	25			III				石斧			
126	21.8	18.5	A	不整長楕円	121	77	51	A	5′	III				大型土器片		<P127	第21図
127	22	17.9	C	不整長方	150	63	31	A		I・III				大型土器片			
128	25	15	A	長楕円	199	(60)	(39)	B		I・II	○	○	○	石庖丁 大型土器片		<P1	第15図
129	26.8	15	A	(長楕円)	(68)	(37)	(40)	A	5′	I・III・古							
130	15.5	11.6	D	隅丸方	125	70	13	A	3	I・III						<P114	
131	15.5	12.2	A	円	54	50	30	A	5							<P75	
132	14.1	10.3	A	円	35	33	30	A	5								
133	20.8	14.7	B	楕円	49	42		A	5′						柱穴		
134	19.2	19.5	B	楕円	41	36	22	A	1′	III			○				
135	24.2	19.9	B	円	52	52	58	B		III・VI						<P147	
136	16.8	19.4	B	円	30	25	43	A	4								
138	10.7	16.9	B	楕円	26	21		A								<P92	
139	12.1	11.9	D	長方	104	64	25	A								<P166	
140	11.8	11	D	不整長方	(79)	(51)	(9)	A								<P166	
141	15.9	20.5	A	不整楕円	(63)	58	28	A	4・5′	II・III				石斧			
143	18.3	16.7	A	長楕円	67	45	26	A	5′	IV							
144	19.2	14.3	B	円	12	12		A	5′						柱穴		
145	20.1	9	C	(不整方)	(66)	(21)		A			○						
146	12.8	14.5	A	不整楕円	(52)	33		A	5′	II						<P35	
147	24	20.4	A	楕円	(37)	70	34	A	5′	III				石庖丁		<P25A	
148	23.2	20.8	A	不整楕円	(64)	(70)	(13)	A	5′	III						<P147	
149	24	17	B	円	41	39	35	A	3								
150	24.3	18.7	A	円	51	47	27	A	5′								
151	12.6	19.1	B	円	35	34		A	4′								
152	12.1	19.3	B	楕円	49	41	32	A	5′						柱穴		
153	11.6	19.5	B	円	49	41	53	A	5′	II・III					柱穴		
154	8	12	A	(不整楕円)	(120)	(225)	(31)	B		I・III	○		○	石斧		<P105	
155	8.9	20.7	A	(不整楕円)	(120)	(60)	(45)	A	4	II	○				炉		
156	11.8	20.3	C	不整長方	163	87	30	B		III	○						
157	11	19.3	B	円	(45)	50	89	A							柱穴		
158	12.6	19	B	円	31	29	17	A		I							
159	11.2	18	B	円	39	36	29	A							柱穴		
160	10.3	17.2	B	円	26	25	13	A								<P92	
161	14.2	9			(32)	(55)	(25)	A									
162	12.6	9.8	D	方	100	95	26	A								<P165	
163	13.5	9		(楕円)	(51)	(50)	(19)	A		II						<P165	
164	9.8	18	B	円	37	37	73	A		II					柱穴		
165	12.8	9	B	不整楕円	128	94	63	A	5	III				石鏃・人骨	墓壙		第33図
166	11.7	11.9	B	(長楕円)	(75)	(115)		A						人骨	墓壙		第34図

註) ○No.：ゴチック体は古墳時代の遺構と明確に認められるもの。

○形態：型Aは円(楕円)形丸底，Bは円(楕円)形平底，Cは方(長方)形丸底，Dは方(長方)形平底。

○埋土：型Aは堆積層2層以下，Bは堆積層3層以上，Cは柱痕を認めるもの。

種1は灰黒褐色土，2は灰黒色土，3は暗灰茶褐色土，4は黒紫色土，5は暗灰褐色土，6は黄褐色土，ダッシュは黄色土斑。

○土器年代：Iは弥生前期後葉，IIは中期前葉，IIIは中期中葉，IVは中期後葉，古は古墳前期。

○包含物：炭は多量に包含するものに○印，灰・焼土は包含するものに○印，遺物のうち土器は大型破片出土のみ明示。

○切合関係：<P1はP1に切られていることを示す。

○形態・規模の（ ）は推定あるいは残存値を示す。

めて限定された機能しかもたなかったとみられる。これとは逆に，円形の平面形や椀状の底部はかなり恣意的な面があり，形態だけでその機能を判断することはかなり困難である。

埋土の状況も機能を考える上で重要な要素である。埋土が類似する２つの土壙については，機能の同一か，あるいは埋没時期の同一かが考えられる。一時に埋められた土壙の壙内堆積土は原則的には１層かあるいは２層となろう。２層になる場合とは，土壙上面を覆う堆積層が，壙内堆積土の圧迫による収縮に伴って，壙内へ落ち込んだ場合である。これに対し壙内堆積土が３層以上のものは数次にわたる埋め立てが考えられる。とくにＰ１（第18図）やＰ24（第11図）のような繰り返しのみられる規則的な堆積状況は，それらの土壙が一定期間開口していて徐々に埋まったのではないかと考えさせる。そこで埋土については３つの型を設定した。Ａ型は１層あるいは２層の堆積を示すもの。Ｂ型は３層以上の堆積，Ｃ型は柱痕を認めるものである。埋土については型の他に土の種類を記しているが，調査員の個々の判断によったため，かなり主観的なものとなっている。

３つめの要素である包含物が重要であることは言うまでもない。多量の炭化物を包含しているもの，まして底に炭層を形成するものは，何らかの炭化しうるような有機物を埋めたことが考えられる。遺物のうち土器片については，それが大型破片であるかどうかが重要である。壙内から出土する大型土器片は土壙掘削時の混入とは考えられず，日常使用していたものが破損して壙内へ投棄されたと考えるべきであろう。掘削後短期間で埋められた土壙には，人間が投棄したのでない限り大型土器片は混入しない。柱穴の場合，柱根の抜き取りがない場合には，多量の炭とか大型の土器片を包含することはまずないのが普通であろう（註５）。このようなことから，遺物のうち土器については大型破片を出土したもののみ記入している。

他の表の項目のうち，土器年代は出土した土器の年代観である。これは土壙の年代の上限を示すが，土壙の切合関係が複雑であったことから，逆に掘った可能性もまったく否定できず，あくまでも土壙の年代を考える参考に止めておきたい。機能は，人骨の出土・柱痕の検出等によって明瞭に機能がわかるもののみについて記し，これから後で述べる推定機能は除いている。

遺跡内から検出される土壙はいずれも生活上必要なある機能をもたされて設置されたものであり，その形態は機能によって制約をうけていると考えられる。前述のような分類が意味をもつのはこのためである。これらの土壙をその機能にしたがって分類すれば，墓壙・貯蔵穴・柱穴・炉穴・井戸・ゴミ穴等になるわけであるが，今回の調査で検出した土壙のうちで機能が明確にわかったものは20基程度にすぎず，他の土壙についてはその内容から機能を推定しなければならない。以下，前述の形態・埋土の分類と包含物を組み合わせ，それぞれの土壙の機能について考えてみたい。

形態Ａ型の土壙はその規模によって３つのサイズに分けられる。大型は長径 120㎝ 以上のもの，中型が長径 60㎝以上 120㎝未満，小型は60㎝未満のものである。形態Ａ型の土壙のうち柱穴と明確にわかるものは84例中わずか２例であり，形態Ａ型の土壙は原則的には柱穴ではないようである。形態Ａ型で埋土Ｂ型の土壙は大型が圧倒的に多く，11例中８例ある。この８基の土壙のうち大型土器片・石斧・石庖丁・分銅形土製品のうちすくなくとも１種を出土したものは７例あり，またそれ

らは多量の炭や焼土も含んでいる。残りの3例は中型の規模であるが，やはり大型土器片あるいは多量の炭を包含している。形態A型・埋土B型の土壙は最終的にはゴミ穴として使用されたと考えられる。ただ形態をより詳しく観察すると平面形が楕円形のものと長楕円形のものに分かれ，長楕円形のものは一定の型をもっているようであり，当初，別の機能を有していた可能性がある。この長楕円形のものは他遺跡にも類例があり（註6），時代が限定されるようにみられることから注意される土壙である。なお，この種のゴミ穴は埋土の状況から一定期間開口して機能しつつ徐々に埋まったものと考えられる。形態A型・埋土A型の土壙は規模によって機能を異にするようである。中型のものは土器棺を除き41例あるが，そのうち大型土器片を出土したもの6例，石斧・石庖丁を出土したもの3例，分銅形土製品を出土したもの1例，多量の炭または焼土を包含したものが12例ある。そして，これらの包含物のうちのどれかを出土したものは18例にのぼり，多量の炭と大型土器片を出土したものは3例ある。このようなことから，形態A型・埋土A型で中型の土壙はゴミ穴としての機能をもっていた可能性が高いと考える。これに対し，この種の大型の土壙は10例中9例までが大型土器片を含まず，また多量の炭を含むものも4例にすぎず，中型とは機能を異にすると考えられる。それは，形態A型の大型で埋土B型の土壙とその包含物を比較すればより明らかになる。出土土器年代からすれば形態A型の大型で埋土A型とB型では若干後者が古いようであるが，併行期もあるようであり，やはり機能の相違と考えるべきであろう。その機能が何であったかは現時点では明確でない。

形態B型の土壙も規模で大・中・小の3サイズに分けられる。大型は長径110㎝以上，中型は80㎝以上110㎝未満，小型は80㎝未満である。大型には土壙墓があるが，多量の炭や焼土を含むものもあり，大型のすべてが土壙墓とはいえない。中・小型で埋土A型のものは大型土器片を含むものと含まないものに2分できる。柱穴であることが明瞭な11例をみるといずれも大型土器片を含んでいないことがわかる。原則的に形態B型・埋土A型で中・小型のものは大型土器片を含まないかぎり柱穴と考えられる。形態B型・埋土B型の機能は不明である。何かを埋めた土壙とは考えられるが。もし貯蔵穴が存在するとすれば，形態的にはB型になるものと考えられる。あるいは大型のうち土壙墓以外のものがそれに該当するかもしれないが，今回の結果だけからは何とも言えない。

形態C型の土壙はいずれも大型土器片か多量の炭を包含している。しかし，その両方を含むものはみられない。埋土はA型3例，B型1例である。形態・埋土・包含物・時期を検討すると，この型の土壙は形態A型・埋土A型の大型とよく類似するようである。平面形は確かに異なるが，機能についてはあるいは類似するかもしれない。

形態D型・埋土A型で長辺100㎝以上の大型土壙は墓壙と考える。包含物は土器小片だけであり，このことは形態B型の土壙墓と同様である。遺物が少ないことは他の遺跡での例（註1）でも同様である。形態の特殊性からして土壙墓としてよかろう。形態D型・埋土B型の土壙は2例であるが，いずれも大型土器片を含み，P24（第11図）にはさらに多量の炭も含まれ，埋土の状況は形態A型・埋土B型に類似する。この種の土壙もゴミ穴と考えるべきか。

以上をまとめると，形態A型・埋土B型の土壙，形態A型・埋土A型で中型の土壙，それに形態D型・埋土B型の土壙はいずれもゴミ穴と考えられ，形態B型・埋土A型で大型の土壙と形態D型・埋土A型で大型の土壙はともに墓壙，形態B型・埋土A型の中・小型で大型土器片を含まないものは柱穴と推定される。それぞれの機能をもった土壙の分布をみると，ゴミ穴と柱穴は全域にみられ，調査区全体が居住区として利用されたことが知られる。柱穴をまとめることはできなかったが，検出された以外にも住居址が存在した可能性があり，土壙の中には住居址の中央土壙があるかもしれない。ゴミ穴・柱穴に対し，墓壙は片寄った分布を示す。土壙墓は調査区の南東隅に集中し，土器棺はこれとは離れて散在する。土壙墓の集中は同遺跡内の岡山市教育委員会による新幹線の建設に伴う発掘調査でも確認され（註７），また雄町遺跡でもみられたところであり，墓地という意識が定着していたことを示している。ただ今回の場合，墓地と居住区があまりにも近接しているため，それをどのように解釈するかという問題がある。また土器棺の分離も注意される。土器年代を参考にして各遺構の時代変遷をみると，ゴミ穴・柱穴はⅠ～Ⅳのものがみられ，弥生時代前期後葉から中期後葉までの全期間にわたって存在するようである。この間継続して居住区として利用されたことがわかる。墓壙については，その集中を指摘したが，年代的には問題がある。P165はⅢの土器を出土するが，P140はⅡの土器を出土し，P130はⅠ・Ⅱの土器を出土するP114に切られ，P162もⅠの土器を出土するP116に切られている。この事実からすれば，地域的な集中はあるとしても，時間的な集中はないことになり，先の墓地という概念が妥当性をもつかどうかさらに検討を要することとなる。しかし，今回の小部分の発掘だけでは如何ともしがたい。なお，土器棺はいずれもⅢの中期中葉である。

最後に，ゴミ穴について気付いた点を記す。ゴミ穴は前期後葉から中期前葉にかけて大型のものがいくつか散在する状況にあるようだが，これが中期中葉に至って小型化すると同時に急激に増加する。また埋土の状況をみると，当初はB型がかなりを占めるのに対し，やがてA型のものが圧倒的となる。B型が一定期間開口していたと考えられるのに対し，A型は短期間で埋められたようであり，このことが急激な増加と関わるかもしれない。このゴミ穴における小型化と個数の増大は，先の新幹線建設に伴う発掘調査で検出された「灰穴」の時代的変遷と軌を一にする。今回の調査では「灰穴」に類似する遺構はP１程度で，まったくといっていいほどみられなかった。「灰穴」の性格と相俟って，今後追究されるべき問題であろう。（岡本）

第３節　遺物について

個々の出土遺物の概略については第３章に記述のとおりであり，ここでは遺物の全体的な傾向を概略し，特に土器について編年的に詳しく説明を加えたい。

今回の調査（調査面積約250㎡）で出土した遺物は，土器がコンテナ（54×34×14㎝）に60箱，石器約40点（他に剥片約120片），土製品６点，鉄器１点，人骨２体分などであった。土器は遺構，包含層を問わず全体的に破片，それも大半は小片であった。その中で遺構に伴うものとしては，弥

生時代前期と古墳時代前期の土器が比較的同一時期の一括として取り上げることが可能であったのに対し，弥生時代中期前葉から中葉にかけての土器は数量的にも形態的にもあまり良好な資料に恵まれたとは言えない。また，弥生時代中期後半から後期の土器はほとんど出土していない。石器は石庖丁・石鏃・石槍・蛤刃石斧・砥石などが出土している。これらは種類，数量，形態などに，弥生時代前期から中期を中心とする時期の遺跡と比べて特に顕著な差はみられないが，中でサヌカイトの剝片（といっても比較的大きめのもの）の数が多いことが指摘されよう。

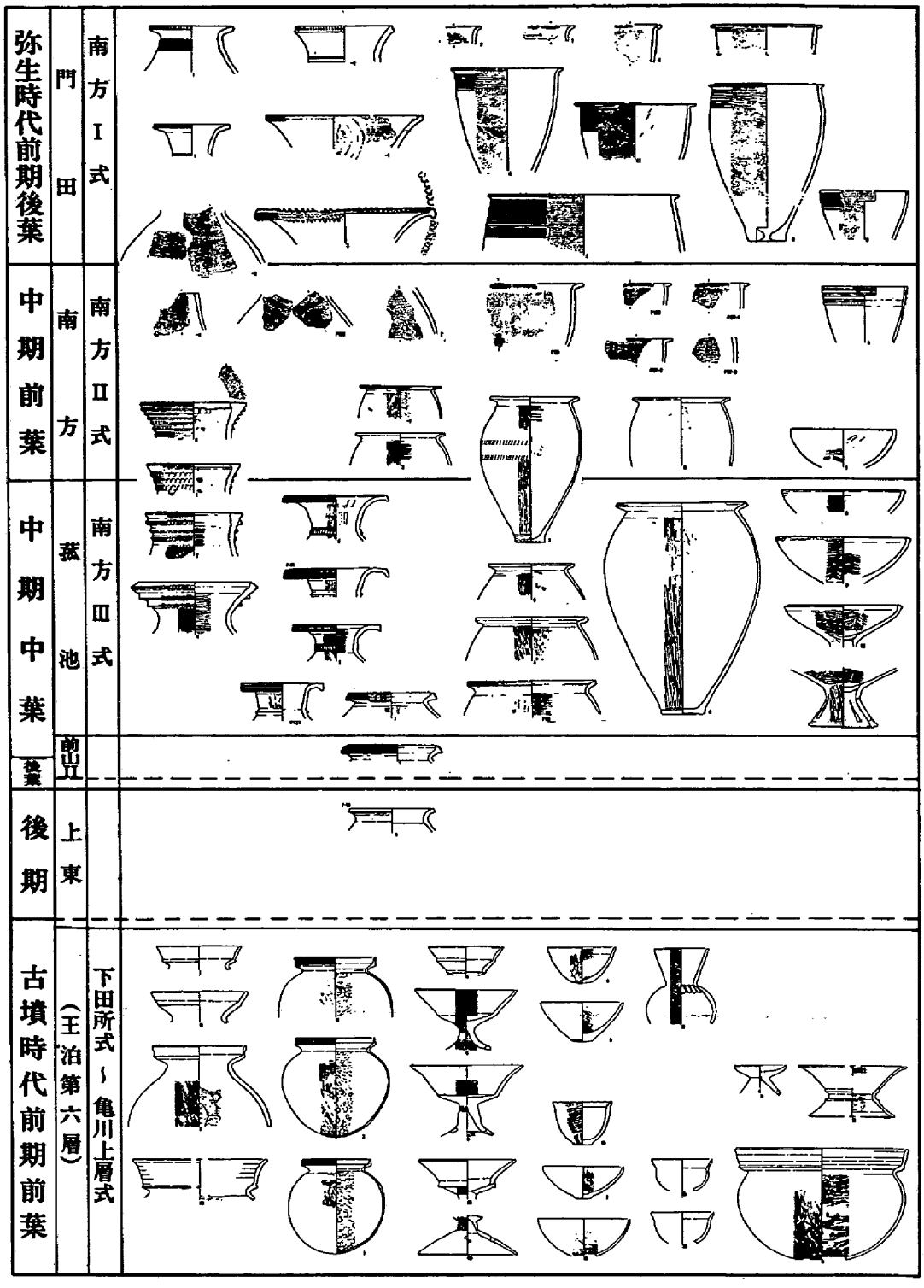
土器編年

弥生時代前期から中期に至る時期の編年については，従来中部瀬戸内地域では，鎌木義昌らによって高尾式（註８），門田式（註９），高田式（註10），菰池式（註11），前山Ⅱ式（註12），仁吾式が設定され，その後前期前半としては山陽地方の弥生土器としては最古のものを出土した津島遺跡の資料，及び中期前半の櫛描文様を主体とする南方遺跡の資料などの補強により，前期を前半・後半，中期を前葉・中葉・後葉の区分の中でそれぞれの型式名として大きく捉える方向が示され，調査資料によりその中を細分し，類型あるいは型式設定の試みも成されている（註13）。

南方遺跡についていえば，戦前から小林行雄により土器実測図が示された（註14）が，実質的には1959年の国立岡山病院本館建設時に多量の土器，石器などが出土したことで注目され，山陽新幹線工事の市道付け替えに伴い1969年～70年に行われた岡山市教育委員会の調査により，南方Ⅰ式～Ⅲ式が設定されるに至った（註７）。

今回発掘調査地点は，岡山市教育委員会調査の南方蓮田遺跡とは直線で東に約100mの距離に位置し，大きく捉えれば同一微高地上を占める。また，第２章・調査の経過で述べたように，県教育委員会が地方循環器病センター予定地を，岡山市遺跡調査団が看護婦宿舎予定地と隣接して調査する結果になり，出土遺物に対して混乱を避けるために，弥生時代についての型式名は南方蓮田遺跡の報告書で使用された南方Ⅰ式～Ⅲ式を踏襲することとした。以下，第59図を参考にして，各時期ごとに土器の形態，手法，胎土などの特徴をもとに説明を加えたい。

南方Ⅰ式　弥生時代前期後葉の門田式と併行関係をもつ一群を指標とする。土壙24，116，128などである程度純粋性をもって出土した一群がこれにあたる。壺形土器の土壙24―１は形態的には口縁部の開きが急激であるなどの特徴に古い要素を見い出せるが，口頸部の篦描沈線の多条化は比較的新しい要素であり，前期前葉には遡り得ない。また，**包―１**，土壙24―**３**の大型の壺形土器は，頸部から下の形態が不明であるが，胎土にやや大きめの長石・石英を含んで同時期の土器と差はなく，これらのもつ装飾は，それ以降中期の壺形土器の一部にみられる装飾性の先がけとなるものであろう。一方，胎土は前期の土器と大差はないが，施文などに中期的要素を示す土壙42―**１**，**包―３**があり，特に前者は欠損する体部に櫛描沈線文や波状文などが伴うならば，南方Ⅱ式に比定すべきかも知れない。甕形土器は，一括して捉えられる土器の中に，口縁部が「く」の字と倒「L」字の二者が併存する。しかし，この中には口縁部下に施される沈線が篦状工具によるもののみで，櫛状工具によるものは皆無である。また，篦状工具による施文についても，広島県中山遺跡（註15）の中山Ⅰ式にみられる「く」の字状口縁の直下に２～３条の沈線をもつタイプと，Ⅱ式にみら



第59図　出土土器編年図

れる「く」の字と倒「L」字口縁が混在したうえ，その両者とも同様に，口縁直下に沈線を多条させるタイプとが明らかに型式差を示すのであれば，土壙24—7，土壙128—1，土壙116—8・4などは南方Ⅰ式の中では古い一群として細分が可能であろう。

南方Ⅱ式　かつて弥生時代中期前葉の古い時期に代表された高田式と，それにつづく櫛描文様を多用化する一群を指標とする（註16）。しかしながら，調査では良好な資料に恵まれず，形態的なことを論じるには無理がある。ただ，壺形土器の包—4，P155，土壙42—2のように，口頸部や肩部を櫛状工具による直線文や波状文で飾るという特徴はこの時期に盛行するものであり，南方Ⅰ式との比較においては，胎土の長石，石英粒が0.5～1㎜前後と小粒で均一化することが指摘できよう。これらのことは甕形土器についてもいえることで，口縁部が倒「L」字状を呈し直下に櫛描沈線を施すP163やP97—1・2・3などは，いわゆる高田式の範疇で捉えられる。しかし，櫛描沈線を施しながらも，篦描沈線を施した前期の甕形土器と土質，焼成，成形法において同一のものについては，前期の範疇で捉える見解（註13）も出されている。一方，甕形土器については高田式に代表される櫛描文様が消失し，薄手で口縁部内面に篦磨きを施すなどの特徴をもつ包—7タイプの土器が存在することは，南方Ⅱ式が少なくとも2つに細分可能であることを示す。壺形土器では口縁部外面に三角凸帯や指頭押圧凸帯を貼り付けた土壙42—3，土壙1—1・2などのタイプが，口頸部だけのため位置づけが困難となっている。しかし，形態的には南方Ⅱ式の前半には遡り得ないと思われ，全体の器形や胴部の文様形態によりⅡ式後半～Ⅲ式前半に位置づけることはできよう。ただ，遺構的に土壙42の遺物が一括として取り扱い可能であれば，小型で深い杯部をもつ高杯形土器とともにⅡ式の後半と考えることもできる。

南方Ⅲ式　弥生時代中期中葉の菰池式や新邸式（註17）と併行関係をもつ一群を指標とする。遺構的にはこの時期が大半を占め，出土土器の量も多いが，その割にはあまりにも断片的である。壺形土器では，口頸部がラッパ状に開き口縁部外面に凸帯を貼り付け，刻み目をもつ土壙126—1のタイプと，口縁部は同様に開くが，おもに口縁端面の凹線の上から線状の刻み目を施し，頸部下位に指頭押圧凸帯や三角凸帯を繞らせる土壙105—1やP61のタイプが併存する。甕形土器については，「く」の字状を呈す口縁部の端部を肥厚あるいは上部にわずかに拡張させる特徴があり，また肩部が少し張りぎみになり底部の上げ底化がほとんどなくなるという傾向をみせる。また，P27や土壙73—4のように口縁端部を肥厚させ，口頸下の屈曲部に指頭圧貼付凸帯を繞らせる大型の甕形土器も存在する。高杯形土器は破片ながら比較的多く伴出しており，口縁端面にナデによる凹部をもち，後出する前山Ⅱ式との関係からいえば，比較的新しく捉えた方がよいかもしれない。全体的に，胎土は南方Ⅱ式のものと区別はつかない。個々の土器についていえば，例えば凹線文や内面篦削りの出現を確認できるものもあり，それらが南方Ⅲ式の細分化を予測させるけれども，今回の調査資料では断片的過ぎるので，全体をⅢ式の中で捉えるにとどまった。

弥生時代中期後葉及び後期については，前山Ⅱ式の土壙54—1や上東式の土壙55—1などが確認できるのみで，古墳時代前期の住居址の時期まで空白期がある。古墳時代前期前葉の土器は，ほとんど住居址からの出土である。ここでは，出土状態などから一括として捉えられる住居址3・4の

出土土器について説明を加えたい。

住居址4の壷形土器は二重口縁を呈し，短めの頸部を有する。口縁部の拡張の程度や頸部の特徴は酒津式（註4）のなごりを見せ，いわゆる下田所式（註3）に併行関係を考えさせる。また，高杯形土器では深い杯部をもち脚柱部が比較的短めで，裾部との間に極端な屈曲がみられない点なども下田所式の特徴をそなえている。ただ覆土から出土している16の直口壷型土器は，口縁部の発達状態からすれば亀川上層式（註3）まで降るであろう。一方，住居址3の土器は，口縁端部拡張外面に櫛描直線文を施す甕形土器では，胴部が完全に球形化している1や，胴部最大幅が多少上位にある2などが混在しているが，全体的には亀川上層式に併行関係をもつと考えられる。しかし，小型器台形土器や小型坩形土器に口縁部の拡張が少ないことからみれば，これらは比較的下田所式に近いものであろう。いずれにせよ，出土土器の型式でいえば下田所式～亀川上層式の中で捉えられよう。

（柳瀬）

第4節　本発掘調査の意義

今回の調査はきわめて小面積についてであり，広大な南方遺跡の一端を垣間見たにすぎないが，それなりの成果はあげえたと思う。以下，成果なり，問題点を列挙し，おわりとしたい。

まず，今回の調査を過去の新幹線建設に伴う調査との関連で捉えた場合，土壙墓が集中して数基検出されたことは注意される。それは，過去に検出された墓域がどの程度の範囲の集団のものであるかを考えさせ，ひいては当時の集団構成・集団支配のあり様にもつながる問題を含んでいる。今回検出された土壙墓群との間にはまちがいなく居住区が存在しているのであり，1つの集落とその墓域とのつながりを考える上で重要な資料となろう。

次に，土器編年上で新たに資料を提示しえたことがある。あまり良好な一括資料はなかったが，それでも従来この中期前葉から中葉にかけては資料が少なかったため，今回の完形資料を含め，その内容をより詳しくしえたと考える。

3番目は古墳時代前期の住居址群を検出したことである。過去の調査においても土器の出土はみられたが，今回の調査によって，この遺跡が古墳時代にも集落として十二分に機能していたことを示した。

4番目は弥生時代後期における遺構の消滅がある。これは，近接する津島遺跡（註18）と比較した時，より鮮明となる。たまたま南方遺跡内のこの地域で後期の遺構がみられないのかどうか，今後注意しておく必要がある。なお，過去の調査でも後期の遺構はほとんど検出されていない（註7）。

他にもまだ取り上げるべき問題点があるかと考えるが，とくに重要なものはこれらの諸点であろう。

（岡本）

註１　正岡睦夫・葛原克人他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972

註２　江見正己・浅倉秀昭・中野雅美・内藤善史他『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39　岡山県教育委員会　1980

註３　柳瀬昭彦「川入・上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16　岡山県教育委員会　1977

註４　間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷出土の土器」『瀬戸内考古学』２　1958

註５　岡山市雄町遺跡第４調査区建物１のように複数の柱穴から同一個体の土器片が出土し，意識的な柱穴への投棄を想定させる場合もある。（註１）

註６　岡山市百間川原尾島遺跡左岸用水４－Ｐ－30，同４－Ｐ－20，同３－50（註２），備前市船山遺跡舟形土壙１（泉本知秀「船山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会1972）などがある。

註７　出宮徳尚・伊藤晃『南方遺跡発掘調査概報』岡山市遺跡調査団　1971

註８　鎌木義昌・高橋護「岡山県高尾遺跡」『日本農耕文化の生成・本文篇』日本考古学協会編　1961

註９　鎌木義昌「門田貝塚の文化遺物について」『吉備考古』84　1952

註10　鎌木義昌・近藤義郎「岡山県高田遺跡」『日本農耕文化の生成・本文篇』日本考古学協会編　1961

註11　鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成・本編Ⅰ』1968

註12　鎌木義昌「岡山県児島市福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成・資料編２』　1961

註13　正岡睦夫他「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972
高橋護「弥生土器―山陽１―」『考古学ジャーナル』173　1980

註14　小林行雄『弥生式土器聚成図録解説』1938

註15　松崎寿和・潮見浩「広島県中山遺跡」『日本農耕文化の生成・本文篇』日本考古学協会編　1961

註16　註７の中において出宮は南方Ⅱ式を「高田式土器型式が中期前葉でも古い時期に比定されているので，これに次ぐ南方Ⅱ型式は，中期前葉の新しい時期と考えられる」との見解を示しているが，筆者はここでは南方Ⅱ式は中期前葉全般を含み，その中の細分として高田式を考えたい。

註17　近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』８　1953

註18　岡山県津島遺跡発掘調査団『岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会　1970

付

岡山市南方遺跡出土の弥生時代人骨について

京都大学理学部自然人類学研究室
教　授　池　田　次　郎

岡山市南方遺跡からは，これまでに３体の弥生人骨が出土しているが，昭和55年１月，岡山県教育委員会による国立岡山病院敷地内での発掘調査の結果，弥生時代中期中葉に比定される人骨１体が発見され，資料が追加されたので，これについての所見を述べる。

埋　葬　状　況

人骨は，その長軸を北西一南東にとる長楕円形の土壙内に，頭を北西に向け仰臥屈位で埋葬されている。頭蓋は顔面を尾側わずかに上に向け，下顎骨は頭蓋骨と関節した状態にある。第１頸椎から第６頸椎までは頭蓋の下にあるが，すべての椎骨は椎体前面を上にしている。胸骨，左右の肋骨，鎖骨，肩甲骨も仰臥の場合の正常な配置を示している。胸郭の両側にある上腕骨は，左右とも前面を上に向け，肘を強く屈げ，橈骨，尺骨の遠位端は，左では上位肋骨の上，右では上位肋骨の外側，すなわち腋のあたりに位置している。仙骨，寛骨，大腿骨の近位部は，土壙を斜に横切る側溝により切断され，仙骨，寛骨は一部を残すにすぎないが，仙骨では骨盤面が，寛骨では仙骨盤面が上になっている。左右の股関節は，大腿骨の骨体軸が軀幹の軸とほぼ直角になるほど強く屈げ，左右並行に伸びる大腿骨の遠位端は，左では土壙底より約20㎝高いところにあるが，右では骨盤と同じレベルにある。膝関節も左右強く折り屈げているので，４本の下腿骨は並行に伸び，足骨の位置は軀幹軸の延長上にある。下方にある右の脛骨，腓骨は土壙の底にあるが，近位端のレベルが高い左の脛骨，腓骨は遠位端に向って傾斜し，遠位端は右のそれと同じ高さにある。左足骨は内側部を，右足骨は外側部を上に向けている。左の踵骨の上にある右膝蓋骨を除いては，すべての骨が埋葬時の位置にとどまっている。

人骨と土壙の関係についていえば，頭蓋骨の後頭部，左大腿骨遠位部および下腿骨近位部，左右の足の指骨は，土壙の壁に沿い，右上腕骨および右膝，左右中足骨は土壙底部の縁にある。これらの位置関係から，遺体を小さな土壙内におさめるために，股関節，膝関節を強く折り屈げ押しこんだと推定されるが，これは後述するように被葬者が高身長であったことと関連するかもしれない。

人骨の保存状態

発掘時における人骨の状態はきわめて良好であったが，骨質がきわめて脆弱なため，取り上げた後の破損がいちじるしく，原形に復元できた骨は少ない。

頭蓋骨（図版25）：後頭骨は，人字縫合で頭頂骨と離れ，頭蓋腔内に落ちこんでおり，また土圧による変形もいちじるしく，また頭蓋冠には無数の亀裂が入っているので，接合し原形に復元することは不可能である。顔面頭蓋では，右頬骨全部，左頬骨前頭突起，左上顎骨の眼窩縁など，眼窩

周辺および右頬骨弓が欠損するが，上顎骨の骨体，歯槽突起，口蓋突起には破損も少なく，また変形の程度も弱く，比較的よく原形をとどめている。

下顎骨（図版26—1・2）は，左半分がよく残っているが，正中部から第2小臼歯の下あたりまでの下顎底を欠く。右では，下顎枝の大部分，第2・第3大臼歯の歯槽部，下顎底では正中から第1大臼歯まで，歯槽縁では正中から第2小臼歯までの下顎体が左の下顎体に続いている。舌骨体も残存する。

上顎左第3大臼歯，右側切歯を除く歯牙が残存するが，歯冠の破損がいちじるしく，歯冠が明瞭に観察できた歯は，上顎左中切歯，側切歯，第1・第2大臼歯，右中切歯，犬歯，第1・第2小臼歯，第1・第2・第3大臼歯，下顎では左右の第1・第2・第3大臼歯だけである。

胴骨：椎骨，肋骨はすべてそろっているが，破損がいちじるしく，胸骨も小破片である。

上肢骨（図版26—3）：左右の鎖骨は骨体だけで，肩甲骨では左右とも関節窩付近，肩峰，肩甲棘の破片が残存する。右上腕骨はほぼ完全であるが，骨体中央部に欠損部がみられ，左上腕骨は，骨体中央部，遠位部外側縁などがこわれている。上・下肢の長骨は，いずれも骨体表面の緻密質がはがれている部分が多い。右の橈骨，尺骨は，ともに骨体が破損しているため接続できないが，左尺骨はほぼ完全で，左橈骨も完全には復元できないが，大部分が残存する。手骨としては，左の有頭骨，月状骨，中手骨，右の舟状骨，月状骨，有鈎骨，豆状骨，中手骨，指骨が残存する。

下肢骨（図版26—4・5）：右寛骨では腸骨棘，腸骨粗面，耳状面，寛骨臼の大部分，左寛骨では腸骨の腸骨棘よりの部分が残存する。大腿骨は，右の骨頭と骨体中央付近から遠位端まで，左の大転子から遠位部の骨体があり，右膝蓋骨も破片ながら残っている。下腿骨では，右側の保存状態がよく，脛骨はほぼ完全，腓骨も遠位端を欠くだけであるが，左では，脛骨は脛骨粗面より近位部を欠き，腓骨は破損がいちじるしく接合できない。足骨では，左の距骨，踵骨，第2・第3楔状骨，第1～5中足骨，指骨の破片，右の距骨，舟状骨，立方骨，第1・第2楔状骨，第1～3中足骨，指骨の破片が残存する。

性，年齢の判定

恥骨，大坐骨切痕など性判定の基準として最適の部位は残存しないが，下顎頭，寛骨臼，四肢長骨の近位，遠位端などきわめて強大で，また鎖骨の円錐靱帯結節，上腕骨の大結節，小結節，外側上顆，大腿骨の殿筋粗面，粗線，脛骨のヒラメ筋線など，筋，靱帯の付着部もいちじるしく発達しているので，本資料は男性としての特徴をそなえているといえよう。残存する大臼歯歯冠の磨耗はかなり進んでおり，矢状縫合，左人字縫合はすでに癒合しているので，その死亡年齢は壮年後半から熟年前半と推定される。

人骨の特徴

頭蓋骨：すでに述べたとおり，脳頭蓋は変形がいちじるしいので，比較的原形に近いと思われる顔面頭蓋，とくに上顎骨について，その特徴を述べる。中顔幅（100㎜），上顔高（65㎜）からウィ

ルヒョーの上顔示数を算出すると低型と過低型の中間に入り，鼻高（45㎜），鼻幅（24㎜）から算出される鼻示数も低型に属す。しかし，実際には高径はこれより大きく，幅径は小さい可能性が高いので，本資料の顔面はそれほど低かったとは考えられない。上顎歯槽長52㎜，上顎歯槽幅65㎜，口蓋長46㎜，口蓋幅42㎜，口蓋高17㎜で，上顎歯槽示数．口蓋示数はともに広型で，口蓋はいちじるしく深い。歯槽側面角は計測できなかったが，歯槽性突顎はかなり強い。下顎骨の計測値としては，左下顎枝高70㎜，下顎枝幅33㎜，下顎体厚15㎜が計測できた。下顎頭は大きく，下顎切痕は深く，オトガイ隆起は強く突出し，弱い角前切痕が認められる。なお，後頭骨にはインカ骨があり，外後頭隆起はかなり強い。

上肢骨・下肢骨：肩甲骨と四肢長骨の計測値を付表に示す。肩甲骨の関節窩長幅示数は比較的大きく，上腕骨の頭横断示数は小さい。脛骨の中央断面示数は大きく，狭型に属し，腓骨の中央断面示数は小さい。四肢骨の計測値は，ほとんどすべて大きい。

全長を計測することができた左上腕骨，左尺骨，右脛骨の最大長から藤井式を用いて推定身長を算出すると，それぞれ166.3㎝，165.0㎝，165.9㎝となるので，被葬者の身長は165～166㎝程度であったとみられる。この数値は，ピアソン式で推定された津雲縄文人（159.7㎝）はもちろんのこと，三津弥生人（162.0㎝），土井ケ浜弥生人（162.8㎝）の平均値よりも大きく，高身長であるといえよう。

以上，南方弥生人は，高身長という点では，三津，土井ケ浜など北九州・山口地方の弥生前期人と一致するが，後者のもう一つの特徴である高顔であったかどうか，この点に関しては明らかでない。

本資料を調査する機会を与えて頂いた岡山県教育委員会の各位に感謝の意を表したい。

付表：体肢骨の計測値と示数

	左	右
肩甲骨		
関節窩長	37	39
関節窩幅	27	30
関節窩長幅示数	73.0	76.9
上腕骨		
最大長	(330)	
上端幅	54	53
下端幅	61	
頭周	146	143
頭最大横径	44	43
頭最大矢状径	48	48
頭断面示数	91.7	89.6
橈骨		
頭周		75
下端幅	36	37
尺骨		
最大長	264	
生理長	242	
上関節面高	40	39
上幅	30	31
横径	18	
上横径	19	
上前後径	20	

	右
大腿骨	
上顆幅	82
外顆最大長	61
内顆最大長	61
外顆後高	36
内顆後高	25
脛骨	
最大長	372
最大上端幅	78
上内関節面深	51
上外関節面深	41
最大下端幅	52
中央最大径	(30)
中央横径	(22)
中央断面示数	(73.3)
腓骨	
中央最大径	20
中央最小径	13
中央周	(52)
中央断面示数	65.0

調査地区全景（東から）

図版 2

1　住居址1 検出状況（北西から）

2　住居址2 検出状況（北から）

1　住居址2 検出状況（東から）

2　住居址3 全景（東から）

図版 4

1　住居址3 南壁方形土壙全景（北から）

2　住居址3 土層断面

1　住居址4 検出状況（東から）

2　住居址4 床面遺物出土状況（北西から）

左）住居址5 検出状況（南から）　右）住居址6 検出状況（南東から）及び土層断面（北西から）

住居址7　上）検出状況（南から）　中)･下）土層断面（北から）

図版 8

1　土壙27 土器棺検出状況（東から）

2　土壙25 A 土器棺検出状況（西から）

1　土壙74 遺物出土状況（南から）

2　土壙31 遺物出土状況（東から）

図版10

1　土壙73・74 土器出土状況（東から）

2　土壙1 土層断面（東から）

1　土壙24 全景（北から）

2　土壙128 土層断面（南から）

図版12

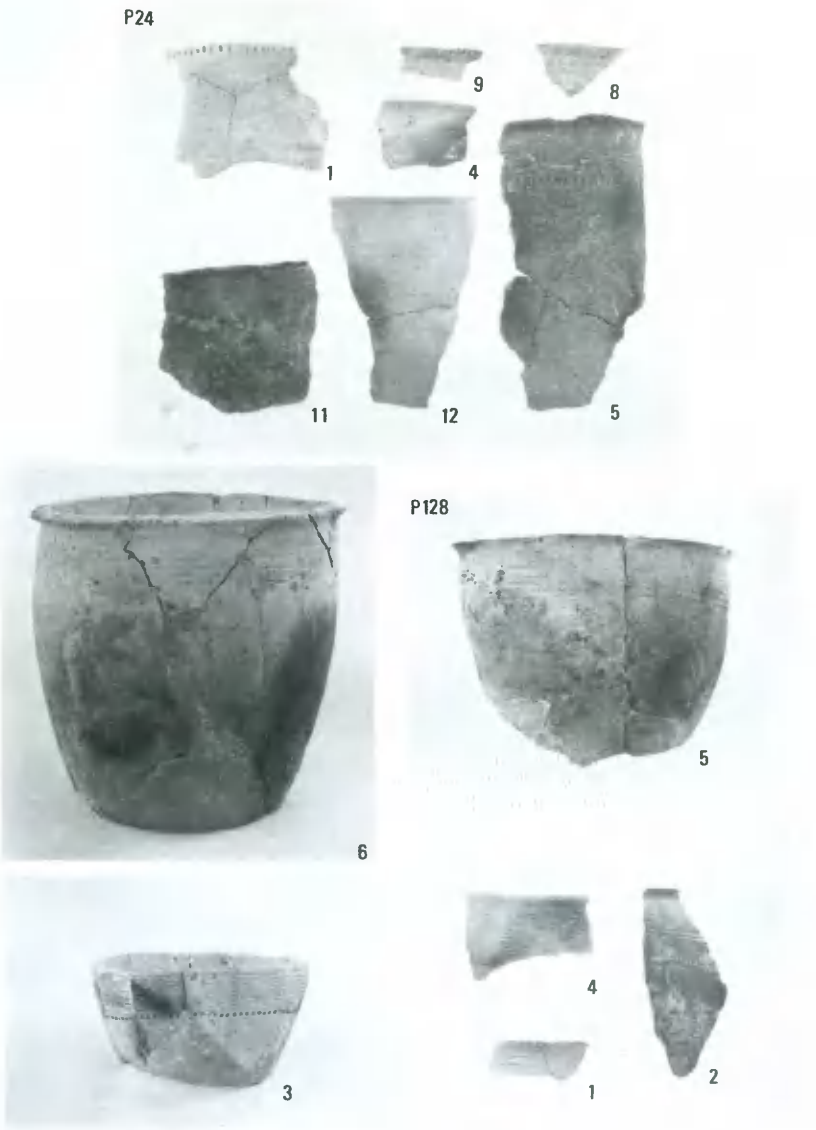
1　土壙42 土層断面

2　土壙61 土層断面

1　土壙40 全景（東から）

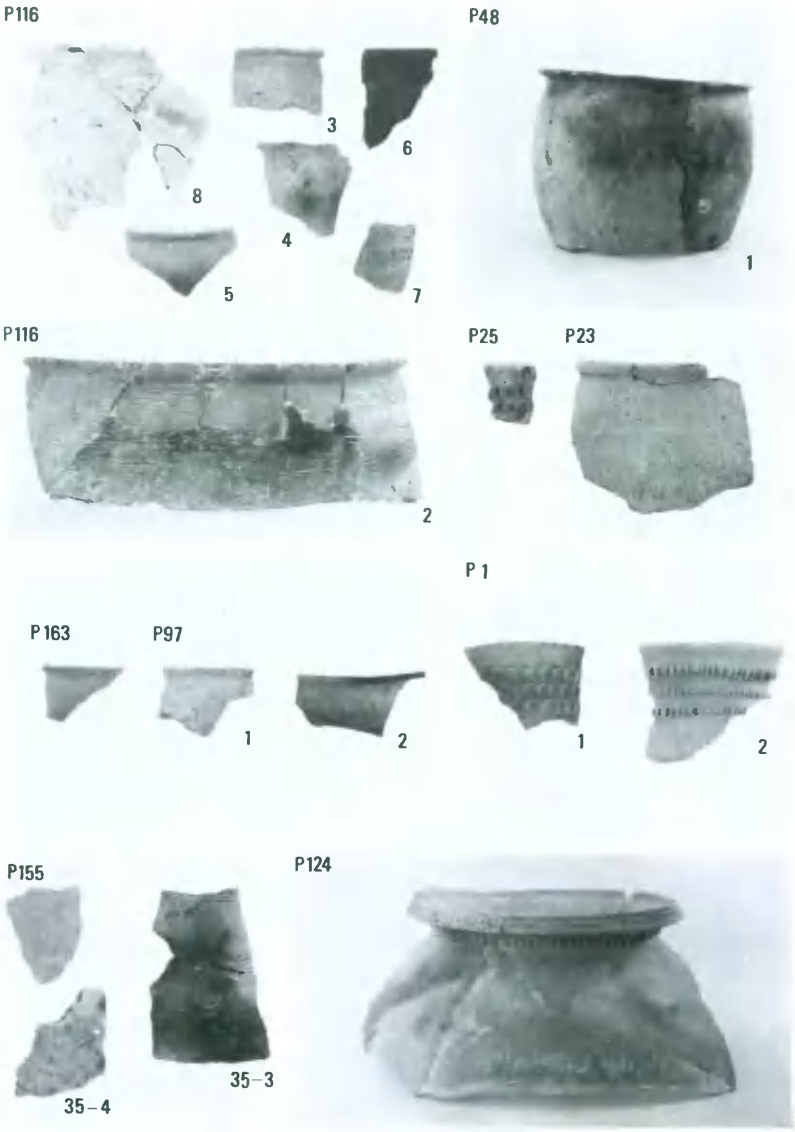
2　土壙48 半掘状態全景（北から）

土壙165 人骨検出状況



土壙24・128 出土土器

図版16



各土壙・包含層出土土器

P73

3

P73

4

P92

7

P74

5

P92

6

土壙73・74・92 出土土器

図版18

P25A

9

P17

P127

P105

1

P105

4

各土壙出土土器

P126

1

2

P27A

土壙126・27A　出土土器

H3

1

2

11

4

5

6

7

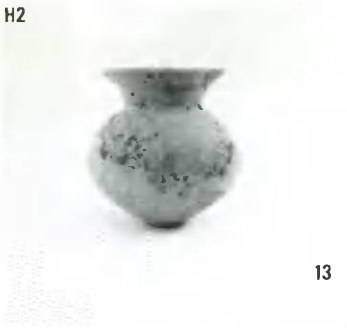
14

25

8

住居址３　出土土器

H2



13

H3

39

40

H4

16

2

9

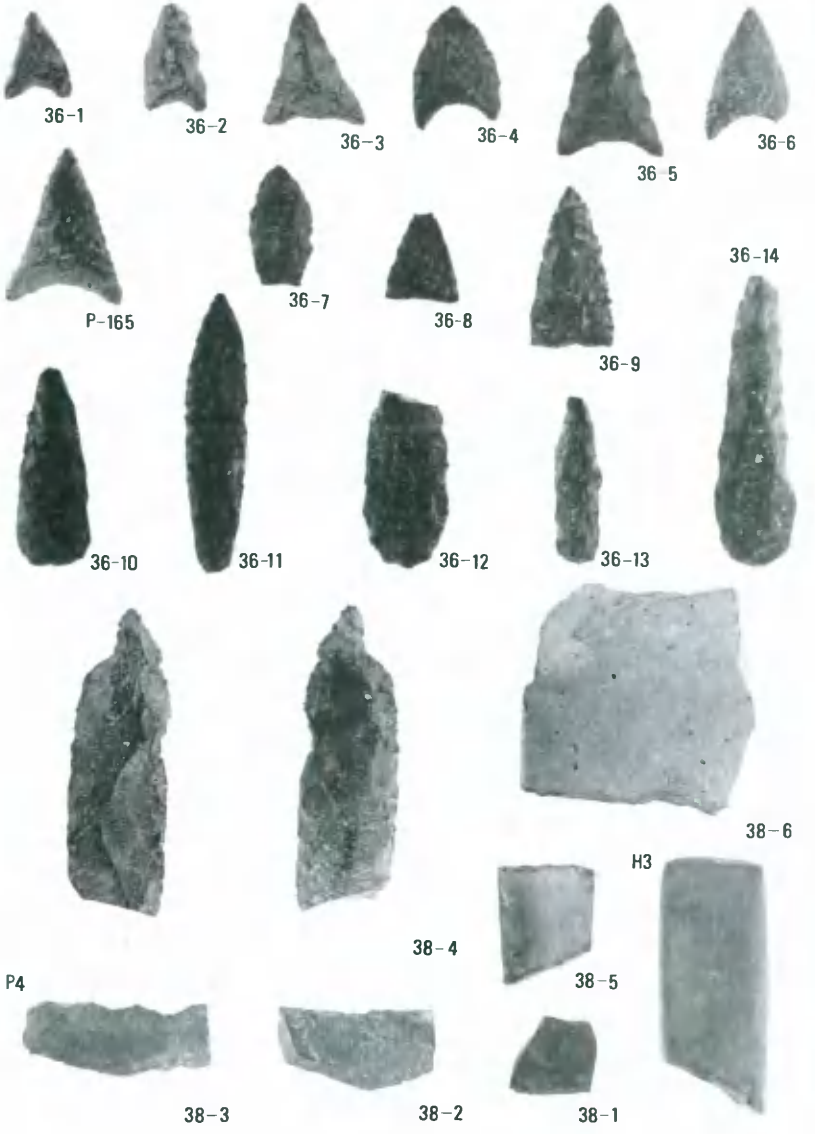
8

25

4

5

住居址2・3・4 出土土器



住居址・土壙・包含層出土石器

P128

37－2

P147

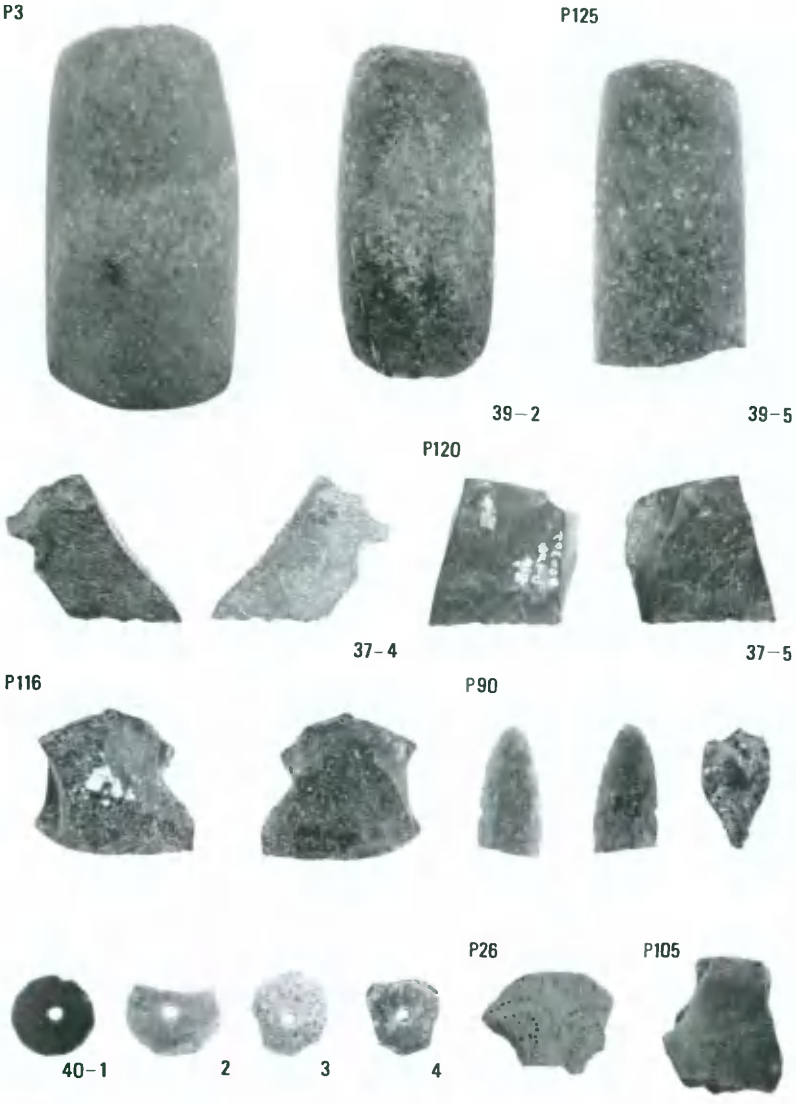
37－1

37－3

37－7　　37－6

土壙・包含層出土石庖丁

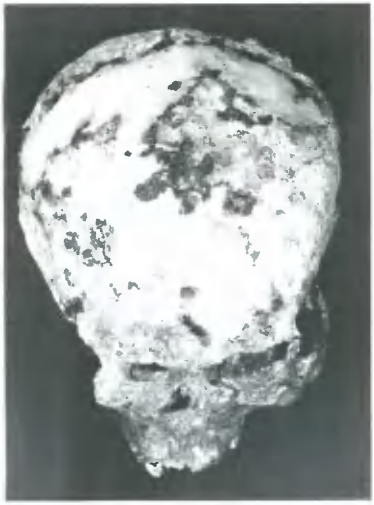
図版24



土壙・包含層出土遺物

前面観

側面観



上面観

底面観

南方弥生人骨：頭蓋骨

図版26

1・2 下顎骨

3 左上腕骨と尺骨

4 左右大腿骨

5 左右脛骨と右腓骨

南方弥生人骨：下顎骨・四肢骨

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 40

南　方　遺　跡

—国立岡山病院地方循環器病
センター建設に伴う発掘調査—

1981年3月20日　印刷
1981年3月30日　発行

編集
発行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2—4—6